

オーラルヒストリー

——エジネーに生きる母たちの生涯

小長谷有紀・サランゲレル・兎玉香菜子 編

目次

まえがき・・・・・・・・・・・・・・・・小長谷 有紀・・・・・・・・・・・・・ 1

ユムさん・・ 1

ボルさん・・ 6

カンダさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 12

ジョージョー・ボルさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 18

ツエレンナドメドさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 25

ナランさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28

マーモーハイさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 34

デムジドさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 37

ドルマンツオーさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41

ドルガルジャブさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 46

マリヤさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 54

ジブザンさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 57

チャルマーさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 62

ドルガルツオーさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 67

ドルマジャブさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 70

エー・ボルさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74

アビルミドさん・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 79

あとがき・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・サラングレル・・・・・・・・ 82

植物名一覧表

児玉 香菜子

地図

児玉 香菜子

写真

まえがき

二〇〇二年夏、私たちは中国内蒙古自治区の最西端にあるアラシャール盟のエジネー旗において、自然資源や水利用に関する現地調査をおこなった。その結果、社会・歴史・文化および民間の風俗習慣などに関して予想以上の成果を得ることができた。それらはさまざまな書籍等にまとめられてきたが、ここにさらに一冊を付け加えたい。

エジネー旗は、東をアラシャール右旗、西を甘肅省肅北蒙古族自治州、南を甘肅省金塔県、北をモンゴル国に接する国境地区である。その境界線はおよそ五百十四、六九キロメートル、総面積は十一万四千六百五平方キロメートル、人口はおよそ一万六千人である。当該地区での気候は概して降水量が少なく乾燥しており、冬は寒くて夏は暑く、寒暖の差が大きい。近年ではとくに砂漠化が著しい地域として知られている。このような地域での水資源や植生などについて、老人からうかがった話をまとめたのが本書である。

老人たちからお話をうかがうために相前後して五回、現地を訪問した。動物や植物などの自然環境の変化についての情報を得ることができたばかりでなく、自然環境と密接に係る生活、社会の歴史的変容についても理解することができた。とりわけ、「文化大革命」という歴史的事件については否応なく聞き及ぶこととなり、当該「運動」が人びとの生活や人間関係、そして人生に対してどのように深刻な影響を与えてきたかを具体的に知ることとなった。老人たちの多くは自然環境や社会環境の変化すなわち歴史について語るにあたって、「文化大革命」を避けて通ることはできなかったのである。

私たちはかつて、内蒙古自治区の他の地域や新疆ウイグル自治区あるいは青海省にいるモンゴル族のあいだでも現地調査をおこない、老人の話を書くことはあつたが、これほどまでに「文化大革命」の話題が出たことはなかった。言い換えれば、それらの諸地域に比べてここエジネー旗ほど「文化大革命」が深刻な地域はなかったのである。そしてそれは当該地域の地理的位置と無関係ではない。

当該地域は、歴代王朝の統治者たちによって注目されてきた、きわめて重要な場所である。その地理的位置は、東西を結ぶシルクロードと南北を結ぶ草原の道との交差点にあり、軍事上の要塞として重視されてきた。モンゴル族にとっては、内蒙古とモンゴル国、新疆のオイラー・トモンゴルと青海、甘肅のホシュートモンゴルなどを結ぶ要であつた。さらに、インド・チベット方面から仏教が普及するうえでの文化的交通の要地にあたり、独特の文化が開いた場所でもある。エジネーは通例、エジネー・トルゴード旗などと呼ばれているが、実際にはモンゴル国の主としてハルハヤ、トルゴード、ホシュート、トメト、モンゴルジンなどさまざまな出自をもつ人びとが混在し、文化的多様性を帯びた国境地帯なのである。

私たちが話をうかがった老人たちのなかにも、モンゴル国、新疆、フフホト市周辺、遼寧省、青海、肅北など各地から来た人びとがいた。なかでも多かったのはモンゴル国から来た人たちである。おそらく私たちは合計八十人くらいの人びとを訪問しただろう。そのうち六十歳以上の老人たち二十三名についてはライフヒストリーを語ってもらった。本書では、そのうち十七名のエージたちについて、モンゴル語のテキストを整理し、日本語に翻訳した。エージとは母を意味するモンゴル語である。子どもを自ら産むことのなかった女性も含めて、ここではみな母として生きてきたことを重視して、「母たち」と呼びたい。

出版に先立って、私たちはそれぞれの母から、ライフヒストリーを出版してよいかどうかと意向を尋ね、原稿を読み上げて確認した。善良な「母たち」は、これまで心中に隠していたことについてその価値を云々することなく私たちに語ってくれた。にもかかわらず、すべての内容を記すことができないのはひとえに私たちの能力不足によるものである。残念なことに、本

書の刊行を見る前にすでに何人もの老人が亡くなっている。

ここで、私たちは二つのことを伝えておきたい。

第一に、草原のように広い心と豊かな生活経験を持ち、慈母のように私たちに貴重な知識を教え、何度も訪問を受け入れて、その人生を詳しく話してくださった母たちに、厚く感謝を申し述べる。また、本書の完成を見ることなく亡くなった、エー・ボル、カンダ、ドルマンツォー、ドルガルツォー、マリヤ、アビルミドさんから母たちに哀悼の意をささげ、その魂の安らくなることを祈り、本書を彼らによる永遠の名作として献上したい。

第二に、本書に記録されたライフヒストリーは、単に個人の歴史ではなく、当該地域の社会の歴史を反映している。例えば、当該地域において裕福な五あるいは六戸の遊牧民がいたこと、多くの貧しい人びとが彼らのもとで使用人として暮らすことによって糊口をしのいできたこと、けれどもそうした経済格差を超えて人びとのあいだで大いに養子縁組の慣行がおこなわれ、福祉制度や医療制度に依存することなく、セイフティネットをもっていたことなど、社会の実態を「人間のネットワークの総体」として立体的に描くことのできる事実が含まれている。こうした歴史的事実は、必ずしも史料に記されていないけれども、重要であることは疑いない。将来にわたって、本書の内容が歴史資料として大切に扱われることを希求する。

最後になったが、現地の人びとへの案内役をして、惜しめない支援をしてくださった、エジンネー旗の元副旗長にして、若き郷土史家でもあるアルタンツエツェグさん、旅行会社社長のナスンデルゲルさん、退職後も依然としてモンゴル文化の発展のために努めるナラントヤー、ナランチメグ、ツェベグジャブさんらの厚き友情に心からお礼を申し上げます。

日本・国立民族学博物館 小長谷有紀

二〇〇六年十二月

ユムさんは未年生まれの七十三歳。人びとから「ユム・エージ（ユムお母さん）」と呼ばれている。一九三一年、中国内蒙古自治区アラシャー盟エジネー旗のバヤンボグドに生まれた。ユムさんは七人きょうだいの末っ子で、兄四人と姉二人がいた。上の兄が寺の管理係だったので、家はいつも寺に近い牧草地を選んで建てられていた。家畜は、寺から預かっているヒツジやヤギが三百頭とロバが十数頭いて、まずまずの生活だった。ユムさんは七歳のときから母親とともにヒツジやヤギの群れを放牧するようになったと言う。幼いころ放牧していたときの故郷には、ゼルリグ・オロス（野生の麻）が生えているオロスト（麻のあるという意）湖、ホルスト（葦のあるという意）湖、フルジグド（河川跡のトネリコという意）湖など湖が多く、シヘル・ボヤー（甘草）の生える美しいところだったと回想して話してくださった。

—子どものころの状況について話していただけますか？

わたしは十五歳で嫁に行きました。

一九四六年のある日、子ラクダ連れの雌ラクダに荷物を積んだ多くの人たちがラクダを曳き、雌ラクダや子ラクダを鳴かせながらわたしの家の外にやって来て下営し、ゲル（移動式住居）を二、三軒建てました。それがわたしを嫁にもらう家なのでした。そのまま彼らは結婚式の準備のために十数泊しました。

その十数日間、わたしは一軒のゲルの中に閉じ込められて外に出ることは許されませんでした。二人の兄嫁が交代でわたしを見張っていました。いま考えてみればやはり子どもでしたね。ゲルのフェルトの薄いところに小さな穴を開けて、そこにやって来た家の様子をのぞいていたのです。

わたしの姑の名前はアビルミドでした。エジネー旗では有名な裕福な家の一つでした。舅は、この妻と折り合いが悪く、やがて家を出て行きました。それで姑は夫のいない一人暮らしとなりました。

彼女には養子が四人いました。わたしの夫は唯一の男の養子で、ほかに姉が二人と妹が一人いて、すべて養子でした。わたしが嫁いだとき、二人の姉はすでに結婚しており、二人の姉婿たちがいましたが、そのほかにも約十人の召使がいました。実際のところ、養子たちは息子も娘たちも、その嫁とその婿たちも、ある意味で召使でした。夫の一人の姉がウシの乳しぼりをし、もう一人の姉がラクダの放牧をしていました。二人の姉婿は屋外で雑多な仕事をして、嫁のわたしはヒツジの放牧をしていました。

姑は夫の妹ミダグをたいへん可愛がっていました。ほかの子どもたちやわたしたちはみな姑に殴られていました。姑はたいへん厳しい人でした。わたしが最もひどく殴られたのはある年の移動中で、わたしがヒツジの群れを追って進んでいたときでした。わたしにはいつまでも忘れられません。

そのとき、わたしは歩いてヒツジの群れを追っていました。群れが大きかったので一人で追うのはたいへんでした。姑はミダグを抱きかかえてロバに二人乗りしながら、荷物を載せたロバの群れを追っていましたが、ロバは茂みの草が食べたくなかなか思うように進んでくれなかったのです。ロバが手に負えなかった姑はわたしを呼んだのですが、わたしはヒツジの群れで精一杯でしたので、彼女を助けることができませんでした。

ところが、わたしが群れを追いながらふと気がつくとき、姑はロバに乗ってこちらに向かっています。わたしはドキッとしました。殺されるわと思っていると、近づいた姑は、

「この子を降ろして」

とミダグをわたしに渡しました。姑の表情や声にあまり怒りが現れていなかったのです。わたしはすばやく妹を引き取って地面に降ろしたのですが、その途端、姑はわたしを殴りはじめまし

た。頭や顔といわず叩きに叩いて、

「おまえは耳が聞こえないのか」

と罵りながらひとしきり叩きおいて、また娘を抱いて乗せて去って行きました。

わたしはたいへん悲しかったのですが、痛みをこらえながら群れを追ってうしろから進むしかありませんでした。姑は荷積みのロバとともに先に移動先へ到着し、ゲルを建てて室内を整えてから、夫にわたしを迎えに来させました。

迎えに来た夫を見て、わたしは姑に殴られたことを訴えて泣きたいと思いましたが、夫も日ごろ殴られているので、悔しい気持ちはみな同じではないかと思ひ、黙っていました。夕暮れになり、ようやく群れを追って到着したときには食事の用意もできていました。

「お前は家畜を放り出して行ってしまうかもしれないと思っていたけれど、来てくれたね。肉を食べなさい」

と姑はわたしにヒツジのあばら骨を一本取ってくれました。あのときはほんとうにひどく殴られましたね。

——ご主人のお名前は？

夫の名前はツェレンダライでした。当時、国民党の軍隊に強制連行されましたが、その後、人民解放軍になって、その関係で蘭州にある軍の学校で勉強し、一九五九年に帰って来て、わたしは結婚しました。結婚する前も夫は時おり軍隊から戻って来ていました。一九五九年に夫はエジネー旗の役所に勤めるようになりました。夫は癌で亡くなりました。

——当時の生活についても少し話していただけますか？

わたしは末っ子だったのでかなりわがままに育ちました。八歳まで母の乳を飲んでいました。十五歳のときに母の意志でアビルミドと言う裕福な家に嫁がされましたが、父はたいへん嫌がっていました。

「末っ子の娘をこの年で嫁にやることはない」

と母と喧嘩して、母に対してとても怒っていました。しかし、母の主導権によってすでに先方との話が決まっていたので、仕方がありませんでした。父は怒ったままわたしの結婚式には出ませんでした。

わたしたちの結婚式は盛大でした。兄嫁たちがわたしの長い髪を二つに分け、花嫁を連れて行く段取りになったところで、母からの乳を味わう儀式のとき、わたしはかなり泣きました。

自分の家から連れ出されて見知らぬよその家に案内されたときはたいへん寂しく思い、言いたいことがない嫌な気持ちになりました。しかし、わたしはまだ幼かったので生活の厳しいルールを知らなかったと言えるでしょう。いったん嫁に行けば実家に戻るのはいへん難しくなるというときに当時はまったく気づきませんでした。子どもの遊びのように思っていました。

その後、長年にわたって母を恋しく思うとき、家を恋しく思うとき、あの一日の儀式によって一生の運命がすべて決まってしまったのだと、はつきりとわかったのです。

姑はとても厳しい人でしたが、夫はたいへん良い人でした。

わたしは十五歳で嫁に行き、十六歳のとき、一九四七年に妊娠しました。妊娠八ヶ月のときに引越しをしていましたが、移動中に姑が何かの薬を飲めと言うので飲みました。その薬を飲んだあと、急にお腹が痛くなり、流産しました。それからわたしは生涯、妊娠しませんでした。姑がいったいどんな薬を飲ませたのか、そもそもなぜ薬を飲ませて墮胎させたのか、わたしはいまだにわかりません。その年の冬、わたしは姑と放牧するためにゴロナイへ移動しました。越冬して一九四七年の春ゴロナイから戻る途中でそのように流産したのです。

ゴロナイは良い冬营地でした。そこは葦が高く生えるのでウマが入っても見えませんでした。ゴロナイには水溜りがありました。しかし、溜まり水は家畜に飲ませて、人間は飲みませんでした。人間は井戸水を飲むのです。なぜ溜まり水を飲まないかと言えば、それを嫌っていたわけです。流れの無い水を良くないと見なしていました。

——家畜の乳しぼりについてはどうでしたか。一日に何回しぼっていましたか？

ヤギは朝一回しぼります。ゴロナイにいたときはウシの乳しぼりもしていました。ウシがたくさんいました。乳しぼりは自分たちの生活のためにすることで、乳を売ることはありませんでした。

——当時の移動の状況について話していただけますか？

むかしバヤンボグドにいたときはそれほど遠くまで移動しませんでした。近くに移動します。冬はゴロナイまで移動します。ウマ、ウシ、ラクダのすべての家畜を追って移動します。春になれば、また河岸の方向、バヤンボグドに移って来ます。

家畜の食べる草としては、ホルス（葦類）、ヒヤグ（別名ハグ）、ウスン・ウブス、シャル・ツェツェグ（黄色い花という意）、シヘル・ボヤー（甘草）、オロス（麻類）、バル・シャバグ、シヤラルジ（ヨモギ類）、ソハイ（タマリスク）、ツェゲレグ、白い穀類（ブゲレゲルジゲネ）などの栄養のある植物がありました。

放牧の仕事で最もたいへんなのは家畜が出産のピークを迎えるときの仕事だと思えます。わたしの姑の家では毎年約三〇〇頭のヒツジとヤギが産みます。昼も夜も家畜の出産を助けます。

家畜の体力が劣っている年は母畜が生まれたばかりの子畜を嫌うことが多いものです。その子畜に母畜の乳を飲ませるのも、母畜にわが子に対する愛情をもって子畜を認めてもらうのもたいへんな仕事です。

親から十分な乳を与えてもらえない子畜には液体食を与えなければなりません。小麦粉を塊のないように注意してバンタン（小麦粉をどろどろに煮込んだ汁）として煮込み、バターを加え、子ヒツジや子ヤギに哺乳瓶で飲ませます。バンタンに塊があれば哺乳瓶の先の穴が詰まって、子ヒツジや子ヤギがそれを無理に飲もうとしてバンタンをこぼしてしまうことがあります。それに、塊があればそれが子ヒツジや子ヤギの喉を詰まらせてしまう危険性もあります。ですから子ヒツジや子ヤギ用のバンタンを作る小麦粉は十分に粉状にして、まず冷たい水で少しも塊がないように混ぜてから、煮なければなりません。

——嫌われた子畜はどうやって母畜に面倒をみさせますか？

ヒツジには、トイゴルノ（トイゴすると言う作業）をします。母畜の乳をしぼって子ヒツジの尻尾や腰につけて、ゆっくりとした和やかなメロディーで「トイゴ、トイゴ」と言っ歌います。

ヤギもヒツジと同じ方法で面倒をみさせます。しかし、ヤギについては「トイゴする」と言わずに、「チョイゴする」と言います。同じようにゆっくりとした穏やかなメロディーで「チョイゴ、チョイゴ」と言っ歌います。

ラクダについては「フイスする」と言います。子ラクダを嫌がる母ラクダには、その胎盤を鼻に乗せ、子ラクダを嗅がせながら「フイス、フイス」と言っ悲しいメロディーで歌えば、ラクダは優しい動物なので、涙を流して鳴きながら反芻し、わが子を認めてくれるのです。

——むかしは、いつもどんなものを食べていましたか？

姑の家には召使が十数人いました。わたしたちは毎朝出かけて乾いた木の枝を背負って来ます。それからみな一緒に朝のお茶を飲みます。朝のお茶にはザンバー（はったい粉）、チーズ、バター、クリーム、あるときは、油揚げのパンも出ます。昼は主にオンド（ヒツジの脂肪を解かし、生の小麦粉を炒め、狐色になったところへ、煮出した茶をそいで作る、ルーのような飲料）を作って飲みます。晩は小麦粉や粟で食事を作って食べます。たまに肉を煮て食べます。肉のスープには粟や小麦粉を入れた料理を作って食べます。一日の食事を習慣的に「朝のお茶」、「昼のお茶」、「晩ご飯」と言います。

姑は裕福でしたので、いつも新鮮な肉を食べていました。少しでも時間が経った肉は食べませんでした。月に約三頭のヒツジを食べますので、だいたい十日間に一頭のヒツジを屠って新鮮な肉を食べていました。

肉を煮たあとはいつもわたしたちに分けてくれました。わたしたちが勝手に取って食べることはできませんでした。わたしたちは、あばら骨一本ずつか、肉がほとんど削りとられたあとの腿の骨や脛の骨といった肉しか食べられませんでした。

——ユムさんは養子ももらいましたか？

一九四七年に流産してから妊娠しませんでした。それで、六年後の一九五三年に息子一人を養子にもらいました。その後、自分の姉からも娘を一人養子にもらいました。名前はアルタシツエツエグと言います。今年、三五歳になります。娘はまだ独身です。小学校の教師です。一九六九年の酉年生まれです。今は研修のために通遼に行っています。

わたしは旗の中心地に来てからも仕事がありませんでした。そこで、たくさんの子どもたちの世話をして育てました。保母のような仕事をしながらその給与で二人の子どもたちを学校に行かせ、卒業させました。多くの子どもを預かって育てましたので、その子どもたちはみなわたしのことをお母さんと呼んで、正月や何かの折にはわざわざ会いに来てくれます。

わたしがこの一生で最も残念に思うことは、実母の世話を十分にしていられなかったことです。最後には会うこともできず、亡くなったことを人づてに聞きました。

一九五四年の冬、母は七〇歳を越えていました。その冬は雪がひどくてとても寒い冬でした。たいへん冷え込んだある日の晩、わたしが放牧から戻って来たとき、家に誰かが来ていました。

「寒かったでしょう。お腹がすいたでしょう。こつちに座って食事をしなさい。火に当たりなさい」

などと言って家族のみながあまりにも親切でいつもと違うので、わたしは何かあったに違いないと思うとぞっとして嫌な気持ちになりました。母がどうかしたのか、母に何かあったのではないか、と言う思いが浮かんできました。お茶を飲み、食事をして身体を温めたあと、家に来ていたその人が

「あなたに知らせることがあつて参りました。良い知らせもあれば、悪い知らせもあります。まず知らせたいのは、ご主人からの伝言で、ご主人はお元気でいらつしやるそうです。まもなくあなたたちと会いに戻つて来るそうです。もうひとつの知らせは、お母さんが亡くなられたことです。お年寄りのことですから、仕方がありませんね。気をしっかりもつてください」

と、わたしが感じていたことを知らせてくれました。

母はそのひどい雪の冬の寒さのなか、ラクダを探しに出かけて、野外で凍えてしまい、窪地に座つたまま亡くなったそうです。

このことでわたしは下の姉に不満を抱いています。母がその大雪の冬の寒さの中、ラクダを探しに出かけて七日経つても帰って来ないのに、彼女は探してくれなかったのです。身内の方がいないかのように放っておいたわけです。それだけの高齢の人が凍えることも死んでしまうことも気にせず放っておいたのです。凍死したのを他人が見て知らせてくれたのです。この話をわたしはあとになって聞きました。

母が生きていたとき、その面倒をみるのができませんでした。亡くなったあとも祈禱をただけで、葬式に加わることができませんでした。一生、残念に思います。

その代わり、姑についてはわたしが十分に世話をしました。十五歳で嫁いだから親として敬い、嫁として使われ、殴られていましたが、彼女の言うことを聞いて十数年一緒に生活しました。その後、わたしは一九五九年から旗の中心地で働く夫のもとにいましたけれども、行ったり来たりで姑の面倒をみていました。一九六一年に姑が半身不随になって介護を必要とするようになったとき、夫とわたしは姑を旗の中心地にある自宅に迎え入れ、便器を運ぶなど四、五年間世話をしました。

思うように実の母の世話をすることができなかったのも、わたしは自分の愛情と親孝行の気持ちで義理の母に注ぎ、その面倒をよくみました。一九六五年に姑は亡くなりました。姑のことをわたしはほんとうに子どものように抱き上げたりしながら十分に世話をしました。

二〇〇三年九月二日午前九時ごろ、ユムさん宅（エジネー旗中心地市内）を訪れて聞き取りをおこなった。

ボルさんは、一九二七年卯年生まれ、七十八歳。もとは、新疆ウイグル自治区南部バヤンゴル地方のトルゴード（カスピ海へ移動しなかった集団）だと言われている。本人はエジネー旗バヤンボグドのトーントと言ったところに生まれた。実母もそこで亡くなっている。

——幼いころの状況や生い立ちのことをお話いただけますか？

実母はチヨローと言う名前でした。二十五歳の若さで喉が腫れる病氣（甲状腺機能亢進症）で亡くなったそうです。そのとき、わたしはまだ五歳だったと言われています。

母は嫁がぬまに実家でわたしを産みました。父の名前を知りません。父と母が結婚する直前に母が亡くなったので父はその後、別の人と結婚したそうです。

母の父親（わたしの母方の祖父）はオチラルと言う人でしたが、早くに亡くなったそうです。母の母親（わたしの母方の祖母）はブーベイと言う人でした。母の弟（わたしの叔父）の名前はブントウンと言いますが、母は、チヨロー、ブントウンと言うただ二人の姉弟でした。

わたしは五歳で孤児となって、祖母のブーベイと叔父のブントウンと一緒に暮らしていました。そこから祖母の弟の下級官吏の家に一年間いましたが、その後、叔父のブントウンが結婚したので、そこにもしばらくいました。叔父の結婚相手はバルマーと言いますが、わたしは親しみを込めてその叔母をバムバイと呼んでいました。母のない孤児でしたのでこのようにあちこちに送られていたのでしょうか。

その後、祖母の意志で彼女の親戚のカンダと言う人の養子にされました。カンダとブーベイはいとこ関係でした。カンダは金持ちドウンドウプの親戚でした。わたしは養母カンダのところに七歳のときに来ました。カンダ自身も養子でした。つまり、裕福なユルルート・バヤン（バヤンは富裕の意）の養子でした。

ユルルート・バヤンはもともとハルハ（モンゴル国中央部・多数派集団の名称）人ですが、回族の戦争のときにお母さんがハルハから連行されて来ました。最初は金塔まで連行されたそうです。そのとき彼はお母さんのお腹にいて、金塔で生まれたそうです。わたしが養子に行ったとき、ユルルートの家はたいへん裕福でした。ユルルートには子どもがいまませんでした。

奥さんもいなかったと思います。近所にいたハンドスレンと言う女性と、同居するまではいたらなくても、往来し、寝泊りしていました。その女性はユルルート・バヤンの服を縫ったり、洗濯をしたり、食事を作ったりしていました。そこにはユルルート・バヤンの七人の養子がいたそうです。

一番上がカンダで、二番目がシャル、三番目がチメド（別名ツエヘル）、四番目がボルで、五番目がオーライですが、孤児だったオーライは八歳のときに養子にされて、九歳のときに学校に行かせてもらいました。オーライは母方のおじのバトに連れ出されて養子にされました。オーライは十分勉強させてもらいました。そして、一九五六年にオーライはボルガンと結婚して独立しましたが、そのとき、ユルルート・バヤンは自分の財産から分け与えて、ちゃんとした家庭を作っていました。六番目がツエツエグと言う漢人の女の子でした。その後、一九四九年に彼女は金塔に戻りました。ちょうどわたしが嫁いだ年のことです。七番目がサラントヤーと言う人でした。

わたしが九歳になると、ユルルート・バヤンはわたしをウマに乗せて、自分でわたしを連れて祖母のブーベイに会わせ、

「この子を養子にする」

と言って正式に挨拶をしていました。

わたしがユルルート・バヤンの家に来たときは、彼の家はヒツジとヤギが約四百頭、ラクダが約八十頭、ウマが一群（十数頭から二十頭ほど）で、乗用のためのウマが三十〜四十頭、

ウシが五十〜六十頭、ロバが三十〜四十頭と言うように、五種類の家畜が全部そろっていました。

養母カンダの夫はオイドブと言う名の僧侶でした。ハルハのダリガンガの人だそうです。僧侶なので他人の家へ読経しに行っていました。わたしたちは彼のことをラマ・エムチ・アープ（僧医お父さん）と呼んでいました。ユルルルト・バヤンのことはポーラル・アープ（白髪おじいさん）と呼んでいました。

養母のカンダとラマ・エムチ・アープの間に息子が一人生まれました。名前はドルジでした。ドルジは僧侶になりましたが、二十二歳のときに突然、はしかで亡くなりました。その病は身体に発疹して発熱して死ぬ病気です。ラマ・エムチ・アープはそのときロボンチムボ寺（バヤンノール盟磴口県）に行っていました。

一九五八年に合作社が設立されて、一九五九年に国营牧場が設立されたとき、わたしたちはみな家にもういませんでした。ユルルルト・バヤン（養家の祖父）は一九五九年の春に、現在のジャルガラント・ソムのハブチグと言うところで亡くなりました。国营牧場が設立される前、オーライは一九五六年に結婚して独立し、チメド（別名ツェヘル）とわたしはそれぞれ一九五二年に結婚して独立したので、わたしたち三人はすでにユルルルトの家を出ていたのでした。

国营牧場が設立されたとき、シャル（奥さんがドラム、息子がアムガラン）、カンダ（養母）、サラントヤーらは家畜を供出してそのメンバーになりました。

ユルルルト・バヤンの家では、養母カンダとわたしの二人がヒツジ放牧の担当でした。ユルルルト・バヤンの養子と言うのは実際ある意味で召使い同然でした。何の自由もありませんでした。ラクダやウマに乗るにしても許可を得なければ乗ることができませんでした。勝手に乗ると罵られます。

ユルルルト・バヤンは性格がたいへん荒っぽくて、きつい人だったのでわたしたちはとても怖がっていました。何かにつけて、

「乱れた悪い血をもつものども」

と罵り、火ばしを持って立ち上がると、わたしたちは怖くて無言のまま震えるだけでした。

やがてシャルとドラムがある程度の権限をもつようになり、家と家畜の管理をしはじめました。最終的に彼らがユルルルト・バヤン家のあとを継ぎました。今ではシャルとドラムの一人息子のアムガランがユルルルト・バヤン家の後継者になっています。

わたしの養母のカンダは一九六六年に殴られて「富牧」「牧主」のレッテルを貼られているうちに、一九六九年に亡くなりました。野外で放牧していて、突然亡くなったと言われています。悪名のレッテルを貼られていたことに苦しんで亡くなったのでしょうかね。わたしたちも同じく自由を剥奪されていたので会いに行くことができませんでした。

——ご自身の家庭や子どもたちのことについてお話いただけますか？

わたしは一九五二年に二十五歳のとき、結婚しました。夫の名前はゴンチョグロドイと言います。夫の方から酒とハダグ（儀礼用の絹布）を捧げる儀式が終わって、約一年間待たされてようやく結婚することができました。養母が許していたにもかかわらず、ユルルルト・バヤンが厳しい人でわたしにヒツジの放牧をさせるために嫁がせたくなかったのです。

ですから、上の二人の子どもは未婚のままユルルルト・バヤンの家で産みました。一番上の子どもの名前はエルヘムサインと言います。一九四八年の子年生まれです。文化大革命のときはウイドウン（衛東、毛沢東を守るという意味）と言う名前に変えました。今はバヤンノール盟の中心地に勤めています。次男のポルドバートルは一九四九年に生まれましたが、今はオ

ルドス市に勤めています。

ゴンチョグロドイのお父さんのダムディンと言う人がわたしのことをたいへん気に入って、どうしても自分の息子の嫁にしたいと三年間懇願して許可を得て酒とハダグを捧げたのだそうです。その儀式が済んでから一年あまり経ってようやく嫁がせたのです。

わたしが嫁いだとき、ユルルルト・バヤンはわたしに十二頭のラクダと二十五頭のヒツジ、ヤギを財産として分け与えてくれました。ほかのものはくれませんでした。

わたしが夫の家に嫁いだとき、夫の家にはヒツジ、ヤギが六十頭あまり、ラクダが五頭、ウマが二頭、ロバが二頭、それにぼろぼろのゲルが一軒ありました。

わたしたちが結婚したとき、四枚のハナ（格子状の折りたたみ式壁）からなる小さなゲルを建ててくれました。わたしが持つて行った大きな長持ち二竿を置くだけでいっぱいになっていました。

姑はわたしが嫁ぐ前にすでに亡くなっていました。一九四五年に双子の難産で亡くなったそうです。妻を亡くした舅のダムディンは、四人の子どもたちと生活していました。それにもう一人、漢人の娘がいました。養女であり、召使でした。彼女は十七、八歳で嫁がないでしたが、わたしたちが結婚したので嫁いで出て行くことができました。

わたしたちが結婚してゲルを使うようになってから、舅はルハーモーと言う独身女性と結婚しました。ルハーモーはカンダの姉でした。

舅が婚出して行ったので、わたしたちが家を継ぐことになりました。三人の孤児（夫の弟や妹たち）と家と家畜とがゴンチョグロドイとわたしに任されたのです。ガルサンゴンチョグ、バルジル、ドルジツォーと言う三人の孤児の弟妹たちをわたしたちが一人前に育てて、結婚させ、独立させました。舅は彼らの面倒をみませんでした。

ガルサンゴンチョグは婿になって出て行きました。バルジルは郵便配達の仕事をしていましたが、そこで結婚しました。わたしたちはドルジツォーを一九五九年に結婚させました。ゲルを二軒建てて、財産を分けて独立させました。ドルジツォーは最初ロソルと言う人と結婚していましたが、ロソルが行方不明になってしまったために、ドルジツォーは離婚し、その後、別の人と結婚しました。

わたしには子どもが六人います。六人のうち四人を養子に出して、二人だけを自分で育てました。

長男のエルヘムサインは三歳のときにエルデニゲレル・ノヨン（ノヨンは貴族の意）家に養子にしました。養子にしたと言うか、連れて行かれました。

エルデニゲレルとボルが結婚してから子どもが生まれなかつたので、エルデニゲレルの母親のトソツアガンがユルルルト・バヤンの家からその子連れて行ってしまったのです。

ある日わたしが放牧から戻って来ると、養母のカンダが泣いていました。理由を聞いてみると

「お前の子どもは連れて行かれた」

と事情を話してくれました。もともと、エルデニゲレルの母親のトソツアガンとわたしの養母カンダとはいとこ同士だそうです。親戚だったので、

「子どもが欲しい」

と請われて与えたわけです。私の息子が養子に行つてから、（そのおかげで）エルデニゲレルとボルのあいだに息子が三人生まれたそうです。

次男のボルドバートルは、わたしが正式に結婚したあと（そもそも正式に結婚する前に生まれておりシャルたちと一緒に暮らして慣れ親しんでいた）、わたしの養母の弟だったシャルとその妻ドラマの夫妻が連れ戻してしまいました。息子アムガランの遊び相手として、その

弟にするために養子にするとわれ、シャルの養子になりました。

三番目の子どものバルサンジャブと言う娘は一九五二年に生まれましたが、夫の家に来て生まれた最初の子でもでした。家で育ちました。彼女の夫の名前はバンズラグチと言います。

四番目の子どもはビヤムバジャブと言う娘です。一九五六年に生まれました。姉のチメド（ツエヘル）の養子にしました。ビヤムバジャブの夫の名前はバタです。

五番目がフグジルトと言う息子で、一九五九年に生まれました。彼もわが家で育ちました。嫁の名前はジブザンと言います。

このように長女のバルサンジャブと三番目の息子のフグジルトの二人だけがわが家で育ちました。

六番目のホスバヤルと言う末っ子は一九六三年の卯年生まれです。ホスバヤルは赤ん坊のときにリンチンダワーとバルマーのところに養子に出しました。今はシヨワンシー（双喜）と言う名前を使っています。エジネー旗に勤めています。最近副旗長になったばかりです。妻はソヨルツエツエグと言いますが、二人とも旗の中心地の住人です。たいへんなお人よしで、時どき、わたしのところへ見舞いに来てくれます。

ホスバヤルを連れて行ったことについてバルマーはいまだによく話します。

「ハダグを捧げることも、お礼を言うことばもなく、人さまの息子を連れて行くなんてひとさかんに話すわけです。」

夫のゴンチヨグロドイは軍人でした。わたしと結婚する前は国民党の黄甫軍校西安分校で三年間勉強しました。中国が解放されてから人民解放軍になりました。一九五七年に軍隊から帰り、ジャルガラント・ソムのソム長になりました。その後、旗の水電局に勤めるようになりました。そこにいたとき、文化大革命が始まって、わたしたちは糾弾されました。

わたしは一九五八年からガツアーの幹部の仕事をしていました。ウスルンガイ生産隊長を十年間勤めました。その後、生産隊の党支部の書記を二年間務めて、計十二年間生産隊の幹部の仕事をしました。一九五八年に共産党員になりました。夫は公務についていたので、留守がちでした。時には消息を絶ってしまうこともありました。わたしは家で子どもたちの面倒をみながら生産隊の幹部の仕事をしていました。

それで一九六六年から殴られはじめ、一九六九年に国境から遠ざけさせるために肅北に行かされました。ノヨンのエルデニゲレルとその息子ドゥンドゥブの二人をはじめとする七十人からなる約十数世帯が肅北の各地に行かされました。

わたしの家は肅北のベゲーに配属されました。わたちたちとともにノルジマー、ロブサンダシの姉のバトビリグがベゲーに行きました。バトビリグは（モンゴル国の）ハルハ人で、読み書きがよくできる有能な人でした。肅北のホボラグの地にはエルデニゲレル・ノヨン（ノヨンは貴族の意）、ドゥンドゥブ・タイジ（タイジは台吉、清朝がモンゴル貴族に与えた爵位の一つ）、ダランドルジ、イシガルザン、シャルフーなど五世帯でした。このうち、イシガルザンはその中に住み着いて、一九八三年にエジネーに戻って来ました。また、シャルフーは独身の年配の男性でしたが、そのまま肅北に残りました。

またシャルガルジンの地にはシャル、ソドノム、バルマーの母方のおじのノロブ、独身のツオグジルなど五世帯でした。おしやれなソドノムと言われていました。

シーボーチェン（石包城）の地にはバヤンジャルガル、ダンザン、ボルなどの家がありました。ダンザンはアルタンツエツエグの養母の夫でしたが、離婚しました。ボルの奥さんの名前はアリマンと言いますが、健在です。

わたしの家族がどうして肅北に行かされたかと言えば、夫がハルハと関係があったと疑わ

れて「ハルハのスパイ」「内蒙古人民党党员」として批判されたのです。

ハルハと関係があると疑われた理由は、一九六〇年ごろ、夫とリンチンダワの二人が狩りに行って知らないうちにハルハの領内に入ってしまったために、ハルハの国境警備隊に捕まって、二三日拘束されてから送られて来たからです。それでハルハと何かの関係があったとか、ハルハのスパイだったとか疑われました。

わたしたちは肅北に十年間いました。肅北では六百〜七百頭の家畜を放牧していました。わたしたち二人は肅北に息子のフグジルトと三人で行きました。フグジルトは十歳で小学校二年生でしたが、学校を中退させて連れて行きました。

姉のチメドに養子に出したボルドバートルも「牧主」として殴られていました。七年間閉じ込められて解放されたあと肅北で結婚しました。名誉回復のとき、エジネーに戻って就職しましたが、その後マンダフとの交換で肅北に勤めるようになりました。マンダフは職場が肅北でしたが家がエジネーにあったので、二人で勤務地を交換したわけです。

息子のフグジルトは一九七九年に肅北から戻って来ました。そのとき、わたしたちは名誉回復されて、夫は草原站到勤めるようになって、わたしたちはみな町の戸籍をもつようになりました。

肅北から戻って来てからのわたしは孫たち八人の食事を作るようになりました。孫たちが学校に通うようになったからです。一九八四年には旗の中心地のドライブに住むようになりました。

一九九九年に夫が退職したとき、むかし黄甫軍校にいたために「離休」（退職後も百パーセントの給料がもらえる）にしてもらいました。リンチンダワの場合も夫の交渉のおかげで「離休」になりました。エジネー旗全旗で「離休」扱いをされたのはゴンチョグロドイとリンチンダワの二人だけでした。

夫は退職してから二年経ったか経たないうちに二〇〇一年に亡くなりました。それ以後、わたしは毎月三百四十元の生活援助をもらうようになりました。今ももらっています。それを頼りに生活しています。わたしにとっては満足できる金額だと思います。

——私有の家畜をもっていらっしやいませんか？

以前は家畜をもっていました。一九五八年に合作社ができたとき、ヒツジ、ヤギを二百頭とラクダ約四十頭を共有のものに供出しました。名誉回復されてからだいぶ経ったあと、生産請負制になって、それらの家畜の利息としての家畜を受け取りました。それでいくらかの家畜をもっていました。娘と婿に与えましたので、今わたしに私有の家畜はありません。

——あなたが幼かったころの放牧地はどんな感じでしたか？遠くまで移動していましたか？

そのころの放牧地はほんとうにすばらしかったです。水も草も豊富でした。わたしが幼かったころ、わたしの家はボルチョンジン・フル（フルはゴビ地域の川筋跡を示す一般的な地形用語）と言うところにあったそうです。わたしの実母はそこで亡くなりました。

わたしは九歳のときにドライブフ鎮に来ました。夏は木陰が多くて水のよいところへ移動します。主にウマやロバに乗ります。冬は風を避けることのできるナリン・フルなどへ短い移動をします。それほど遠くまで移動しません。正月はラクダに乗って挨拶まわりをしています。

養子先の祖父のユールト・バヤンは毎年十月から十一月のあいだにキャラバンに行っていました。十五〜二十頭のラクダを引いて、今考えてみれば金塔や酒泉などの町へ行っていたのでしよう。一度出かけると十五〜二十日間くらい経ってから、いろいろな食べものや着るも

などの生活用品を持って帰って来ました。それが最も遠くへ行ったことになります。それ以外はそれほど遠くへ行くこともなければ、それほど遠くへ移動することもありませんでした。

ユールルト・バヤンはキャラバンに行くときは必ず雇い人を一人連れて行きました。家畜の毛皮以外に、毎年四〜五頭のウシを売ります。それで裸麦や粟などを積んで戻って来ます。

日常生活では、主に朝はお茶を飲みます。昼は飲み物を作って飲みます。夜は肉を煮て小麦粉で食事を作って食べます。ユールルトの家は、当時だいたい毎月ヒツジやヤギを二頭屠って食べていました。そして毎年ウシ一頭を屠って食べます。自然の食物としてはトネリコの実をよく食べました。オンツ川のジグドはよく成っていました。また、ソハイ(タマリスク)の蕾を採って食べていました。ジャルガラントの数本の川沿いでは蕾がよく成りました。また、「穀類の糟」とも言われるハルマク(野葡萄)を採って食べていました。当時は植生が豊かで、このような植物がたくさんありました。

——ユールルト・バヤンさんが共有にした家畜の利息をもらいましたか？

そのお金をくれると言っていました。わたしたちはまだもらっていません。もらう理由もありません。わたしたちは早く結婚して独立し、もらうべき財産をもらって独立している。その金をわたしたちがもらう筋はありません。その家を継いだのはシャルで、今はアムガランなのでそのお金はアムガランがもらっています。ボルドバートルも分けてもらっているでしょう。

——祖父のユールルト・バヤンはエジネーの六大富豪の一人ですね。そのほかの五人が誰と誰だったのかご存知ですか？

もちろん知っています。祖父のユールルト・バヤン、アビルミド・バヤン(ユム・エージの姑)、ヌデン・メーリン(メーリンは清朝の官職の一つ)(本名はヌデンデルゲル)、エルデニゲレル・ノヨン、ソノムダルマ、ドウンドウブ・タイジなどでしたね。ソノムダルマは川下にいました。うちのユールルト・バヤンの家も川下にありました。これらの六世帯をまとめて川上に移動させ、その家畜を合わせて国营牧場が作られたのです。そのとき、祖父はすでに亡くなっていたので、養子の長男にあたるシャルがその家や家畜を継いで、牧場のメンバーになりました。

二〇〇三年九月二日午後四時ごろから、ボルさん宅(エジネー旗中心地市内)で聞き取りをおこなった。

カンドさんは一九二九年巳年生まれ。現在七十六歳。

現在のウスルングイ・ガツアーの領内で旧暦四月十五日に生まれたと聞いています。両親はみなトルゴード人です。父の名前はブントウンと言います。母の名前はバルマーです。祖父の名前はフドウドウブで、祖母の名前はジュンジマーと言いますが、これは母方の祖父と祖母です。父方の祖父母のことはよく知りません。両親からわたしたちきょうだい十三人が生まれました。そのうちの四人が健在です。

父がかなり早くに亡くなっているので、母は再婚して、もう数人の子どもを産みました。ダグスレンが生まれてから父が亡くなりました。それで降生まれたのは継父の子どもたちです。わたしは母親が嫁に行く前に母の実家で生まれました。わたしが二歳のときに母が嫁いだそうです。それで、わたしは「のらの、母なし子」と言われていました。母が川上の方に嫁いだとき、わたしは祖母の懐に残りましたが、六歳のときにその祖母が亡くなったので、母の姉（母方の伯母）のルハーモーがわたしを養子にして、一人前に育ててくれました。

母から生まれたきょうだいのなかではわたしが一番上でした。わたしの次が妹ユムチン、その次が弟ツエンドルジ、その次が弟ツエデンジャブでした。ツエンドルジは僧侶でしたが、病気で亡くなりました。ツエデンジャブは、一九九六年、母が八十五歳で亡くなる直前に亡くなりました。その次は妹でしたが、一歳にもならないうちに亡くなりました。デルーンピヤムバと言う名前でした。その次も妹で、ソロンガワーと言う名前です。その次が申年の弟でしたが、亡くなりました。九番目の子は未熟児で亡くなりました。十番目がダグスレンでこの妹は健在です。十一番目が弟で、十二番目が妹でしたが、二人とも亡くなりました。一番下の十三番目がツエツエグで、健在です。

今も生きているのはユムチン、ダグスレン、ツエツエグとわたしの四人です。このうちダグスレンとわたしは同じ家で育ちました。

わたしを養子にして育ててくれた母方の叔母のルハーモーは一生涯独身でした。ほかにも母方のおじが二人いました。一人が僧侶でしたが亡くなりました。もう一人は結婚したものの、わたしたちと一緒に生活していました。その後、彼は独立して出て行きました。

わたしが物心ついたときに、叔母の家、本当は「自分の家」と言うべきですが、そこはヒツジとヤギを約二百頭、ラクダとウマをそれぞれ数頭とロバを三〜四頭もっていたほか、ウシを十数頭持っていました。その後、また寺の家畜を放牧していました。それに、他人のラクダを数頭面倒みていたこともありました。思うに、報酬をもらっていたでしょう。

妹のダグスレンも叔母に養子として引き取られました。そのほか、叔母はセディと言う名前の男の子を養子にして、彼が大人になって結婚したとき財産を分け与えて独立させました。その後この養子の弟は亡くなりました。弟のオラグシラルトも養子にしました。彼にも財産を与えて結婚させました。

叔母は独身でしたが、わたしを含めて四人の子どもたちを正式に養子として引き取って育てています。そのほかにも、ジャンチブ、ムフジャルガル、チョロー、ヤンジャー（サイハンノールの漢人）など多くの子どもたちを引き取って一人前に育て、自立させています。その漢人の子どもは二歳のときに、お母さんが出血で亡くなって孤児になっていました。それで叔母が引き取って育てました。

わたしの叔母はそんな優しい心の持ち主で、情け深い人でした。苦しんでいる孤児などをいつも気の毒に思って、自分の家に連れて来て、養い、育てていました。みなが言っていたように、その名のおり、ほんとうにルハーモー仏（天女）のような優しい心を持った人でした。

——何歳になるまで伯母さんとご一緒でしたか？

わたしは年を取るまで叔母と一緒にいましたよ。

わたしは二十二歳のときに結婚しました。解放後の一九五二年にようやく結婚しました。夫の名前はゴンチョグソドノムと言います。わたしたちが結婚して独立したとき、叔母はゲルを建ててくれました。それに、財産としてヒツジ、ヤギを七十頭、ラクダを四頭、メスのロバを二頭と淡黄色のウマを一頭くれました。夫の側は息子の結婚に財産としてラクダ一頭しかくれませんでした。ほかに家畜をもらっていません。夫の母親はエジネーのトルゴード人で、父親は北西部のトルゴード人、つまり、ホボクサイルのトルゴード人だったそうです。

夫の母は彼が十三歳のときに、早く亡くなっています。父（舅）は長生きで、八十歳過ぎまで生きて、つい最近亡くなりました。

わたしたちは一九五一年に結婚して、放牧をし、一九五八年に合作社ができるまで牧民でした。その七年のあいだに家畜はかなり増えました。ヒツジ、ヤギが三百十八頭、ラクダが十数頭、ウマが二頭、ロバが四く五頭を共有に提供しました。その後、そのせいで「牧主」のレッテルを貼られました。

一九五八年に人民公社が設立されたとき、わたしは代表として大会に参加しました。その会議で選挙がおこなわれて、わたしはみなから副主任として選ばれました。最初、ジャルガルサイハン公社の副主任になりました。

それ以前、一九五三年にわたしは一ヶ月、新モンゴル文字を学びましたが、よく学べたという事で教員の仕事を得ました。そのときわたしは黒板一枚を持って、家々を転々と回って、新モンゴル文字を教え、遊牧地で文盲をなくす仕事に携わっていました。このように、読み書きができる人という点で人びとから副主任として選ばれたのです。

一九五八年に国家公務員としてジャルガルサイハン公社に来たとき、夫も一緒に来ました。夫は公社所在地で木工の仕事などをしていました。一九六〇年にバグ（人民公社の下位単位）が設立されて、一九六四年にわたしはジャルガラント・ソム（当時は公社でした）に転勤して来ました。ちょうど真冬の十二月でした。そして二年後の一九六六年の三月八日に、わたしは反動組織のメンバーとして殴られました。

——どんなレッテルを貼られましたか？

「国家反逆者」「モンゴル人民共和国のスパイ」「エルデニゲレル旗長の反動的秘書」「ふしだらな女」など実に多くのレッテルを貼られました。

そして、旗の中心地まで連行されて拘留されました。多くの人たちが監禁されていました。会議がおこなわれて壇上に一人ずつ引つ張り出されて、写真を撮られ、罪状を読み上げられました。その後、また公社に送り返されて、家に送られ、監視下で働かされました。そのときは、人と話してはいけない、人の顔を見てはいけないなど、五つの規則が決められていました。

公社では八ヶ月監禁されましたが、家族と会わせてもらえませんでした。一九六六年十一月にナランボラグ公社に移されて監禁され、数日おきに一度、真冬の寒さのなか、引つ張り出されて批判されました。

翌六七年六月六日に監禁が解除されました。解除されてから最初はウルジルト生産隊で働かされました。その後、バヤンツアガン生産隊、ナランボラグ生産隊、ウスルングイ生産隊などを転々と回されて働かされました。わたしは重罪人なものでした。

アリブジホと言う人がいましたが、彼がトップの罪人で、わたしは二番目の罪人でした。このようにわたしは五く六年間監視下にありました。

一九七一年に半分ほど解放されて、七二年の春「五・七幹部学校」に行かされました。そ

こでも毎日働かされました。農作業の種まき、水やり、収穫など与えられた仕事は何でもやりました。規則上、その学校では三日働いて、三日政治学習をすることになっていましたが、実際は毎日働かされました。

本来、その学校に六ヶ月いるはずでした。しかし、わたしはその学校に約一年間いさせられて、とうとう重病になって、やむを得ず出させてもらいました。

わたしは二月にそこへ行って十二月に病気が重くなつて、人に担がれて車に乗って出て来たのです。家に戻ると、僧医のラブリュー・ママバー（チベット語で医師の意）がわたしの病気を治療してくれ、実母のバルマーがわたしの世話をしてくれたので、ようやく病気が治りました。

一九七三年からソムの食堂の管理員を三年間勤めました。そのときはわたしにはまだものの仕事への復帰が許されていなかったのです。毎月四十元の生活費をもらっていました。

その三年後、一九七五年末に生産幹事の仕事をもらいました。この仕事をわたしは二年間して、一九七七年にまた代表に選ばれて会議に参加しました。こうして再びジャルガラント公社の副主任に選ばれました。一九七五年に生産幹事になったときから幹部の仕事に復帰し、給料が増えたのでした。

もともと、反動集団のメンバーとして批判される以前、わたしの月給は九十八元でした。仕事に復活した一九七五年以降も、もとの基準で九十八元もらうようになりました。最初一九五八年に就職したとき、月給は五十二元でしたが、その後、文化大革命の前に九十八元になっていました。

一九七八年にゴロナイに行つて公社の副主任として勤めました。数年間勤めて、一九八一年にまたジャルガラント公社の副主任として戻つて来ました。その前にわたしを旗の中心地に転勤させようとしたが、わたしは行きませんでした。と言うのは、わたしは漢族幼稚園の園長に任命されたからです。わたしは漢語がよくできないので、そんなところに行つてもどうしようもないなと思いました。

ジャルガラントに勤め続けて一九八三年に退職しました。本来なら一九八四年に退職すべきなのです。二九年生まれなので八四年にちょうど五十五歳になります。しかし、その年にそれまでの政策が変更されると言う噂が出ました。つまり、八四年から親が退職すればその代わりに子どもが就職すると言う政策がなくなると言う噂でした。それまでは両親のどちらかが退職すれば、その子女の誰かが親の代わりに同じ職場に就職できると言う優遇政策がありました。これを「頂替」（身代わり）と言います。それでわたしは妹ダグスレンの実の息子ホビスハルトを身代わりにするため前倒しで退職し、いろいろ交渉をしたすえにホビスハルトを就職させました。

退職後、わたしはジャルガラント・ソムで少しばかりの家畜を放牧していました。そこでしばらく重病にかかっていました。ゆつくり療養して病気が治つたあと、一九九六年に旗の中心地に引越して来ました。

夫はかつて国民党の軍人で、故郷に戻つて来てからは仕事がありませんでした。わたしが選挙で幹部になったあとと彼は公社所在地に来てわたしと生活していましたが、仕事がありませんでした。文化大革命のあいだは国民党の軍閥だったことを理由に批判されました。殴られましたけれどもわたしほどひどく批判されませんでした。このように彼はほとんど一生仕事がありませんでした。わたしより六歳年上です。今は高齢で、旗の中心地でわたしと一緒に生活しています。

——お子さんはいらつしやいますでしょうか？

三人います。話せば話が長くなります。みな養子です。わたしは生涯子どもを産みませんでした。みな養子です。

上の子が男で、フンデイと言う名前です。みなにハルタル・フンデイと呼ばれています。フンデイはわたしの長男です。一九四九年生まれの丑年です。今は退職しています。フンデイはアラシヤー旗の人です。フンデイの実母の名前はチョローと言います。アラシヤーの人です。チョローは故郷のアラシヤーにいたとき、十八歳で、ある老人の金持ちの五番目の夫人にされました。その老人はガルツ兄さんと呼ばれていたそうです。チョローが十八歳で嫁いだとき、彼は七十二歳だったそうです。彼の一番目の奥さんがたいへんやさしい人で、チョローにお裁縫やしきたりを教えてくれてたいへん親切でした。そんな生活が何年も経たないうちに、その老人と一番目の奥さんが相次いで亡くなりました。

二番目、三番目、四番目の夫人たちは意地が悪く、チョローを大いにいじめました。そのときチョローは妊娠していました。それで、その奥さんたちのいじめに我慢できなくなったため、ある夜ラクダに乗って、もう一頭のラクダを曳いて逃げ出して来たそうです。そのように逃走してエジネー川の川上にやって来て、ある老人と結婚してそこでその子どもを産み、子どもを養子に出しました。その子どもの名前はアラダナと言います。そして、上流のほうに数年間いてまた妊娠して、一九四八年に川下にくだってわたしの家に来ました。

わたしの伯母はまたもやチョローのことを気の毒に思って、家で世話をしているうちに、一九四九年に子どもが生まれました。その子にフンデイと名付けました。その後、チョローは息子とともにわたしの家に数年間いましたが、伯母はチョローを結婚させ、財産を与えて家庭をつくらせました。そして、息子のフンデイをわたしのもとに残して、わたしの養子にしておきました。

わたしは一九五一年に結婚したとき、息子のフンデイを連れてこの家に来て来ました。若いころから赤ん坊のフンデイを養子として引き取っているのです、彼のことを実の子とまったく同じ気持ちで愛情を込めて育てました。二番目の子どもはソルツエツエグと言う名前の女の子で、未成年です。妹ダグスレンの娘です。四歳のときに養子になりました。その年、わたしが妹の家に行ったとき、幼いソルツエツエグはわたしから離れなくなっただけで来ました。それで妹のほうもわたしに実の娘がいなかったのでそう言ったのか、

「姉さん、彼女に火をたいもらいなさい」と言って娘をわたしにくれました。わたしが「五・七幹部学校」で働くことになったときにはすでに娘を引き取っていました。ソルツエツエグは現在、旗の中心地にあるモンゴル族小学校で教師をしています。

三番目の子どもは息子です。名前はバトザヤーで、子年生まれです。弟のスルンゲワーから引き取りました。バトザヤーがまだ一歳にもなっていない幼いときに養子にしました。大人になったあと、発電所で仕事を見つけてあげたのですが、今はその仕事を捨ててマーンゾンシャン（馬鬃郷）へ放牧に行ってしまうました。今わたしを腹立たせている子どもはこのバトザヤーです。今の子どもはなんと良かったのか、まったく親の言うことを聞きませんね。

バトザヤーの兄はバトゲレルと言いますが、嫁のサロールと別れています。ところが、うちのバトザヤーは今お兄さんが別れたそのサロールと言う女性と結婚しようとしています。家に彼女を連れて来たとき、わたしはサロールに

「わたしにも面目と言うものがあります。あなたを上嫁として家に入れることはできません。けれど、下の嫁として入れることはいつでもできません」

と言いました。それでその二人は結婚できないまま付き合っています。

今のわたしの年金は月に一五〇〇元です。一〇〇〇元でバトザヤーのために買った家畜の

ローンを払っていて、残りの五〇〇元でわたしは夫とともに生活しています。夫は生涯給料をもらったことがあります。わたしの給料と一緒に生活しています。今は旗の中心地でソヨルツェツェグが身の回りの世話をしてくれています。

最近わたしは体調がかなり悪いので、治療のために都会に出かけたいと思うのですが、夫が家にいるのと、彼も体調があまりよくないので放ってはいけません。わたしが行ったあと、彼に何かあったらどうしようと思うのです。二人で出かける力もありません。

——ずっと残念に思っただけでいらつしやることはありませんか？

悔しいことと言えば、わたしを養子に引き取って一人前にしてくれた母方の伯母のルハーマーの世話をよく見てあげられなかったことです。最後に会うことすらできませんでした。

わたしの下のおじのルハワンジヤブはバヤンノール盟にいましたが、最近亡くなりました。むかし一緒に暮らしていました。彼は以前、国民党の仕事をしていました。伯母は半身不随になってから一九六六年にバヤンノールにその弟を頼りに治療を受けに行きましたが、そこに行っても長くいられませんでした。子どもたちが恋しくて我慢できないと、一九六七年に帰って来ました。

ところが、戻って来たときはもはや家に入ることも許されず、引つ張り出されて批判されました。伯母はウスルグイ・ガツァーで殴られ、殺された、と言われています。わたし自身も殴られて自由を剥奪されていたので会いに行くことができませんでした。約一ヶ月批判され、殴られ、殴り殺されたあと死体を焼かれた、と言われています。多くの人の死体を一緒に焼いたので、今はその骨を見つけないことさえできません。

その後、一九七〇年代に上からの政策が実施に移されて、伯母やわたしたちは名誉回復されたあと、わたしたちは何とかその骨を弁別しようと努めました。弁別のしようがありませんでした。その当時、一度に十一人の死体を焼いたけれども、そのなかの五人の遺体は別々に焼いて、残りの六人の遺体と一緒に焼いて、伯母の遺体はその一緒に焼かれたほうなので、今ではその骨すら見つかりません。

これは、たいへん悲しいこととして残っています。

——むかしの生活はいかがでしたか？主に何を食べていましたか？

むかしは主に乳製品と肉を食べて生活していました。ヤギなど家畜の毛や皮と裸麦を交換して来ます。家畜を漢人に売ることがありました。ベージン・マイマイ（北京買売の意）と言うラクダのキャラバンが来ることもありました。金塔に行つて物々交換をして来ることもありました。平らなアール（チーズ類）、握つて作ったシュールメグ（チーズ類）もよく食べました。金塔に行く人に家畜の毛や皮などを託して、帰りにナツメなど頼んだものを手に入れて持ってきてもらいます。

朝はお茶を飲んでザンバーを食べます。昼はお茶を沸かして、なかに粟を入れて、乳を入れた飲み物にして飲みます。夕方は肉を煮て、そのスープに裸麦や粟を入れて食べます。小麦粉や粟で食事を作つて食べます。グミの実を乾かして、粉にしてザンバーと混ぜて食べることもあります。わたしたちは幹部になるまでは牧民でした。そのときわたしは、サイハントーライにいました。そこに移住して七、八年になっていたと思います。一九四四年の申年に旱魃が発生して川の水が枯れてどうしようもなかったため、仕方なく臨時的に移動したのでした。南川（エジネー川）に水がなかったため北川（ムレン川）に行つたのでした。

サイハントーライに着いて木を立てて影になるものを作っていました。付近では、川の水を汲んだり、井戸を掘つたりして生活していました。井戸を掘るのは簡単でした。二メートル

も掘れば水が出ていました。各家庭が仲良く助け合って、互いに井戸を掘ってあげていました。当時は食料が乏しかったのでグミの粉をよく食べました。

わたしは一九五八年に幹部になってからと言うもの、もっぱら牧畜業の管理をしていました。ジャルガルサイハン公社をソブノール（現在はソゴノールと言う名に変わっている）とジャルガラントと言う二つのソムに分けたとき、わたしは家畜を分ける作業を担当しました。その後、人民公社になったときにはソブノールとジャルガラントを合併させて、ジャルガルサイハン公社にしました。

一九五八年の家畜を分ける作業は大変でした。ソムとバグに分けて、さらに群れを分けます。一群は二百〜三百頭から成ります。四百頭を一群にすることもありましたが、たいへん稀でした。そして、家畜を分ける作業は家庭の状態、労働力、子どもの状況などをみておこなわれました。条件がよく、家族員数が多い家庭には家畜数の多い群れを提供しました。

共有のウマの群れはありましたが、ウシの群れ、ラクダの群れはなかったと思います。わたしは公社の仕事のために忙しくてろくに食事が摂れないこともありました。朝はたいていお茶を飲んで、グミの粉を混ぜたザンバーを食べてしまえばお腹がすきませんでした。けっこうもちます。

牧民の家には公社から共同で家畜の囲いを作っていました。井戸を掘ってくれました。飼料を分けてくれました。第四十一農場がありました。そこでは飼料を栽培していました。

——草など植物にはどんなものがありましたか？

エジネーは草など植物が豊富なところでしたね。ホルス（葦類）、シヤラルジ（ヨモギ類）、ウエト・オラーン、ウスン・ウブス、ヘレス（アカザ類）、ハムホグ（アカザ類）、ソハイ（タマリスク）、ホロン・ポヤー、シヘル・ポヤー（甘草）、トーライ（胡楊）、ジグド（トネリコ）、ウムヒー・ウブス（臭い草の意）などがありました。ウムヒー・ウブスは若葉のときに家畜は食べません。秋に黄色になってから冬に食べます。ヒツジやヤギは好んで食べますが、ラクダは食べません。家畜はソハイの葉をよく食べます。ホロン・ポヤーをヤギとヒツジが食べます。

かつては、秋になると葦刈りに出かけていました。先がまだ赤っぽくて栄養分があるうちに刈ります。だいたい七月下旬に刈ると最良です。もう少し遅くなれば赤っぽい穂先が白い綿毛になってしまいます。それはもうだめです。栄養分がだめになってしまいます。ソブノールとウスルングイのガツアーはどちらでも葦刈りをしていました。刈り取った葦は家畜の飼料にします。主にヤギとヒツジのような小型家畜に食べさせていました。

二〇〇三年九月二日午後二時ごろ、エジネー旗中心地市内にあるカンダさん宅を初めて訪問して聞き取りをおこない、二〇〇四年五月午後二時ごろ、再訪して聞き取りをおこなった。二〇〇五年十二月十四日永眠。合掌。

ボルさん(ジョー・ジョー・ボル)は子年生まれの八十一歳。人びとから「ジョー・ジョー・ボル」と呼ばれている。一九二五年にエジネー旗、現在のバヤンボグド・ソムの、三つのソリのうちアダグソリと言うところで、牧民バーザルの四番目の娘、七番目の子どもとして生まれた。きょうだいは十人だった。一番上が申年生まれのバグマー(アマーと呼ばれている)、次が子年生まれのダリと言ひ、ツアガン、モロム、ドルジ、ソングロブと続いて、七番目がジョー・ジョー・ボルで、八番目がツルトウム、九番目がジブザン、十番目がオトゴン(別名イシツォー)である。

——ご両親のことや幼いころのことを話していただけますか？

父の名前はバーザルと言ひ、一八八六年の戌年生まれでした。もとはハルハ人ですが、エジネーに来て生まれたそうです。祖父は双子の一人でした。そのため、イフ・イヒル(双子の兄)、バグ・イヒル(双子の弟)と呼ばれていましたが、祖父は兄のほうでした。祖母についてはまったく知りません。

母の名前はルハムツェレンでした。一八八七年の亥年生まれでした。父より一つ年下でした。母方の祖父の名前はドガルでした。トルゴード人で、エジネーで生まれ育ったとそうです。母は三姉妹だったらしく、「ドガルの三人娘」と言われて有名だったとそうです。祖母についてもあまり知りません。

わたしが物心ついたとき、両親はヒツジ、ヤギをおよそ三百頭、ラクダ二頭、ロバ七、八頭、ウマ十数頭、乗用馬二、三頭をもつ、まずまずの家庭でした。わたしは八歳のころ、年上のいとこであるナムスライの養子に出されました。ナムスライは母の姉の娘で、母の姪でした。わたしを養子にしたとき、彼女はまだ独身で、結婚していませんでした。

いとこのナムスライは一八九四年、午年生まれでした。わたしを養子にしたときは三十歳ぐらいだったと思います。彼女は結婚していなかったのですが、髪を結ばずにたらしっていました。

むかし、未婚女性は後ろに髪を一本に束ねていました。結婚の際に髪を解いて二つに分け、既婚女性であることを示します。それまでは髪を一本に編まなければならず、既婚女性のように髪をたらしはけません。しかし、結婚せずに年が大きくなった場合、または未婚で出産すれば結婚していなくても髪をたらししました。

わたしを養子にしたあと、いとこのナムスライ姉さんは、結婚相手のないままに二人の子を産みました。上の娘は生後五ヶ月で死にました。下の娘はリシンジャ(李姓家)と言ひます。またドルマーと言ひモンゴル語名をもっています。

長子が生後まもなく亡くなったので、妹の方も死んでしまうのではないかと恐れて、李と言ひ姓の漢人に名付け親になってもらひ、李姓家と名付けたのです。それは、李家が彼女をこの世に留めてくれるという意味の名付けであり、その名前のおかげで生き残ったそうです。

それで、いとこである養母とその娘リシンジャとわたしの三人で生活していましたが、わたしは十九歳のときに嫁ぎました。

わたしが嫁いだあと、いとこのナムスライ姉さんもある男と結婚しました。結婚相手はナワンシャラブの父のジャミヤンと言ひう人でした。彼はしばしば家に入りにしていました。ナワンシャラブの母親が亡くなり、ジャミヤンは息子と生活していました。いとこ姉さんもわたしに

「これからわたしも結婚する。ジャミヤンがわたしと結婚しようとしている」と言っていました。それで、わたしが嫁いだからまもなく、ジャミヤンはわたしのいとこ姉さんのところに婿としてやってきて一緒に生活しはじめたのです。

わたしのいとこ姉さんのナムスライはたいへん気性の荒い人でした。わたしを罵ったり、

殴ったりしました。肉体労働での扱い方もひどいものでした。心をずたずたにするほどきついことばで罵りました。

わたしは養子にもらわれたものの、彼女のもとでたいへん苦勞をしました。両親はそれを見てわたしを早く結婚させたかったのか、ある日父がわたしを連れて行って知らない人と結婚させました。実際に知らないわけではありませんでした。知っている人でした。しかし、結婚する当日まで、わたしは誰と結婚するかを知りませんでした。

ある朝、わたしが放牧に行つて戻つて来ると、父が数人の人と来ていました。三人がウマに乗つて来ていましたが、何をしに来たのか、まったくわかりませんでした。思いもつかなかったことですが、食事が終わったあと、父は

「私たちはお前を連れて行くために来たのだよ。お母さんが川辺でお前を待っている。さあ、行こう」

と言つて、わたしを騙して連れ出しました。

父と一緒に来た三人の中で、ガルダンと言う男がわたしを自分自身の乗ったウマに抱きかかえて自分の前に乗せて行つたので、そのときわたしはちよつと思議に思いました。

わたしが連れ出されたとき、いとこ姉さんは何も言いませんでした。見送りに出て来ることもありませんでした。それに、母が川辺でわたしを待つていたわけでもありませんでした。わたしを連れて行つて、両親の家の隣にあつた姉の家に直接送りどけました。その右側に一軒の、ぼろぼろの背の低いゲルがありました。それを見てわたしは事のなりゆきにおおよその見当がつかしました。自分を誰かと結婚させようとしていることには気づきましたが、誰と結婚させようとしているのかはまったくわかりませんでした。

わたしの予想は間違つていませんでした。わたしを連れて来た翌日は少しばかりの用意をして、その翌日に結婚させました。その当日までわたしは誰のところか嫁ぐのか知りませんでした。

夫の名前はゴンチョグと言いますが、ふるさと遼寧省撫順県のモンゴルジン（地名）でした。九歳のころ、彼の両親は彼を僧侶にするために寺に送り出しましたが、彼はしっかり勉強しなかつたので、先生に怒られたりすることがありました。それで、その寺から逃げ出し、放浪しながら北京に来て、そこでまた数年間僧侶になっていましたが、それから各地を放浪しながら、二十二〜三歳のときにエジネーにやつて来ました。エジネーに来てからも落ち着く家がなく、人家をうろついて生活していました。

わたしが小さいころ、八歳以前の、両親の家に行ったとき、ゴンチョグと言う大きいお兄さんがわたしの家にぶらぶらやつて来ると、父は

「ゴンチョグが来ているぞ、髪を切つてもらいなさい」

と言つて、わたしを彼の前に連れ出していましたが、そのゴンチョグと言う人は子どもだったわたしの髪を切つてくれたことがあります。

父が髪を切るときは手が荒かつたのでたいへん痛かつたのですが、その人の手は優しく髪を切るときにまったく痛くなかつたのでした。そのようにかつて一度会つてからその人の姿をまったく見かけませんでした。

やがて、わたしが十七〜八歳になつたころ、あるときわたしが野外で放牧をしていると、彼がやつて来ているいろいろ話しかけて近づこうとしましたが、わたしは叩いて追つ払いまじつた。まったく相手にせず、

「この老いぼれじじい！」

と罵つて追い払いました。

その後、わたしのいとこ姉さんの家に来て酒とハダグ（儀礼用の絹の布）を捧げてわたし

を嫁にもらおうとしたそうです。それに対して、いとこ姉さんはまったく同意しませんでした。

「お前にはやらない。あっちへ行け」

と言って追い出しました。するとゴンチョグはまた酒とハダグを持ってわたしの両親の家に行つて懇願したそうです。両親はまさにわたしのことを心配していたので、酒とハダグを受け取つて、娘を嫁にすることを承知したそうです。それでゴンチョグは両親の家の隣に自分のぼろのゲルを建てて私を迎えに来たのでした。

もともと、わたしは彼と結婚しようなどとまったく思っていないませんでした。わたしより十五歳も年上です。それにいつも転々とよその家をうろついているような人と結婚するのは嫌でした。しかし、両親の意思に背くことはとてもできませんでした。わたしは

「嫌だ」

と泣きましたが、両親にいろいろ説得されました。母は

「お前のいとこ姉さんはお前を養子にしたけれども、使い方があまりにもきついので、お前はたいへん苦しめられている。わたしたちも年を取った。目の黒いうちにお前に家庭を作らせておけば耳も心も安らぐのではないかと思つた」

と言うふうに説得しました。父も

「ゴンチョグはけっこう年上だけど、その人の年はその人のもので、お前の年がどうなると言うことはないので、生活ができればそれでいいだろう」

と慰めてくれました。わたしの姉も

「生活が苦しくても自分が自由に生きるのは大事よ。いとこ姉さんの家でお前はあまりにも苦勞をしているではないか」

と言つたりして、みながいいように言つて説得を繰り返しました。

それでわたしは嫁いで人の妻になつたわけです。

――結婚後の生活はどうでしたか？

一九四三年に結婚しました。わたしの結婚式にいとこ姉さんは来ませんでした。その理由は、川が洪水になつて足止めされたからだと言われています。結婚したときは実家からは家畜も何ももらいませんでした。ゴンチョグも家畜といった財産を何も持っていない人でしたので、結婚後、数日間は何もせずにいましたが、それから他人の家畜を請け負つて放牧するようになりました。

その後、寺の家畜を放牧したこともありましたが、その乳をしぼつて自分たちの食用とし、その毛や皮を売つて日用品を買つていました。それで「フグニー・ウズールが伸びて」何もなかったわたしたちも数頭ばかりの自分の家畜をもつようになりました。フグニー・ウズールというのは、他人の家畜を世話したことでもらう奨励の家畜のことを指します。(フグニー・ウズールとは、フグノの先という意味。フグノとは子ヒツジやヤギたちを結ぶためのフックのついた綱)。毎年他人の家畜の世話をして、死なさず上手に育てれば毎年奨励として子ヤギをもらいます。その家畜が徐々に増えて自分で少しばかりの家畜をもつようになつたわけです。

ゴンチョグは結婚してまもなく、よその家を転々として酒を飲みまわるようになりました。二、三日で帰つて来ることもあれば、二、三ヶ月経つて帰つて来ることもありましたが。時には半年も消えてしまうことがあります。わたしはほとんど一生涯、一人で家畜の世話をして子育てをしました。

ゴンチョグは家では何もしませんでした。しかし、年老いてからはたまにポーズ(包子)やシャルビン(焼餅)を作るようになりました。作ればかなりおいしく作ることができました。そして、ときには放牧に行つてくれることもありましたが。しかし、家畜の出産の世話や乳製品

の加工などの細かい仕事を彼は一生したことがありませんでした。

——お子さんは何人ですか？出産のときは苦しかったでしょう？出産は家でしていましたか、病院でしていましたか？一ヶ月の産休などありましたか？

子どもを三人産みました。長男は結婚後の二年目に、わたしが二十一歳のときに生まれました。

残念なことに息子は二十二歳のときにウマから落ちてウマに引きずられて亡くなりました。ウマから落ちて手足の骨が折れて立ってなくなっていたので野外で亡くなりました。わたしたちはいたるところ捜しまくって七日間経ってからやっと見つけましたが、そのときはすでに死体から悪臭が出ていました。その悪臭で見つけたわけです。息子はチョイドルジと言う名前でした。すでに結婚して妻子をもっていました。その息子が今もおります。

二番目の子どもはわたしが三十一歳のときに生まれた娘で、名前はナランチメグと言います。ずっと仕事がありませんでした。その夫（上の娘婿）の名前はセルゲレンで、旗の中心地で医者をしていましたが、いまは定年退職しています。

三番目の子どもはわたしが三十三歳のときに生まれた娘で、名前はサランチメグと言います。この娘はもともと食品会社に勤めていましたが、その勤務先が解散したために娘は失職しました。仕事を失った後、少し商売を試みました。また、食堂も経営してみました。最終的に今は夫とともに馬鬃郷で牧草地を借りてヤギの放牧をしています。彼女の夫（下の娘婿）はダミダンスレンと言います。軍隊から退役してから旗の人民代表大会常務委員会の運転手をしていましたが、自分でその仕事を放棄して行ってしまったのです。

わたしの子どもたちはみな自宅で生まれました。その当時は病院のことを知りませんでした。赤ん坊が生まれて後産が済めば、もう服を着て家事をしていました。産後一ヶ月の養生のことは知りませんでした。しかし、風に晒されることを避けて三日ほど帽子を被ったり、頭巾を頭に巻いたりすることはありました。そんな気遣いをするだけで、とりわけ養生するなどということはありませんでした。

子どもが生まれるときもそれほど苦しくありませんでした。若かったので、痛くても出産のための用意をして、人を呼んで来て赤ちゃんを包んでもらうだけでよかったです。今の若い人たちのようにスープを飲んで布団をかけて横になる暇もありませんでした。

——ご主人はふるさとのモンゴルジンにお帰りになったのでしょうか？

行きました。一九七〇年だったか、わたしたちは二人の娘を連れて四人で行きました。ゴンチョグがふるさとを離れて六十年経ってただ一回帰ったのがそのときでした。帰ったのはただ一度きりでした。

夫のきょうだい全部で何人だったのかもわたしは知りませんでした。二人のお兄さんが僧侶だったそうです。姉が一人いたそうです。そのお姉さんが自分を幼いときにおんぶして育ててくれた、とよく言っていました。しかし、親戚を誰も見つけることができませんでした。八十歳を越えたあるおばあさんに尋ねてみたのですが、そのおばあさんは

「そういう一家がいたことは聞いたことがあるが、しかし、知り合いではなかった。その子孫について今はまったく知らない」

と言っていました。それで何の消息を得ることもできませんでした。

そこにある寺には数人の年寄りの僧侶がいたそうです。会って見たかったのですが、そこへ行く道が悪いというので行けずに戻って来ました。モンゴルジンは農業地域でした。ゴンチョグは生まれ故郷を一目見ましたけれども、きょうだいや親戚を見つめることはできません

でした。

——当時の生活の様子を教えてくださいませんか？

（文化大革命のために）殴られました。しかし、わたしはそれほどひどく殴られなかったと言えます。一九六六年から殴られはじめました。トルゴド党員、エルデニゲレルの「黒髻」のメンバーだと言われて殴られました。ゴンチョグはわたしより先に連行されました。家から連れ出され、牧場で働かされました。夜は頭を下げさせられて批判されました。

わたしは約一ヶ月殴られました。当時は嘘をついて逃れるという方法が使われはじめており、わたしも嘘の供述をして早く解放されました。家には人がいなくて子どもが小さかったので、嘘の供述をするしかありませんでした。

「そうです。そんな党に入党しました。誰々数人がいました」と嘘を言うと、

「よく供述した」

と言われて早く解放してくれました。チャン・クアンチャンと言う軍人に顔を叩かれたために言いました。彼の尋問は厳しかったのです。殴られて怪我をしたことはありませんでした。

ゴンチョグはわたしより先に連行されて殴られていました。尋問に耐えられなかったので逃亡したのですが、それがまたたいへんな禍になって、捕まるとますます罪が重くなって

「モンゴルへ逃亡した」

とまで言われ、ハルハのスパイとしてより一層ひどく糾弾されるようになりました。

一九七〇年にわたしは汚名をそそぐことができましたが、ゴンチョグはだいぶあとでした。

——ご両親も殴られましたか？

両親はその時代を見ることもなく、ずいぶん早くに亡くなっていました。わたしは一九四三年に結婚し、その年の秋にわたしの一家は伝染病にかかって死んだ、と噂されましたが、実際は伝染病にかかったのではなく、呪いをかけられたのでした。

当時、わたしの二番目の姉婿のダシツェレンが伝染病だという作り話をしたので、そんな話が広がりました。そのデマの詳細について話をしましょう。

その秋、上の姉が妊娠していましたが、出産が近づいたときに病気になるって、約一ヶ月経って赤ん坊とともに次々と死にました。二番目の姉も未熟児を産んで、発熱し、また赤ん坊とともに死にました。数カ月後、両親と兄の三人も病気で相次いで亡くなりました。兄は口が達者で、頭の回転が速く、しっかりした人でした。このように秋から冬の正月までの短期間に一家七人が亡くなるというたいへんな禍が降りかかりました。その病状は頭痛を起こすものでした。疲れて体力をすっかり失って寝たきりで亡くなってしまいます。それは伝染病ではありませんでした。呪いがかけられたのです。

エジネーにはハラルチ（呪い人）・シャルと呼ばれていた僧侶出身の男がいました。彼は僧侶でしたけれども妻子をもっていました。ツアガン、シャル、ダワーと言う名前の三人の息子と一人の娘がいました。わたしが結婚したその年、父はそのハラルチ・シャルと喧嘩したそうです。それで、父は

「お前は呪いをかけるのが達者だそうだけど、おれのことを呪ってみろ。呪いをかけておれを殺してみろ。殺せるものなら殺してみろ」

と皮肉って怒鳴ったそうです。ハラルチ・シャルは、憤慨して身体がふるえ、家に戻ってから呪いをかけたそうです。これについてはその後ハラルチ・シャルの息子自身が話をしてきたのを人が聞いているそうです。

呪いをかけたときは黒いヤギを殺して、血と油を混ぜて黒い色の灯りをともしました。黒い色の灯りと言うのは、灯りの台をザンバーで作るときに、ザンバーに黒い煤を混ぜるのです。そういう黒い灯りを七本ともしました。灯りの芯も煤で染めて黒い綿で作りました。こうして呪いをかけていたときに、息子が

「お父さん、どうしてそんな変なことをしているの？」  
と聞くと、彼は

「お前には関係ない。黙れ。こんなことをやっていたと人に言ったら許さんぞ。もし誰かに漏らしたらお前の頭をはたき飛ばすぞ」

と怒鳴ったそうです。そうして呪いをかけたあと、その七本の灯りの台を父の家の玄関の手前の茂みのなかに置いたそうです。それを見かけた人がいたと言われています。その後、別の人がそのハラルチ・シャルの息子に呪いについて聞いてみると、

「ぼくはよくわかりません。黒いヤギを殺して、黒い灯りをつけて念仏をしていました。しかし、それが呪いであったのか、祈りであったのかは知りませんでした」

と言っていたそうです。こういうふうにはラルチ・シャルに呪いをかけられたために、私の一家が禍をこうむったわけです。両親がいたのはバヤンボグドのゴルバン・ナマグ（三つの沼地という意味）と言うところで、アドーニー・ハシャヤ（馬群の囲いという意味）と呼ばれていました。そこはその後ボザル・ノタグ（厭わしい营地という意味）と呼ばれて、その营地の址は今でも誰も住まない禁じられた場所になっています。

伝染病が広がったと言うデマがあったためにそこに住むことがタブーとなって、いまだに「ボザル・ノタグ」と言われているのでしよう。ほんとうは伝染病が広がったわけではなかったのです。

——今はどなたと一緒に生活していらっしゃるのですか？

少しばかりの家畜を頼りに生活しています。一九四九年に解放されて、一九五八年に合作社が作られ、私たちは家畜を共有のものにして、牧場の従業員になりました。牧場に行つてからは共有の家畜を放牧するようになって、点数を記録され、給料をもらうようになりました。月給はおよそ七十元でした。

一九九〇年代に国营牧場がソムになったため給料制ではなくなりました。少しばかりの家畜を分けてもらいました。それが合作社設立当初、共有にした家畜の利息としての家畜だと言う説明を受けました。

国营牧場が廃止されてソムになったとき、家畜を三十頭分けてもらいました。それをもとからもつていた数頭の私有家畜と合わせて、人に放牧を頼みました。下の娘サランチメグの息子オルガー、つまり孫が、放牧地において管理してくれているのです。もう百頭になったでしょう。

わたしは今オルガーの娘のジメスと一緒に旗の中心地に住んでいます。ジメスは今旗の中心地でモンゴル族幼稚園の保育をしています。二十九歳で、まだ結婚していません。

ゴンチョグは一九八八年に尿道がふさがると言う重病にかかり、旗の病院では手に負えませんでした。シーホー（十号）の軍の病院に連れて行っても無駄で、その年に亡くなりました。わたしは、まあ、こんな感じで何とかなっています。

上の娘には三人の娘がいますが、三人とも仕事がありません。その母にも仕事がありません。娘婿の退職後の給料だけを頼りに生活しています。末っ子の息子の名前はオクタルゴイと言います。今はフフホトで学校に通っています。二番目の息子の名前はオルギルと言いますが、仕事がなく、家にいます。上の娘のオドバルにも仕事がありません。まだ結婚していません。

今は職がなくてフフホトにいます。以前はいとこのアルタンホアル姉さんに面倒をみてもらい、居候をしていました。医学を習ったのです。

兄のモロムはバヤンボグドの寺(新西廟)で健在です。九十一歳です。七歳のときに寺に行つて僧侶になつたそうです。わたしは十五歳のときに、貴族の息子、ダムデイン・タイジの家を召使として通つたことがあります。

わたしが十九歳で結婚したとき、活仏がお亡くなりになつていたため、乳製品だけを使つての結婚式をしました。つまり、肉を出さずに乳製品や、乳から作つた蒸留酒を使つての結婚式でした。オーツ(腰から尻にかけての部位)などを並べる儀礼はしませんでした。

——移動と牧草地について話していただけますか。

秋と冬はゴロナイに移動して、夏は中川(ドンダ川)の川辺にやつて来て夏場をすごします。ゴロナイは中部に葦があつて、両側にザグ(サクサウル灌木)があり、向こう側に砂地があるすばらしいところでした。その後、その牧草地は軍隊に譲られて、わたしたちは一九五七年にソブノールに引越してきてわたしは幼稚園の子どもの世話をしました。

一九五八年に国营牧場に引越しました。牧場に来てからはわたしがヒツジを放牧して、息子はウマを放牧しました。約二百頭のウマを数人で共同放牧していました。

一九五九年、わたしは夫とともに千頭のソバイ家畜(不妊の家畜、すなわち去勢オスや、その年に出産する予定のないメスの家畜)を放牧しました。そのとき、夫は少しばかりヒツジの面倒をみてくれるようになっていました。ほかのことは何もしなくても、ヒツジの群れのあとについて放牧に行つてくれるようになりました。翌年に、ソバイ家畜を返却して、約四百頭の子連れの家畜(母子群)を請け負つて放牧するようになりました。

家畜のために、トーライ(胡楊)や、ソハイ(タマリスク)の木を使つて囲いを作りました。冬用には厚い囲いを作り、夏用にはゆつたりした囲いを作りました。

川にはいつも水がありました。五月から六月のころは水が少し減りますが、なくなることはありませんでした。一九五二年には南川(エジネー川)の水を遮断していましたが、その後、北川(ムレン川)の水を止めたために、南川から水がよく流れるようになっていました。

川には魚がいました。しかし、モンゴル人は魚を食べませんでした。鳥もたくさんいました。鴨、雁、鶴、黄鴨、白鳥などの鳥類がいました。白鳥は少なかつたです。

植物には、トウング、ヒヤグ、アスマグ、ツエゲレグ、シャラルジ(ヨモギ類)、ホルス(葦類)がたくさん生えていました。ラクダはザグ、ツエゲレグ、ポド・ボダルガナ(アカザ類)を食べます。一年の四季に家畜と人間に水や草が不足したことはありませんでした。

トーライ(胡楊)やソハイ(タマリスク)は天に届く勢いで伸びて、その中をラクダに乗つて通つてもゲルの屋根が見えるか見えないほどでした。秋は、家畜がほんの少し離れるだけでもその姿を見失うほど草の茂みが、通る道をふさぐほど生えていました。

二〇〇三年九月二日午前十時ごろ、エジネー旗の中心地市内にあるボルさん宅を初めて訪問して聞き取りをおこない、二〇〇四年五月六日午後七時ごろ再訪して、いくつかの点について確認した。

ツェレンナドメドさんは一九三八年、寅年生まれの六十五歳。ラクダを放牧して暮らしていた遊牧民の子は、国境を越えてモンゴル国で成長した。

——幼い頃のことを話してくださいますか？

わたしはアラシャー盟のウネトゴルに生まれました。一人娘で、父の名前はドブチンと言います。アラブ系の人です。母の名前はセムジンと言います。二人とも牧民でした。ウネトゴルはラクダのふるさとです。両親は一生ラクダの放牧をしました。モンゴルに行く前は百三頭のラクダをもっていました。一九四〇年にモンゴルに移住しました。国境あたりにはラクダをハルハ軍が追って行ってしまいました。それでわたしたちもモンゴル国に住むようになったのです。

モンゴル国のツアイラン（現在のウムヌゴビ・アイマグ、ノヨン・グンの領地で、軍事基地）に一年間滞在して、そこからアルハンガイ・アイマグのホトント・ソムのホーラインホダグと言うところへ送られ、わたしたちはそこで生活をしていました。七々八世帯が一緒でした。

わが家の家畜と言えば、ラクダが九頭、七々八頭のウシ、ヒツジとヤギが二十数頭でした。一緒に暮らしていた家はかなり裕福で、たくさんの家畜を持っていました。

モンゴルにいたとき、二十歳以上の人にはパスポートが与えられていました。わたしは一九四八年、十歳のときにホトントで学校に入りました。わたしの兄といこのプレブ（母が姉妹土の息子）はオラーンボラン（赤い部屋）の意。社会主義下の芸術活動施設）の音楽関係の仕事をしていました。それでわたしは兄の近くで学校に入りました。

わたしのいた学校の校長先生の名前はダムディンスレンでした。学校が教科書や鉛筆などを全部無料でくれます。授業料はただでした。今覚えている同級生にはバルガンズレン、ツェレンジャブ、プルブフーと言う人たちがいます。わたしの小さいころの友だちにマローシヤと言う名前の髪が長い子がいました。だいたい一九五〇年か、一九五三年までの間にホトント・ソムの学校で一緒でした。わたしは今でもぜひ会いたいと思っています。

アルハンガイのホトントは人が多くて、国境から遠い内地なので、内モンゴルから来たわたしたちを逃さないようにそこに送ったのでしょう。アルハンガイはとてもすばらしいところですよ。草も水も豊富です。多くの世帯が一緒に遊牧していました。それほど遠くへ移動することもなく、早魃になることもありませんでした。埃が立つこともなく、緑の濃いところですよ。

アルハンガイはウマのふるさとだと言われています。実際、各家庭はいくつもの小さな群れからなる馬群を持っていました。ヤギの乳や牛乳も豊富でした。乳しぼりは一日に三回もします。そうしなければ母畜の乳が張ると言うのです。秋にはクリームからバターをグゼー（ヒツジやヤギの第一胃を大きく風船のように吹いて伸ばして乾かした袋）に入れて七々八個作ることができます。

最初にわたしたちと一緒に来た世帯のうち、オラド地方のトソノー（ダリスレン）、ジンジグイ（独身）、グンジドマー（子どもが二人）、シャル（子どもが四人）などは南ゴビまで来てそこに残りました。アルハンガイまで来ませんでした。南ゴビは牧草地が悪く、早魃があり、草がまばらです。

わたしたちは一九五三年にアルハンガイから南ゴビにやって来て、ノヨン・ソムのハンホンゴル第二バグで三年間生活して、一九五六年に中国に戻って来ました。南ゴビのツアイランにいた三十世帯の一〇五人が、約六千頭の家畜、九百頭あまりのラクダを追って国境を渡ってやって来ました。

なぜモンゴルから戻って来たのかと言えば、モンゴルと中国が相互に住民を返す条約を結んだため、一九五六年に両側の軍事会合によって返されたのです。それでわたしたちはモンゴ

ルのアラグシャンドからこっちに出て来て、アラシャール盟のウネトゴル・ソムに来ました。ウネトゴル・ソムは付属ソムでした。現在のエジネーに属します。一九六〇年ごろにウネトゴル・ソムをエジネーに所属させました。

わたしは一九五六年九月に戻って来て、その年の十一月にわたしは就職しました。わたしは読み書きができたので、アラシャール左旗の婦女連合会の幹部になりました。

わたしたちと一緒に戻って来た人のなかでシャルチンはアラシャール盟合作社の主任として勤めました。ヤランピルはウネトゴルのソム長を務めました。ヤランピルはわたしの母方の叔父です。母の弟です。プレブはアラシャール盟のオラーンムチル芸術団の創設者です。

プレブとわたしはいとこ同士で、同じ家庭で育ちました。きょうだいのように親しい間柄です。ポルドバートルは思想宣伝部に任命されました。その後、そこからオラーンムチル音楽隊に行きました。帰国後、わたしたちは教育を受けていたので仕事を与えてもらい、生活を整えてもらいました。

——その後の家族の状況を話していただけませんか？

一九六一年に夫と知り合って、結婚しました。「ハルハのスパイ」「内人党（内蒙古人民革命党員）」「実権派の富牧」「牧主」といった多くのレッテルを貼られて、わたしは一九六六年九月から殴られはじめました。

夫は教師をしていました。子ども（養子）が一人いました。娘のナランツェツェグはまだ三歳でした。夫は学校の施設のなかに閉じ込められていました。わたしは林業工場に行かされて、母はウネトゴルの放牧地にいました。このように一家四人が三ヶ所に別れて生活していました。

わたしは一九六八年十月から五七幹部学校（思想改造所）で監視のもとで働きました。月給は二十五元でした。子どもの手当ては月十元でした。一九七〇年に夫は仕事に復帰し、一九七一年の十一月からやっと一家四人と一緒に生活できるようになりました。

その後、二人の子どもを養子にもりました。一九七三年には正式に名誉回復されました。わたしは全国婦女連合会から三十年勤務名誉証書をいただきました。ずっと子どもは生まれず、三人の子どもを養子にしました。

——文化大革命の渦中では主にどういう理由で批判されたのですか？罪名はなんでしたか？

主に「ハルハのスパイ」として殴られました。わたしは帰国後、キリル文字ができるので多くの人たちにキリル文字で手紙を書いてあげました。ハルハに親戚や友人をもつお年寄りたちがわたしに頼んで手紙を書かせていました。それに、先方から届いたキリル文字の手紙をわたしに読ませていました。そして、その返事を書かせていました。そんなことをしていたので、文化大革命がはじまるとそうした親切がぜんぶ禍となって、「ハルハのスパイ」をしていたと言うことになり、無実の罪を着せられました。

ハルハへ手紙を書かせていた人たちも批判されてひどく問い詰められていたようです。それで誰かがわたしのことを「ハルハのスパイだ」と言ったようです。

——最近になって、モンゴルに行かれましたか？

一九八六年に、モンゴル国ウムヌゴビ・アイマグのノヨン・ソム中学校で美術の教師をしていた、いとこの弟ゾリグトが訪れて来ました。それで、わたしは二連市から出国してモンゴル国に行つて来ました。そのあと、一九九五年、一九九八年、二〇〇二年にそれぞれ行きました。親戚たちがいまモンゴル国にいます。その生活はわたしたちには及びません。しかし、モ

ンゴル国の自然や牧草地はすばらしいです。

二〇〇三年九月三日ツェレンナドメドさん宅（エジネー旗の中心地市内）を訪問し、聞き取りをおこなった。

ナランさんは一九四〇年、辰年生まれの六十五歳。ハルハの人である。両親ともにハルハの人で、彼女自身も現在の、モンゴル国ウムヌゴビ・アイマグのセブレイ・ソムで生まれた。二歳のときにアラシャー右旗に移住して来た。そして一九四九年に両親が祖国に戻るとき、ナランさんは母方の祖母のもとにとどめられた。もはや年老いて、帰国する意志がなく、この移住先にとどまると決めた老女には「人の姿が必要である」。誰が残るか、と決断に迫られた人びとは、ちょうど八歳で祖母に可愛がられる年ごろであった彼女を残すことにした。こうして彼女は両親と別れ、祖母のもとで叔父たちとともに育った。祖国に戻った親きょうだいでと再会を果たすまでに四十一年の歳月が流れた。

——あなたの子どものころのことについて話していただけですか？

両親のことからお話ししましょう。

わたしの父の名はエリンダーと言ひ、母の名はトゴーと言ひました。両親からは十二人の子どもが生まれて、そのうち九人が存命でしたが、最近一人亡くなったので、八人残っています。私はきょうだいのなかの三番目です。

一番上の兄の名はダムバラブチャ、二番目はデルゲル姉、三番目が私で、四番目は妹シレムで、彼女は一九四二年にハルハから移住する途上で生まれ、最近、子宮癌で亡くなりました。五番目は妹のソム、六番目は妹ジブザンホルロー、七番目は弟トゥグスオチル、八番目は弟セングオチル、九番目は弟オドフーです。

ダムバラブチャ、デルゲル、ソム、オドフーの四人は、現在、モンゴル国のウムヌゴビ・アイマグのサブライ・ソムで遊牧民をしています。セングオチルは、ウムヌゴビ・アイマグの中心地ダランザドガドで仕事をしていましたが、現在はそれを辞めて商売に従事しています。トゥグスオチルとジブザンホルローもダランザドガドで仕事をしています。デルゲルの娘がウムヌゴビ・アイマグのノヨン・ソムで仕事をしています。ノヨン・ソムは、ちょうどエジネーのツエへと国境を接しているソムです。

わたしは八歳のときに祖母のもとに引き取られました。そうして、兄や姉から離れて一人エジネーに残ったのです。両親とともに彼らはみなモンゴルへ戻って行きました。

当時、両親はアラシャー右旗の賀蘭山のアルタンデブシと言ふところに住んでいました。そこへ祖母がやって来てわたしを連れて行くとき、兄と姉は行かせまいとしたそうです。すると、祖母が

「ロボンチムボ寺（バヤンノール盟にある）におまいりに行くから」

と言つて連れて行ったそうです。兄と姉は後ろから山麓を走って追いかけたけれども、見る見るうちに遠くへ遠くへと消えてしまったのだそうです。

両親は賀蘭山の方からアラシャー左旗のゾナ山（三十六バグの一つ）までやって来て、そこからハルハへ出ました。当時、ブーベイダーマルと言ふ良い人がとても優秀で、数戸がハルハへ帰還するために尽力して、ハルハ軍と約束を交わし、あらかじめ決めておいた夜に移住させてくれたそうです。

わたしの祖母はとても貧乏な人でした。三人の子を産んで、家畜や財産をまったくもたないまま空手でハルハからやって来て、アラシャー盟左旗のゾナ山に居るうちに、やがてエジネーに来て住むようになりました。わたしが引き取られたころにはせいぜい三十頭のヒツジ、ヤギがいました。祖母の名はバグマーです。

わたしたちは所有する家畜が少なかったもので、他人の家畜の面倒をみて少々の報酬をもらっていました。うまく放牧がよく育てば、百頭に対して一頭の報酬をもらいます。そうしているうちに、家畜はとでも増えました。

一九五六年、祖母は七十五歳で亡くなりました。一人ぼっちになったわたしは、他人の家をたよってそのそばに宿営しました。ドゴイランが組織されはじめたときもまだわたしは一人で自分の家に住んでいました。一、三、五戸が合作して大きなドゴイランになってゆきました。そのとき、わたしには、四十頭のヒツジ、ヤギ、二頭のラクダ、二頭のロバがありました。合作社になるとき、これらの家畜を提供して、公共の家畜を放牧することになりました。三百〇四百頭の家畜を一〇二戸が協同で放牧します。公共の家畜をおよそ二ヶ月放牧したのち、選挙によって、わたしは紅星合作社の副長に選ばれました。

リーダーに指名されてからは人びとのあいだで共同の仕事をしながらいリーダーになってゆき、二年間勤めました。当時、人びとは

「この子は良い子だ。たくさんの仕事をする事ができると、信じて選んでいました。けれども、わたしは恥ずかしがりやで、人前で話すことができなせんでした。」

ひとつのエピソードをお話ししましょう。一度、大勢の集る会議で話をするように言われました。断つてもどうしようもなく話すことになりました。あらかじめ紙に書いておいて、会議の前まではそれを何事もなく読むことができたのですが、いよいよというとき、気が動転して、紙に書かれた文字がまったく読めなくなり、しどろもどろで、手足はがくがく震え、恥ずかしくて死にそうになり、とうとう気を失って倒れてしまいました。それ以来、人前で話すことはしなくてもよくなりました。そんなふうにして二十歳まで生きていました。

——二十歳で結婚されたのですか？

いいえ。わたしは十八歳で結婚しました。人が紹介してくれた家で、舅姑とともに暮らしました。合作社になってから、結婚式をしました。わたしの前夫はダンザンと言いました。

裕福な遊牧民トクトフには二人の息子がいました。兄はバヤンジャルガルと言い、軍に行っていたのが戻って来ていました。もともとは国民党の軍隊でしたが、解放後は地元で幹部になっていました。文化大革命中に引つ張られて、馬鬃郷に行かされていました。向うで七年暮らして戻って来ました。弟のほうはダンザンで、彼はサイハントライの紅星生産隊の長になり、また会計士にもなっていました。

「四人組粛清」のときに「公共のものを食べた」などと噂が出ました。しかし、彼が公共の財産を私物化して自宅に持って来たなどということはありません。彼はもともとトルゴード人でした。わたしよりずっと年上でした。

当時、生活にとっても困窮していました。現金は少なく、公社の仕事をして点数を記録し、それを計算して給料として配ります。会計士は計算して人びとに給料を配る係りです。当時、彼が何を考えていたか誰が知るでしょうか。人びとに配るべきお金を持ち帰ってベッドに隠していたのです。わたしも知りませんでした。わたしにも言いませんでした。

結局、そのお金をもらうべき家の人たちが家捜しをして、わが家のベッドの下から件のお金が出て来たのです。それ以降、彼は人びとから盗人とみなされ、疑われるようになりました。

わたしもまた人の家に行ったり、大勢の人がいる場所に行ったりすると、大いに疑われているような気がするようになりました。それで別れようと思うようになり、一九七〇年にダンザンとは別れました。

——離婚するときにお子さんはいましたか？ いまありませんでしたか？

いないはずありません。二人の子どもがいました。上はアルタンツェツェグで亥年です。

一九五九年に生まれました。一九六二年に、彼女が三歳のとき養子にもらいました。

わたしは結婚してから、一人は流産し、一人は死産しました。それで子どもが定着しないので、養子をもらったのです。その後、一九六七年に自分自身、一人産みました。ガルデイと言ふ息子です。前の夫ダンザンの子です。現在、バヤンボグド・ソムのアモル派出所に勤務しています。

一九六九年に妹が生まれましたが、生後一週間で亡くなりました。ガルデイを産むときわたしはひどく疲れました。何しろ二十七歳といふかなりの年齢で産んだからでしょう。かつては十七〜十八歳で産んでいましたが、若いと身体が柔らかいので安産なのだと思います。陣痛がはじまって三日三晩経ってからようやく生まれしました。旗の中心地にある病院に入院していました。

痛みがようやく消えても、生まれた赤ん坊がまた下痢をして、乳を飲むことができず、夜通し泣いていました。わたしは乳児を抱いて一晩じゅう起きていました。その結果、腰を痛めることとなり、死にそうになりました。一晩じゅう起きていたとき、看護婦に手伝ってくれるように頼むと、彼女は

「ちよっと待って」

と言ったきり、二度と来ませんでした。夜が明けるまで放置されました。

そんなふうに病院で三日過ごして、赤ん坊のお腹の調子が少しましになってきたので退院し、自宅に戻って数日もりました。当時は、産後に一ヶ月休養するなどということはありませんでした。けれども、風にあたらないように気をつけてはいました。

離婚してからしばらく一人で暮らしていました。二人の子どもはまだ小さかったのですが、彼らを幼稚園と小学校に入れて、しっかりと勉強させて、人から遅れを取るまいと必死でした。また、三人の生活が向上するようにと家畜の世話をしっかりしました。そうやって二人の子どもを一人前にしたのです。

そうして一九七五年に現在の夫であるジャルガルと結婚しました。

ジャルガルは貧乏な家の出身で、兄弟二人でした。人柄がとてもよく、信頼できる、寛容な人です。一九八〇年代までムンクト生産隊の会計士をしていました。最近では頭痛がひどいので仕事を辞めました。彼の唯一の弟は、一九七九年か八〇年に亡くなりました。その事件が原因で、それ以来、彼は頭痛がするようになったのです。

彼の弟は、酒を飲んで酔っ払い、奥さんと口論になり、家を出て、外をうろついているあいだに亡くなりました。ジャルガルは弟のことを心配して探しまわっていると、まさに首をくくって自殺した弟の遺体と遭遇し、ひどく驚き、以来、頭痛に悩まされています。

一九七五年、小さな息子ポロールを養子にもらいました。乳児のときにもらって、今ではすっかり家のこと、家畜のことを任せています。一九八三年に家畜が配分されるとき、わが家はわたしたち夫婦とポロールの三人でした。娘と息子はすでに大きくなって別の家庭をかまえていましたから。それで、わたしたち三人には、百八十頭のヒツジ、ヤギと、二十頭のラクダと、二頭のロバが配分されました。最終的にラクダは返して、共有のものにしました。

現在、ヒツジ、ヤギは増えて六百頭になっています。これからは毎年、売却して、四百頭までに制限しようと思います。ポロールは嫁をもらい、現在、子どももすっかり大きくなって今年、小学校に上がりました。息子は嫁と二人で家畜のもとに暮らし、わたしたち年寄り二人で町に住んで、孫の面倒をみています。

配分された放牧地は、サイハントーライ・ソムのムンクト・ガツァーにあります。現在、金網を張って囲いました。みな自分の放牧地を囲っています。わたしたちの二人の子どもたちは、三十ムーの農地を耕して綿花も栽培しています。十ムーはどうもろこし、十五ムーは飼料

用の高粱、それに野菜や西瓜を少々栽培しています。

三十ムーはジグドの木も植えています。これは、ムンクト・ガツアアの「退耕還林」政策です。ジグドの植林には補助金が出ます。一ムーの植林をすると、百斤（一斤は五百グラム）の小麦粉、百斤のとうもろこし、そして二十元が与えられます。植林の奨励です。この補助金は八年間続くそうです。

放牧地を守るために若い二人はとてがんばっています。放牧地のなかをいくつかに区切って利用しているようです。そもそも、胡楊の木を守るための主要な地区は、ソブノールとジャルガラントの二つのソムです。わがサイハントーライももちろん胡楊を守るべきです。これが小さな息子の現況です。

——あなたは文字をいつどのように学びましたか？

一九五六年にドゴイランが組織されて学びました。当時は、三〜五戸が一つのドゴイランになって共同がはじまりました。文字文化を学びます。また共同でヒツジの囲いを作ります。当時、少し文字を学びました。いまでも忘れていません。

ドゴイラン時代に、わたしたちは六戸で共同し、家畜をまとめて、それから去勢オスの群れと妊娠可能なメスとに分け、また子ヤギの群れを別にして放牧するようになりました。すると、いろいろな問題が発生しました。去勢オスばかりの群れは落ち着きがなく、しよつちゅう動いて定まりません。子ヒツジや子ヤギばかりの群れは夜、寒くなった子畜たちが集り、折り重なって重みで死んでしまいます。そこで、再び家畜をまとめなおしました。

このドゴイランがはじまった一九五六年に、私の祖母は胃癌のために三ヶ月入院し、息をひきとりました。七十三歳でした。ラクダに燃料を積み、燃料の上に遺体を載せ、遠く運んで野に放ちました。あとで訪れてみると、頭蓋骨が散らばっていました。

祖母が亡くなってから、わたしは一人で他人の家の近くに宿営し、少々の家畜をその家に預け、その家の移動に付き従って移動していました。そうこうしているうちにドゴイランがはじまると、ドゴイランとして互いに協力しあいました。

当時は家畜の放牧地は良かったです。わたしたちはたいいてい川に沿って移動していました。川に沿ってソリ（芝類）、ホルス（葦類）、シヘル・ボヤー（甘草）、ホロン・ボヤーなど良い草がありました。わが家にはラクダがいなかったので、移動するときはよその家からラクダを借りました。

ドゴイランになるよりずっと以前、祖母がまだ生きていたころには、他人の家畜を放牧していました。ジャスの家畜（寺の所有する家畜）を放牧していました。ジャスの家畜は失ってはなりません。食べてはなりません。頻繁に頭数をチェックします。毎年、生まれた子畜の頭数を数えます。ジャスの家畜は角に印がありました。もし、病気で死んでしまったときには、この角を残しておいて、証拠に見せなければなりません。ジャスの家畜は搾乳して、バターオイル寺に納めます。

老西廟の家畜をサイハントーライの人びとが放牧していました。解放後、貧乏な家庭には福祉と称して共有の家畜を与えていました。しかし、祖母はその援助の家畜をもらうのを嫌がっていました。「他人のものは人になじまない」と言っ、自分の三十頭の家畜だけを放牧していました。

——当時、必要なものはどこから購入していましたか。

わたしが小さかったころは、商人が来て、家畜の皮や毛と交換にお茶などを与えていました。ヤギの刈った毛は丸めて塊にして売っていました。ヤギのカシミヤは浮き上がって来た

ときに切ります。一つの塊のお茶はヤギ三頭くらいで交換されていました。きれいな礼帽は一つでヒツジ一頭と交換していました。わずかなものを、訪問して来る売買人から買っていたのです。ときどき、町へ行く人に毛皮や羊毛を預けて、いろいろと購入して来てもらうこともありました。

——文化大革命のときはどのような状態でしたか？

なんとか引つ張られずにすんだと言うところですよ。わたしは「黒幫」の人間だと引つ張られかけました。またモンゴル人民共和国に親戚がいるから修正主義になったと疑われました。黒い党（内蒙古人民革命党）の黨員だと言って引つ張られかけました。内蒙古人民革命黨員だと疑われ、呼びつけられ、取調べられました。生産隊長などになっていた人は、かならずトルゴード黨員だと決めつけられていました。

「わたしは内蒙古人民革命党にもトルゴード党にも入っていない」と真実を言うと、

「おまえが内蒙古人民革命党に入ったことは、一緒に入った連中が白状しているぞ」

「さつさと白状しろ！どんな活動をしているのか。党の目的は何か」などと、強制してどうしようもありませんでした。太い縄を出して来て

「さつさと白状しなければ、この縄でしばって監禁するぞ」と何度も脅かすのでした。

当時、わたしはちやうど妊娠していました。一九六九年のことでした。生まれてまもなく死んだ赤ん坊がまだお腹にいたところです。まさに臨月でした。二人の子どもはまだ幼く、母代わりになる人もなく、二人の子どものことを思うと心が真つ暗になり、どうしてもここから出なければならぬと思いました。人は困ると知恵が出るものなのです。

「わたしは内蒙古人民革命党に入りました。党の活動は、内外蒙古を一つにすることでした」

と嘘をついてなんとか脱出しました。妊娠中でしたので、それ以後あまり取り調べられませんでしたが。観察だけされていました。わたしは

「内蒙古人民革命黨員め！」

と罵られていましたが、殴られずにすみませんでした。

「黒幫のナランが放牧していた家畜なのに、ほかの家畜と同様に白い子ヤギを産んで、區別できないのは厄介なことだ」

と罵っていると聞きました。本当にたいへんな時代でした。

トウメンフルジェーと言う地元の人がいきましたが、彼は監禁されていたとき、一緒に捕まっていた人に

「私は家へちよつと帰って来る。言うな」

と行って家へ帰ると、追っ手が来ていて家で捕まり、有無も言わず殴られて

「おまえは妻に何を言ったのか。さつさと白状しろ」

と迫られたそうです。それで彼は

「わたしは妻に、ヒツジ、ヤギたちは妊娠しているか、種オスはメスを追っかけているかと質問しました」

と正直に答えました。すると、追っ手たちは

「おまえはまたオラーンフー（烏蘭夫）の黒い路線に従って牧畜を振興しようとしているな」とますます激怒したそうです。

当時はこんなふうには白黒がつけられ、友人知人がまったく信じられなくなった時代でした。

——ハルハにいらつしやる親戚たちとお付き合いはありますか？

あれは何年のことだったかなあ。きょうだいたちがわたしを探しはじめました。すぐに返事をして連絡を取りました。そして一九九〇年か九一年にわたしは母を訪問することができました。フフホトへ出て、そこからウランバートルに飛び、そしてウムヌゴビへ向かいました。別れて四十一年後にふたたび母に会い、弟たちと知り合いになりました。以後、彼らもまたこちらへ来て、もう幾度も往来しあっています。現在は、ツェへの国境で往来できるので、とても近くなり、また安上がりになりました。

以前は、とても費用がかさみました。二連の国境で二十日間待たされたこともありましたが、今日では、ますます簡単になっています。国境貿易が許可されているときに、そのまま北上すればいいのですから。

母が生きているあいだは、毎年会いに行こうと思っています。いま、母は八十八歳です。一九一六年生まれですから。

二〇〇三年九月三日夜、長女のアルタンツェツェグさん宅で聞き取りをおこない、二〇〇四年八月二十五日午後、ナランさん本人宅で再び聞き取りをおこなった。

マーモールハイさん、辰年生まれ、数えて六十五歳。一九四〇年にアラシャール盟エジネー旗に生まれた。母方の両親が二人でハルハからやって来て、一人娘が生まれた。マと言う名前前で、それがマーモールハイの母になる。マーモールハイがわずか十二、十三歳のとき、母は病気で亡くなった。父はラブダンと言う。もとは国民党の軍にいて、軍長を務めていたと言う。妻が亡くなって故郷に戻り、各家庭の仕事を引き受けたりしながら糊口をしのぎ、いつしか一人の女性と暮らすようになった。そして文化大革命の時代に、引つ張り出され、迫害されて亡くなった。マーモールハイは六人きょうだいである。一番上は、兄のダンザン、二番目は姉のザヤール、三番目がマーモールハイ、四番目が妹のノルジマーで、彼女は現在、内蒙古自治区シリングオル盟にいる。五番目が妹のナンジルマーで、現在、エジネー旗の中心地に住んでいる。六番目は弟のゲンデンスレンで、急死した。

——あなたの小さいころの話をしていただけませんか？

わたしは八歳のときに養子に出されました。エジネー旗の有名な富豪のソノムダルマの養子になりました。わたしは二番目の養子でした。わたしよりも前にドムチョと言う娘が養子になっていました。ドムチョはかなり小さいときに養女になったそうです。ドムチョはわたしよりひとつ年上で卯年生まれだったので、義理の姉になります。わたしのあとにもまたドルガルジャブさんを養女にしました。ドルガルジャブさんは最近までソノムダルマの面倒をみていました。

——あなたの養父であるソノムダルマさん宅はどのような家族構成でしたか？

わたしたちはソノムダルマのことを敬して「ジョーナイ」と呼んでいました。ジョーナイは結婚していませんでした。姉と弟の三人とも家を出ず、一つのゲルに住んでいました。ジョーナイの姉はダシゼグと言い、わたしたちは彼女をマーマと敬して呼んでいました。弟はサンサライと言い、ガーガーと敬して呼んでいました。これら三人のほかに、わたしたち三人の養女と、召使が数人いました。わたしたちは養子とは名ばかりで、実のところは召使でした。召使たちと一緒に食事をしていました。召使よりも良い点などはほとんどありませんでした。召使なら、しょっちゅう交代します。つねに二、三人はいました。

召使が食べるものは何でも食べます。肉はジョーナイ自身が食べるもので、わたしたちは食べません。わたしたちは普通のみすばらしいものを食べます。朝は、お茶を飲み、ウルム（クリーム）やシユールメグ（チーズ）を食べ、昼にはオンド（小麦粉を溶かした飲み物）をみんで飲みます。夜は、乳を飲みます。冬にはときおり、肉をゆでた汁に穀類を入れて食べますが、肉は食べません。

——どれほどの家畜があったのでしょうか？

わたしが養子にいったころにはそれほどたくさん家畜はなかったようです。わたしは一九四八年に引き取られました。わたしが十七、十八歳になったとき、家畜を共有に供出ししました。そのとき、百頭の雌ラクダが子どもを産んでいました。

わたしはもっぱらラクダの放牧を担当しました。ラクダは、母子群とソバイ群との二つに分けて放牧しますが、わたしはもっぱら母子群を扱いました。一九五八年秋、共有化の政策に参画するとき、一千頭の家畜があったそうです。

わたしたちがもとと住んでいたところは、ソブノールのこちら側で、ツアガンデル、シャリントーライと言うところで放牧していました。もともと四つのソムに属していましたが、国营牧場ができるときに、その管理下になりました。牧場の中心地はモジと言うところでした。

牧場でもわたしはラクダを放牧していました。

一九五九年にわたしは嫁ぎました。夫はダムバジャブと言います。彼は非常に貧乏でまったく家産がありませんでした。それで結婚するとき、ジョーナイが小さなゲルをくれました。家財道具一式もそろえてくれました。結婚するとき、実の母はもう亡くなっていたので、せめて父が来てくれるかと思いましたが、来ることができませんでした。父は一人であちらこちらの家の用事をして暮らしていたので、暇がなく、来ることもできなかったのです。

結婚後もラクダの放牧をしました。一九六一年に牧場を去り、サイハントーライのバヤンタル・ガツァーに来て、生産隊の百余頭のラクダを放牧しました。

一九八三年の配分のときにも、わたしたちは百余頭のラクダを放牧していましたので、これらを各戸に配分し、わが家の分として五十頭を残し、ほかにヒツジ、ヤギを六十頭、二頭のロバをもらいました。二〇〇〇年にラクダの半分を共有に返却し、残りの大半を小型家畜に換えてもらいました。交換比率は、ラクダ一頭がヒツジ、ヤギ五頭です。少し残ったラクダは現在、放牧してあります。

私たち老人はもう放牧できないので、こうやって住宅を管理しています。ここで少しの家畜を飼ってもいます。二〇〇二年十二月にこの移民村に移住して来ました。十頭あまりの家畜を戸口付近で囲って飼っています。

— お子さんは何人いらっしゃいますか？

わたしたちは子どもがありませんでしたので、よそから三人養子をもらいました。この三人の顔を見てわたしたちは暮らしています。

長女はナランゲレルと言います。一九六〇年生まれです。生後四ヶ月の乳児のころに連れて来ました。子どもをもつ喜びを教えてくださいました。現在、旗の公安で働いています。

二人目は息子のホビスガルチです。巳年です。一九六五年生まれだと言います。わたしは彼が十一歳のときにもらいました。学校を卒業してから旗へ帰ってきて務めていましたが、近年、仕事を辞めて、牧民になると言って牧民になりました。しかし、移民村に家をもらって移住して、自分は瓜を栽培しています。家畜は人に任せてしまいました。聞くところによれば、瓜の畑も人に売ってしまったそうです。何も話してくれません。

三人目はアルタントヤーと言い、旗の経済局に勤めています。一九七二年に生まれ、まったく乳児のうちに引き取りました。今わたしたちは、この子どもたち三人の善行に頼って生きています。

— 文化大革命のときはどのような状態でしたか？

文化大革命のときは何もレッテルを貼られませんでした。何事もなく過ぎました。わたしは富豪のソノムダルマの養女でしたけれども、本当の子どものような能力がありませんし、実際には召使であったことを人びとは知っていました。また、わたしたちは夫婦になって別の世帯をかまえていました。そのために「富牧」のレッテルを貼られませんでした。

しかし、わたしの姉にあたるドルガルジャブさんは批判されました。彼女はセンジツエレンと言う息子を養子にしていました。文化大革命中は、身分の高い生まれの人を「階級闘争」と称して変更しようとした。彼女の夫はザナーと言います。最後まで養父ソノムダルマの世話をしたのはドルガルジャブです。

最後の数年間に、弟のサンサライが半身不随になり、兄のソノムダルマは足を折って寝たきりになりました。彼らきょうだいたちをともにドルガルジャブが世話していました。文化大革命のときに連れて行かれてしまうと、彼らの面倒をみる人がなく、ほとんど飢えて死んだよ

うなものです。

半身不随の弟のほうが先に亡くなったそうです。兄は足が折れていて動くこともできず、動きがとれなかったようです。七十歳近かったでしょう。誰が葬ったか、知りません。知っていたとしても、私たちが行くことは許されませんでした。葬った人がいるはずですが。わたしたちは後日、人から聞きました。聞くところによれば、二人が死んだということで運ぶとき、ソノムダルマはまだ息があつたと言います。二人をラクダで振り分け荷物にして運ぼうとしても、生きていたソノムダルマが重くて振り分けられないから、ザナーが抱いて運んだそうです。こうして、死んだ者と生きている者が一緒に焼かれたと言うことです。一九六六年か六七年のことでした。あとからわたしたちは話を聞きました。

——人を葬るときにかならず焼いていましたか？

文化大革命より以前なら、むかしの風習にしたがつて、僧侶に土地を選んでもらって、人畜から離れた良い場所に遺体を放置していました。そして、猛禽類にやってこさせます。文化大革命以後、焼くようになりました。

——あなたの故郷の草や水について話していただけますか？

むかしはわたしのふるさととはどれほど草や水が豊かであつたかを思い出します。ホルス(葦)、ソハイ(タマリスク)、トーライ(胡楊)、ジグド(トネリコ)、ハル・ヘレス(黒ヘレス)とツアガン・ヘレス(白ヘレス)、ウスト・ナプチ、ホビスハン(ウスト・ナプチに似ている)、ヒヤグ(ハグ)、シヘル・ボヤー(甘草)、ホロン・ボヤー、シヤル・ポダルガナ(アカザ類)などのさまざまな植物がありました。また、ハラルタ、フジ・ウブス(黄色い花が咲く)、ウムヒー・ウブス(ヒツジ、ヤギが食べる)、ホンホ・ウブス(家畜が食べると有毒)など、良し悪しのある草がたくさんありました。

シヤル・ポダルガナの実を砕いてザンバーにして食べます。チョルフルと言う植物があります。この実でもまたザンバーを作ります。ハムホグには、ウルグスト・ハムホグ(とげのあるハムホグ)とオスン・ハムホグ(水のハムホグ)の二種類があります。当時は、裸麦などの供給が少なかったので、野生の実を集めて炒つてザンバーにしています。また、「シヤンシール粉」と言つて、舌にへばりつく粉をとって食べていました。バターオイルやウルム(クリーム的一种)やシユールメグ(チーズの一種)で味をつけて食べていました。

——文章をよく知っておられるようですが、いつどこで文字を学ばれたのですか？

わたしが小さいころ、上から人がやって来て、「子どもを学校で学ばせる」と言うキャンペーンがありました。一度、ジョーナイはわたしを蘭州の西北民族学校に入れようとして、当時の旗の中心地であつたサイハントーライまで来ましたが、どうしたものか知りませんが、行かないことになり、戻つて来ました。そして、わたしは学校へ行くことができませんでした。

当時は地方の共同の学校というのがあつて、そこをときどき訪れては「あ、い」などと言っていました。なんとか自分で努力して学んで、自分の名前がちゃんと書けるぐらいです。文字を知っているなんて言つても、少し目が開いているという程度です。

二〇〇四年八月二十五日午前、移民村(エジネー旗の中心地郊外)に赴き、マーモーハイさん宅で聞き取りをおこなつた。

デムジドさんは子年生まれ、六十八歳。一九三六年生まれ。両親ともにハルハの出身である。父はスフドルジと言ひ、一九〇七年の未年生まれ。母はサンダグと言ひ、一九二三年の丑年生まれ。母はモンゴルのバヤンホンゴル・アイマグのジョノンワン旗で生まれ育ち、一九三〇年、十七歳のとき、エジネーにやつて来て、のちに所帯をもった。夫となったスフドルジは同じくハルハのタイワン旗の人である。きょうだい五人のうち一人の兄が僧侶であり、迫害されると聞いて、逃げることになった。両親は心配して、きょうだいのうちの誰かを連れて行けと言ひ、弟のスフドルジが行くことになった。それで、スフドルジはすでもうけていた四人の子どもと妻と、両親ときょうだいたちと別れて、僧侶である兄とともにエジネーにやつて来たと言ひ。兄はここエジネーでも僧侶になり、後に亡くなった。弟のスフドルジがエジネーでサンダグと結婚し、この土地の人間となったのである。

——あなたの子どものころの話聞かせていただけますでしょうか？

わたしたちは二人姉妹でした。わたしの姉は二十一歳で、一九五五年に亡くなりました。わが家は裕福ではありませんでした。貧乏と言つてよいでしょう。三十〜四十頭のヒツジ、ヤギと、二頭のウマがあり、ウシはいませんでした。ラクダもいませんでしたので、移動するときには人から借りていました。近距離なら、荷を背負つて移動してました。

わたしの本当の両親は、わたしが幼いころに離婚して、母は別の人と暮らしはじめました。継父は良い人でした。名前はダンザンサンボーと言ひます。実の父も別の人と暮らすようになりました。文化大革命のときに、トルゴード黨員だの、内蒙古人民革命党員だのとレッテルを貼られて、殴られ批判され、監禁されていたところ、身体を悪くして死にかかつていたので、病院に連れて行くということで監禁場所から出されましたが、立つこともできないまま、ロバに乗せて移動する道中、亡くなったと聞きました。

なぜ移動中に亡くなったかと言つると、長いあいだ暗い牢屋に監禁されて日も見えず風にもあたらなかつたのに、突然屋外に出されて吐いて死んだのです。わたしたちは渦中にまったく会うことができませんでした。あとで骨を拾うこともできませんでした。

両親は離婚しましたが、わたしは父に会いに行つていたのでした。一九六六年に挨拶に行つたのが最後となりました。牢屋に監禁されて、一九六九年に亡くなりました。

——何歳のときに結婚なされたのですか？

わたしは二十歳のとき結婚しました。夫の名前はナムハイジャブです。一九五六年にわたしたちは結婚しました。ナムハイジャブは幼いころに両親を亡くしており、姉のもとで姉の一人娘であるツェベルマーと一緒に暮らしてました。わたしたちは幼なじみでした。

長女のユムチンジャブはわたしが十九歳のときに産みました。両親のもとで産みました。まだ結婚式をすませぬうちに、一九五五年に生まれた子どもです。結婚するとき、わたしの両親はわたしたちに小さなゲルを建ててくれましたが、これには住まずに子ヒツジや子ヤギ、荷物などを入れて、ナムハイジャブの家に住み込みました。のちに、夫の姪のツェベルマーに家を譲り、わたしたちはわたしの両親がくれた小さなゲルに住みました。

ナムハイジャブは姉一人と弟たちの四人きょうだいでした。彼の父はチョイジンジャブと言ひ、敬してチョイジルと呼ばれていました。早くに亡くなって、長兄ダルジャは、恰幅が良く、元気でしたのに、癌で亡くなりました。二番目の兄のツェベグミドは徳王の軍隊から逃れているあいだに亡くなりました。姉のコローは「デージェーブル（飼育）」と呼ばれていました。おそらく子どものころの甘やかされた呼び名だったのでしよう。この姉の娘がツェベルマーです。アラシャーからやつて来た若者バルダンと一緒にになりました。それで、この二人に十

ムハイジャブは家を譲り、わずかしかなかった家畜の大半を譲りました。

わたしたちは両親がくれた小さなゲルに住み、家畜を分けました。わたしは父から四十頭のヒツジ、ヤギをもらっていましたが、これらを彼らに分けて所帯をもたせました。しかし、結婚式はせず、若者バルダンを家に住ませ、わたしたちが放牧などを手伝いました。

そして共有化することになったとき、わたしたちの家畜は、ヒツジ、ヤギが百頭あまり、ラクダが十頭ほどになっていました。一九五八年に合作社になり、その冬に人民公社になりました。一九五九年から、人民公社でラクダを放牧するようになり、当初は百頭だったラクダをうまく育てて数年で三百頭にしました。

一九八七年に馬鬃郷に行きましたが、翌年にラクダを返却しました。私有家畜は百頭ほどで、わたしたちはここで放牧しています。息子のシジルは他人を雇って馬鬃郷でラクダを放牧していました。私有化した家畜はいまでは六百頭になっています。

—あなたはどこの合作社（ホルシャーシル）でしたか？

わたしたちは、現在のサイハントーライ・ソムのザインツァガン・ガツアーの所属でした。当時、わたしたちの合作社は「開花ホルシャーシル」と命名していました。人民公社になって「開花ネグデル」になりました。そこでは一晩にして開花すると言われていたので、そのような名前になったそうです。

文化大革命中に、この名前が問題になりました。人民公社の時代になると、すべての家畜に、開花の頭文字「ツエ」の焼印を押しました。ダムジャー・ダルハン（ダルハンは名工の意）と呼ばれる名工に依頼して、大小二種類の焼印を作らせ、すべての家庭で作業して、すべての家畜にこの焼印を押したのです。ヒツジとヤギにはその角に小さな焼印を押し、ラクダやウマなどの大型家畜にはその腿に大きな焼印を押ししました。

文化大革命時代に、この花は何の花かと問題になり、赤い花か黒い花か、と詰問されて、結局、名称が変更されました。

—両親がくれた小さなゲルというのはどのようなものでしたか？

四枚のハナの小さなゲルです。しかし、シヨバダやハドホールのことを思えばそれほど小さくはありませんでした。

エジネーにはいろいろなゲルがあったものです。五枚壁、六枚壁のゲルがありました。ツエージン・ゲル（胸のゲル）と言うのは、天窓があり、格子壁がなく、オニ（屋根棒）を使ったものです。ツエージン・ゲルをまたハドホールとも呼んでいました。シヨバダ・ゲル（尖がったゲル）と言うのは、天窓がなく、三枚壁の小さなゲルです。シヨバダ・ゲルは天窓がありませんけれども、家によつては小さな天窓を作る場合もありました。胡楊の木を丸くたわめて穴をあけて天窓のようにしていたのです。家によつては古い洗面器のまわりに穴をあけて代用していました。

一般にトルゴードではゲルを縦長に建てます。しかし、ハルハではゲルを平たく建てます。ハルハの天窓は「八角形」とか「ホルロー」と呼ばれ、タマリスクの木を用います。胡楊でいろいろな家具や道具を作ります。蒸留酒を作るときの樽、搾乳桶、乳を発酵させる桶、チーズを作るときの重石や型、ゆりかごなどです。井戸から水を汲んで家畜に水をやる桶も胡楊で作ります。

—お子さんは何人ですか？ 病院で産みましたか、草原で産みましたか？

わたしには七人の子供がいます。一番目はユムチンジャブ、二番目はガルサンポンツォ

ク、三番目はゲレル、四番目はナラントヤー、五番目はシジル、六番目はバトランゴイ、七番目はサラントヤーです。家督を継いでいるのはシジルです。ウムチンジャブを産むときは家に医者呼んでももらいました。漢族の医者でした。

ナラントヤーを産むとき、病院で診てもらおうと

「逆子だから病院で産め。十日ほどで生まれる」

と言われたので、急いで自宅に戻り、用意をして再びラクダに乗って来て入院しました。本当に一晩中痛み、苦しみ、夜が明け、朝日が射してようやく生まれました。そして産婆さんが

「朝日が射すとともに生まれた子だからナラントヤー（陽光）と名付けよう」

と言って、そう名付けました。バトランゴイが生まれるときは、あらかじめ病院の近くに移動して来ておいて、病院で産みました。ほかの子はみな草原で家の中で、人を呼びにやって産みました。たいていわたしの継父が立ち会ってくれました。出産ではそれほど辛い目にはあいませんでした。

——あなたがたは文化大革命中、どのような状態でしたか？

わたしたちは殴られて地獄を見ました。夫のナムハイジャブは解放後ずっと合作社の長や、生産隊長などを歴任してきました。一九六四年に運動が起こり、かつての長はすべて解雇されました。そうこうしているうちに文化大革命が到来し、さまざまなレッテルを貼られました。ナムハイジャブは「走資派」と言うレッテルを貼られ、一九六七年に捕えられて、殴られ、反抗して黒い家（牢獄）に監禁されました。

当時、わたしはシジルを産んだばかりで乳飲み子を抱えていました。夫は二年間つかまつたままでした。わたしたちは会うこともできませんでした。二人の子どもたちは自分たちで会いに行くを入れてもらって自由に会えました。子どもはかまわないと言うことでした。しかし、わたしは挨拶に行っても監視つきで、ことばを交わすなど怒鳴られていたので、ろくに話もできませんでした。

夫は一九六九年に牢獄で病気になる、起きあがれなくなったので家へ戻りました。なんとか治つてからは、ふたたび半分の罪を着せられていて、生産隊に連れて行かれて労働させられました。一九七三年によく本当に罪を着せられなくなって自宅に戻ることができました。当時、殴った人びとのことは忘れません。わたしの実父も捕まって牢獄に監禁されて亡くなりました。わたしの母と継父はなんとか捕まらずにすみました。捕まりそうになったときに政策が転換したのです。

一度、批判闘争集会で母と出会いました。集会のあと、継父が一頭のラクダの肉をすべて炒めて、骨を切つて準備しているの、

「何をしているのですかと聞くと、

「今からわたしたちは牢獄に監禁されるかもしれないので、おまえの子どもたちのために食糧を準備しているのだ」

と言いました。息子のシジルが生まれて一週間ぐらいのころに夫が連れて行かれたので、まだこれからも捕まえに来るかもしれないと思って、彼らは準備をしていたのです。

当時はこうして疑念を抱きつつ暮らさなければならなかっただけでなく、本当に生活が苦しかったのです。わたしは罪人の妻でしたので、どんな仕事しても五点の給料しかもらえません。月に九元でしたので、とても親子四人は暮らすことができませんでした。そのために両親に頼って子どもを育てました。

一九七三年にナムハイジャブも帰宅して、ラクダを放牧するようになると、彼に十点、わ

たしに八点がつくようになりました。両親には黒いヒツジ（カラクルヒツジ）があてがわれ、放牧しました。こうして徐々に生活が成り立つようになり、負債もなくなりました。

当時は、病気や借金に苦しむほかに、いついかなるときにどんな罪をなすりつけられるかわからないという不安な気持ちで暮らしていました。それはとても人間を脅かし、身体に毒でしょう。

サンズチヨイダンと言う人がいました。恐怖で自殺したそうです。大勢の人びととともに批判闘争集会に出席したあと、散会しても会場に残り、タバコを吸って、何かを考えながら座っていたそうです。その夜、彼は小さなハドホール（ツエージン・ゲル）の前で首をくくって死んでいたのを、翌朝、人びとが見つけました。当時、彼は五十歳ぐらいだったろうと思います。彼の遺体は馬車で運ばれ、サンブレグの北にある胡楊林のなかで焼かれたそうです。彼の姉の息子がいまアラシャー右旗のバンディダ活仏です。この活仏のちにエジネーにやって来て、彼の遺体を焼いたところを祭りました。

悪い時代は過ぎ去り、良い時代が来ました。しかし、「年齢はわが身に降り積もり、雪は山に降り積もる」ものです。

母も父も夫も、逝ってしまいました。継父は一九八二年に癌で亡くなり、母は一九九〇年に七十七歳で亡くなりました。夫は一九九六年に六十六歳で亡くなりました。

わたしは二〇〇三年七月にこの移民村にやって来ました。ここで末の娘サラントヤーと住んでいます。娘はもう年端もいつているのに、まだ結婚していません。

——あなたはモンゴル国を訪問しに行きました？親戚とお会いになりましたか？

きょうだい親戚と会いました。モンゴル国に行きました。父の故郷であるダイチンワン旗に行きました。しかし、母の故郷であるジョノンワン旗には行けませんでした。

二〇〇四年八月二十六日午前、移民村にあるデムジドさん宅にて聞き取りをおこなった。

ドルマンツォーさん、酉年生まれ、八十三歳。中国内蒙古自治区アラシャー盟エジネー旗の人となつて久しいが、一九二一年に現在のモンゴル国で生まれた。ハルハのバルダンザサグ旗ノヨンボグド・ソムにあるオボーティンホルル寺に属するロボン・バルドブと言う人の十人の子どもの一人として生まれた。しかし、母親の妹のジグデル叔母になじみ、離れられなかったため、叔母の養女になつた。

父親のロボン・バルドブは僧侶だつたため、ハルハで僧侶を肅清すると言う噂を聞いてすぐ、南へ逃れてエジネーにやつて来た。母親はルハムジャブと言う人だつた。母親は一人娘で、きょうだい十八人のなかで唯一の娘だつたので、たいへんわがままに育つたと言われている。モンゴルにいたときは「ゴンチヨグジャブさんの子どもたちはヒツジやヤギよりも多くなるんじゃないか」などと言われていた。それほどきょうだいが多かったので、夕食には鍋いっぱい骨付きの肉を煮ても一人に肋骨が一本当たるくらいだつたと、母は話していたそう。

ドルマンツォーさんが四歳のとき、叔母のジグデルとその夫のソノムダルマと言う人の家に養子になつた。したがって、ドルマンツォーさんの言う「わたしの父母」「わたしの家」とはこの養父母の家を指す。ドルマンツォーさんは生みの母からはきょうだい十二人生まれたと言つたが、ロブサンジャムス、オヒン、ハンドマーム、ソノムツエレン、ドルマンツォー（自分自身）、ダリ（妹）、マグサルなど七人の名前しか思い出せなかつた。

実の両親ときょうだいはエジネーにいたが、一九四〇年代初期、シリングゴル盟のスニトに移住した。その後、一九四五年の解放戦争の際にモンゴル軍に捕まり、モンゴル人民共和国（当時）に戻つたと言つた。実のきょうだいのなかでは妹のダリさん一人がエジネーに残り、二人はいまだエジネーにいる。

——最初にモンゴル国からやつて来たときの状況を話していただけですか？

わたしははっきり覚えていません。しかし、老人たちが話していたことから少しわかるようになりまし。

一九三〇年にモンゴル国のノヨンボグドからこつちに出て来て、砂丘を渡つてツェヘと言う村に入つて来たそうです。わたしは当時九歳で、荷積みのラクダに乗つて来たとき、エジネーの葦は頭に届くほどの高さでした。わたしの家族は、両親（養父母のこと）と二人の兄（ソロンケルとバダラ。彼らは養父ソノムダルマの実子で、この家には娘がいなかつた）とわたしの五人で、ゲル一軒と六十〜七十頭の家畜をもつて、数頭のラクダに荷物を乗せて出発したのですが、道中、ハルハの軍隊が後ろから追跡して来たので怖くて家畜やゲルなどすべての持ち物を置いて逃げて来たそうです。

一頭のラクダには大事な荷物を乗せてしばらく進んでいましたが、母はやむなくその荷物を降ろしてそのラクダに乗ると、兄のバダラはその降ろされた荷物を拾つて背負つて逃げて来たそうです。

兄のバダラはたいへん有能な人でした。その後も商売のためにエジネーからハルハに何度も行つて、家畜と品物を交換する商売をやつていましたが、一九三九年にハルハに行つてから戻つて来ませんでした。国境外に逃亡した者がたびたび往来しているということでハルハの軍に捕まつたそうです。彼はその後もずっとハルハにいて、ノヨン・ソムで学校の教師をしていました。一九九〇年に亡くなりました。

兄のバダラは辰年で、一九一六年生まれでした。バダラは下の兄で、上の兄の名前はソロンケルと言います。彼は僧侶でした。寺にいて、寺の経理係をしていました。その後は寺の家畜の世話をしていました。わたしたちが砂丘を渡つてマンハンツェヘと言うところに行つて来ると、ハルハ軍はわたしたちを追わなくなり、戻つて行つたそうです。国境を渡つてしまつた

ので追えなくなったわけです。

マンハンツエへに着いてから、兄のバダラが北の方へ戻って、捨てて来たゲルとその他の物を取って来ました。その後、兄のバダラはたびたびモンゴルに行って家畜や生活用品などを持ってくるようにしていました。彼は少しばかりの商売もしていました。それで、人びとが「国境を出ていった者がたびたび入って来ている」と告げ口をしたためにハルハ軍に捕まりました。父のソノムダルマも有能な人でした。自分の数少ない家畜を育てながら、出かけてはちよつとした商売をしていました。最初はモンゴルへ一回か二回ほど行って来ましたが、兄のバダラが捕まっただけからは北のモンゴルの方には行かなくなつて、中国人とちよつとした商売をして、往來して食料を運んで来ては羊毛などを売って生計を立てていました。

わたしは母と放牧をしていました。父は寺の経理係をしたことがあります。知恵のある偉い人でしたので、往來して生活や家畜を調整して、自分の力と努力で家畜を増やし、のちに千頭の家畜を所有するようになりました。五畜は全部そろっていました。

その後、一九五八年に合作社ができたとき、父のソノムダルマはエジネー旗の六人の富豪の一人として家畜を提供し、国营牧場のメンバーとされました。

わたしたちが小さかったときは、わが家はまだたいへん貧乏でした。わたしは小さいころヤギの毛皮でつくったズボンをはいてよく虱にかまれていました。小さい子どもだったので、皮ズボンの縫い目が内腿に当たって痛くなると、ズボンを太腿まで下げて、足をゆるく縛られたような形で歩くこともありました。

また、食料が乏しかったので、毎朝、兄のバダラが眼覚めるとすぐ起き上がって仏像の前に供えてある肉を取って食べているのを見て、明日から自分も早く起きてその肉を食べたいと思っていました。

——なぜハルハからこちらに移つて来たのですか？

ハルハに人民革命が発生して宗教を弾圧し、僧侶たちを虐殺しはじめたので逃走を決心しました。わたしの実の父はロボン・バルドブと言う名前で、僧侶でした。わたしの実の母であるルハムジャブとわたしの養母のジグデルは姉妹だったので関連付けられるのではないかと思つて一緒に逃げたのでしょうか。わたしの上の兄のソロンゲレルも僧侶になったことがあります。幼いときに小僧にしたそうです。

——ドルマンツォーさんはいつ結婚されてお子さんは何人でしたか？ そういうことについて話していただけますか？

いつ何年に結婚したのか覚えていません。当時は結婚式をあげたわけでもなく、ただ一緒に生活しはじめただけですから。夫の名前はゴンチヨグダシです。（聞き取りにはこのゴンチヨグダシ老人が同席して、ドルマンツォーさんが語るのを助けた。ドルマンツォーさんは耳も目も良いが、記憶力がやや衰えているようで、思い出せなくなっていることもある様子で、一方、夫のゴンチヨグダシさんは耳が遠いものの、物覚えは良い。そこで、ゴンチヨグダシさんが一部、補足しながらの聞き取りとなった。）

ゴンチヨグダシは甲申、一九二〇年生まれの人八十四歳です。元來はハルハ人ですが、母親のお腹のなかにいたとき、ハルハからこつちに出て来てエジネー川のほとりに生まれたそうです。その後、何度も親戚に会いにハルハへ行っています。あるとき親戚に会つて戻つて来る道中、ドルマンツォーの家族がここへ移動していたのと出会い、一緒に移動しました。約一ヶ月同行したので知り合ったわけです。

そのときは幼かったのだから一緒に遊んでいたのですが、その後は結婚してともに生活をしようになりました。それで一九四四年に妊娠しました。

お腹に赤ん坊がいるとき、二人でラクダに乗ってロボンチムボ寺（アゴイン・スムとも呼ばれる）に拝観に行きましたが、道中、ある家の屋根から一包みの草が飛んで来たので乗っていたラクダがそれに驚いて走り出したものですから危うくラクダから落ちるところでした。それでわたしも怖かったせいか、お腹の赤ん坊の具合が妙に感じられ、お腹が痛くなりました。

寺から戻って来て陣痛がはじまり、いよいよ出産するとなったとき、姑が助産婦を呼んで来て胎児の具合をみてもらい、調節してもらおうとしましたが、わたしは恥ずかしくて助産婦に見せませんでした。それで調節できませんでした。

お腹には双子がいたのです。その一人がお腹のなかで死んでいたもので、死んだ子が生まれました。もう一人はせっかく生きて生まれたのですが、すぐに亡くなりました。自分が愚かだったせいで助産婦に調節してもらわなかったために最初の大事な子どもをそのように亡くしたわけです。

その後、およそ七、八年妊娠しませんでした。一九五二年にある一家が、自分の家では子どもが育たないので引き取って育てて欲しいと頼んできたので、生まれたばかりの男の子を養子にしました。

この息子はバンタンを飲んで育ったので、最初はバンタンフー（バンタン息子）と呼んでいました。その後、一度重い病気にかかって僧侶にみてもらったところ、名前をジョン・バンザラグチーン・ポースルンフーと換えてくれました。それで病気がなおって、家ではバンザラグチと呼ぶようになりました。

しかし、そのあと、文化大革命のとき、その名前は古臭い仏の名前だと批判されて、ホビスハルト（革命家の意）と言う新しい名前を与えました。

この息子を養子にしてから五年目の一九五六年、一人の娘が生まれました。ツェベグジャブと名付けました。こういうわけでわたしたちは息子のホビスハルトをたいへんありがたく思うようになって、ボルガン・スールテイ・フー（クロテンのしっぽをもつ息子）と呼んでもとて大切にしています。と言うのは、他人の子どもを養子にしてから自分の子どもが生まれれば、その養子が連れて来てくれたという意味で、養子のことをボルガン・スールテイ・フーと呼んで感謝するわけです。

一九五八年にもう一人の息子が生まれましたが、妹のダリの養子にしました。それには理由があります。最初の双子を亡くしたあと僧侶に占いをしてもらったとき、「これから娘が生まれれば家に残して、息子が生まれれば他人の養子にしなさい」と言いつけられたからです。そういうわけで僧侶がおっしゃったことを忘れずに息子を他人の養子にしたのです。

しかし、一九六〇年にもう一人の息子が生まれたとき、今度は他人の養子にしませんでした。大丈夫だろうと思って自分のもとに残したのですが、不幸なことに、この息子は一九七七年、十七歳のとき病気で死にました。その僧侶がおっしゃったことを聞かなかったせいで禍を蒙ったのだと思い、息子を他人の養子にしなかったことが残念に思われ、とても後悔しています。いずれにせよ、わたしたちは仏教をたいへん信じて、大いに信仰しています。

母は五台山にお祈りに行った話をいつもしていました。母が五台山に行ったとき、手綱もつけないロバの腰に荷物を乗せて追って行きましたが、荷物はまったく傾いたりもせず五台山に着いたそうです。とにかく仏様にお祈りに行っているわけですから、仏様が見てください。荷物がロバの背中から落ちないわけはないだろう、と母はいつも話していました。ほんとうにそうだったでしょうね。

わたしも両親と一緒に五台山にお祈りに行ったことがあります。五台山に初めて行ったとき、生まれて初めて自動車に乗ってみました。自動車に乗るときは一人十七元の銀貨を払って乗りました。長い椅子を置いたトラックに乗って揺れられながら行きましたが、たいへん不思議に思っていました。

その後、わたしたちは家族でラクダに乗って青海省の塔爾寺におまいりに行きました。道はたいそう悪くて、とても険しく、岩に沿って山を登っていくときは滑り落ちそうになります。一度などは、連れていったラクダが山の狭い道を通ったとき、ラクダの肋骨あたりの皮が削られてしまうといったこともありました。今は舗装道路ができてとてもよくなりました。一九七七年に十七歳の息子を亡くしたあと祈りを捧げるために青海省の塔爾寺に行きました。

——文化大革命のとき、信仰心をもって仏様を拜むことはできたでしょうか？

いいえ。そんなことができるはずありません。一九六六年に「六類分子」と言うレッテルを貼られて殴られはじめました。「反革命者」「ハルハのスパイ」「牧主・富牧」「トルゴード党员」「内人党员(内蒙古人民革命党党员)」などと言う六つのレッテルを貼られて、「六類分子」になったわけです。

わたしは「富牧」として殴られました。一九六七年にわたしが見せしめで批判されていたのを娘のツェベグジャブが見ていたと今でも話します。権利が剥奪され、人に会って話をすることも許されませんでした。昼間は放牧をして、夜になると、人びとの前で批判されて、「罪」を供述しなければなりません。

最初は、約一ヶ月間、毎晩、批判されました。その後はそれほど批判されませんでした。時おり批判されて、報告書を書かなければなりませんでした。思想改造をしている状況について報告するわけです。

こうして、十年あまりは政治的権利がなく、「罪人」のレッテルを貼られていました。一九七六年ごろ、ようやく普通の人に戻ることができました。

両親はもっとひどく批判されました。殴られました。「牧主」とされて、たいへん苦しめられました。わたしは批判され、殴られましたが、それほどひどくありませんでした。

のちに名誉回復されて、慰謝料をもらいました。合作社に入ったときに提供した家畜の利息を一九八三年までに返済してくれました。少しずつ返済してくれたのですが、たぶん二千元はくれたでしょう。

一九八三年に家畜を私有化するとき、一人あたりヒツジ、ヤギを五十頭配分すると聞いていましたが、わたしたちはそれを世話する力が足りないと思って、一人につき三十頭、合計六十頭を受け取りました。それに二十六頭のラクダを分けてもらいました。これらの家畜の代金は分割払いで二十年返済だそうです。毎年百四十四元払っていましたが、二〇〇三年に返済が終わったはずですが。

わたしたちは一九九八年まで放牧地で放牧しました。そのあとは家畜を他人(ゴンチョグダシの養子の養子)に頼んで世話してもらって、わたしたち自身は旗の中心地に来て、婿と娘の近所に住んでいます。それから、二〇〇三年一月十四日にフフホト市に来て生活するようになります。

故郷はエジネー旗ソブノール・ソムのツェヘ・ガツァーです。今はツェヘ・ガツァーが貿易の拠点として開かれています。モンゴル国と貿易をしている場所です。

——あなたの家はどの階級に決められたのですか？

最初、階級を定めたときは「富牧」に決まったのですが、不平を申し入れたために再度調

査した結果「中牧」に決まりました。父親のソノムダルマの家は「牧主」に決まったのです。当時の階級の分け方は、一番上が「牧主」で、次いで「富牧」「上中牧」「中牧」「下中牧」「貧牧」といった順でした。

二〇〇四年一月十日、フフホト市蒙古吉利小区にあるツエベグジャブ（ドルマンツォーの娘）とその夫ナスンデルゲルさん宅で聞き取りをおこなった。二〇〇五年十一月三日永眠。合掌。

ドルガルジャブさんは子年生まれの六十八歳。一九三六年旧曆七月、中国内蒙古自治区アラシャ―盟エジネー旗のワートーライ（現在のバヤントーライ農場―ジャルガラント・ソムのウスルングイ・ガツアー内）に生まれた。

――あなたの小さいときの話を話してくださいますか？

わたしの父親は内モンゴルのトゥメドの人でした。名前はジャミヤンと言います。みながつウメドのジャミヤンと呼んでいました。父は小さいころ現在のシレート廟の小僧だったそうです。十九歳のときにトゥメド・ラルゲン（ラルゲンはチベット語で老人の意）と言う老人がエジネーに行くとき、一緒について来たそうです。父は故郷で十人きょうだいでしたが、家がとても貧しく、衣食に苦労していたようです。

父はエジネーに来てから一度も故郷に戻りませんでした。きょうだいや親戚に会いに行ったことは一度もありませんでした。子どもであるわたしたちに自分の実家のことや両親、きょうだいのことについて話して聞かせたことは何もありません。もちろん、紹介したり、会わせたりしたこともありません。

わたしは結婚したあと、夫と一緒に父を連れてトゥメドの故郷に行つて、父をきょうだいに合わせるのと同時に、わたしたちも親戚と知り合おうと父に申し出たのですが、父はまったく承知しませんでした。

「お前たちはそんなにトゥメドが好きなのか」

と怒つて、行こうともしませんでした。思うに、父はきょうだいが多くて、しかもたいへん貧しい家だったので、もし親戚を紹介すれば彼らが次々とこつちへやって来て生活の援助を求め、家族に迷惑をかけるのではないかと思つていたのでしよう。

その後、文化大革命のあいだオラーンフー（烏蘭夫）が糾弾されてトゥメドの人たちが大勢抑圧されていたとき、夫は

「お父さんは偉い人でしたね。あのとき、もしわたしたちがお父さんについてトゥメドに行ったりしていたら、あるいは親戚と知り合ったなら、いまごろオラーンフーと関連付けられて苦労をしているかもしれませんよ」

と言っていました。わたしはそうは思いません。オラーンフーのちに糾弾されることなど父がどうしてわかるのですか。いずれにせよ、わたしたちはトゥメドの親戚と知り合わなかったのでオラーンフーとの関連で苦労をせずにすみました。

父は一九〇八年、申年生まれです。一九二九年に十九歳のときにエジネーにやって来て、最初はトソン官吏と言う名の人の家で召使になつて、三、四年ほどラクダの放牧をしていましたが、その後、トソン官吏の家を出て、わたしの上の世代にあたるジャムバチョインピルと言う人の家で召使になりました。

ジャムバチョインピルと言う人はわたしの母親の母方の叔父（わたしの祖母の弟）だそうです。母は二人の弟と一緒にその叔父の家で育つたそうです。わたしの母方の祖父は子どもを三人残して早く亡くなつていました。祖母は幼い三人の子どもを連れて貧乏だったので、弟のジャムバチョインピルを頼つて生活していました。母が十四歳で、母の上の弟が八歳、下の弟が一歳のときに亡くなりました。それで三人の子どもは孤児となり、叔父のジャムバチョインピルが養子にして育てたそうです。

ジャムバチョインピルはたいへん裕福でした。家畜が多かつたわけです。彼は僧侶でしたので結婚していませんでした。姉の三人の子どもを養子にして財産を相続させたそうです。当時、父はジャムバチョインピルの家で召使としてウマとラクダの放牧をしていました。それで、母はこのトゥメド出身の召使と結婚して、当時は

「裕福なお嬢さんがその召使と結婚した」と噂されていたそうです。

わたしの両親は、結婚してからもジャムバチョインピルの家で弟たちと一緒に住んでいました。その後、母の上の弟が結婚してから、二世帯に別れたそうです。父と母は一軒のゲルを建てて独立し、ジャムバチョインピルのウマとラクダの世話をしたそうです。

母の下の弟は僧侶になって、ジャムバチョインピル叔父のあとを継ぎ、ダシチョイロン寺（俗称、東廟。乾隆十六年、一七五一年創建。十七世ダライラマが自らこの寺に戒律を頒賜したため、内モンゴルの民衆の篤い崇信を集めた。現在、ダライフブ鎮西郊に再建されている）にいてそこで亡くなったそうです。ジャムバチョインピル叔父の家畜と財産を相続したのは母の上の弟のヌデンデルゲルでした。

わたしの両親はウマとラクダの世話をしていましたが、一九四〇年にわたしが四歳のときにそれを弟に返して、自分の家畜だけをもって正式に独立しました。独立したときにジャムバチョインピル叔父が母に、子ラクダ連れの雌ラクダ一頭、数頭のウマ、数頭のウシ、数頭のヒツジを財産として分け与えてくれました。わたしにもラクダ一頭を財産としてくれたそうです。そのときわたしは四歳でした。

それに、父が最初にトソン官吏のラクダの世話をしていたときに報酬として年に二歳のラクダを一頭ずつもらっていたのをジャムバチョインピルの家に連れて来て育てていたので、それらが六く七頭のラクダになっており、全部合わせて十数頭のラクダになっていました。

母の弟ヌデンデルゲルは叔父のあとを継ぎ、すべての家畜や財産を受け取ったので、のちにエジネー旗で有名な富豪になりました。エジネー旗の六人の富豪の一人として国营牧場のメンバーになったのです。

わたしの母はジューゲン（居根）と言います。巳年で、一九〇五年に生まれました。父より三つ年上だそうです。母は生粋のエジネー・トルゴード人です。母はわたしたちきょうだい十人を産んだそうですが、男の子九人と女の子一人で、男の子たちは全部死んで一人娘のわたくしだけが生き残ったと言います。わたしの八人の兄が全部死んで一人の弟も死んだそうです。

長男がドウンドウブツェレンと言う名前で、七歳で亡くなったのを除けば、ほかの八人の息子は全部生まれてすぐ亡くなったそうです。それでこの家には男の子が生きられないと言われていました。なぜそうだったのかといえば、こんな物語のようなことが言われています。

その当時、エジネー旗に居座ったシャル・ゲレンと呼ばれていた僧侶がいました。その僧侶はジャムバチョインピルに

「一日だけ乗って返すから」

と言ってウマを一頭借りていったのですが、彼はそのウマを一ヶ月も乗りまわし、ウマの背を傷だらけにし、瘦せこけたウマにして返したそうです。一日乗ると言って一ヶ月乗ったことと、肉付きのよいりっぱなウマを乾いた木のような瘦せこけたウマにしたことについてジャムバチョインピル叔父はたいへん怒って、そのシャル・ゲレンを罵倒して追い出したそうです。

シャル・ゲレンはウマを返しに来たときはロバに乗ってそのウマを曳いて来ました。母はこれを出迎えてそのロバを駒繋ぎの杭に繋いでおきました。シャル・ゲレンが追い出されて帰るときも、母は駒繋ぎの杭からロバの手綱を解いてあげたのですが、シャル・ゲレンはロバを曳いて向うへ歩いて行き、地面から土を一握りつかんでこちらのゲルに向かって撒いていったそうです。

その晩、ウマに乗って走っていた七歳の息子（十人の子どもの長男）が突然、落馬して亡くなったそうです。それから男の子が生き残らなくなりました。九人の息子が九人とも亡くなったといえます。それで、その僧侶が呪いをかけ、土をつかんで

「家のあとを継ぎ、家畜と財産を相続する息子がいないように」とつぶやいたと言われています。ほんとうにそう呪いをつぶやいたのか、それともそう予言したのかわかりませんが、とにかくそんなことがあったそうです。

母の上の弟のヌデンデルゲルは、叔父のジャムバチョインピルを怒るとき、いつも

「ジャムバチョインピルのけちが鬣と尾をけちったせいで姉の子どもたちが全部死んだ」と怒鳴っていたそうです。本当にシャル・ゲレンの呪いによって子どもが生き残れなくなったと母は話していました。

わたしの両親は叔父の家畜を弟のヌデンデルゲルに返却したあと、バヤン・ジュンナイと言う裕福な僧侶のウシとヒツジの世話をしていたそうです。その後、自分の家畜もよく増えて、かなりたくさん家畜をもつようになりました。人を搾取したことがなく、自分の勤勉な両手で家畜の世話をし、多くの家畜をもつようになったそうです。しかし、その後、階級を定められたとき最初は「牧主」に決まりました。

わたしには一人の養子の妹がいます。名前はダリマーです。わたしより六歳年下です。ダリマーは、ほんとうはエー・ボルヤソムたちの一番下の妹でしたが、わたしの家が養子になりました。

——ご自分のことについても話していただけますか？いつ結婚されたのですか？お子さんが何人とかご主人のお名前などといったことを聞かせていただけますか。

わたしは幸いにも生き残った一人娘でした。夫はナンジドと言う名前でしたが、幹部（国家公務員）でした。幼なじみの紹介でナンジドと結婚しました。紹介してくれた友人の名前はオーライと言います。ナンジドはその同級生です。彼らはともに蘭州市にある西北民族学校で勉強していました。

当初、わたしの上の叔父のヌデンデルゲルはオーライに「わたしの大事な一人姪にあなたの良い同級生を紹介してくれ」と頼んでいました。「十人の甥と姪のなかから生き残ったただ一人の姪」として、叔父はわたしをとて大事にしていました。

ある年、蘭州にいたオーライから手紙が届いて、わたしにナンジドを紹介してくれました。しかし、わたしは見知らぬ人についてどう答えてよいものかわからなかったため、返事も書きませんでした。その後、学校の休みだったのか、オーライはナンジドを家に連れて来ました。わたしたちはお互いに気に入ったので、結婚してもいいと決めたのです。

ナンジドは生粋のトルゴード人です。一九五二年に蘭州の学校を卒業して戻って来て学校の教師をしていましたが、のちに、公安局に転勤しました。その後、銀川市で公安について専門に勉強してきました。一九五四年の夏、裕福な人たちが大勢、フルンブイルに見学に行ったとき、ナンジドも同行しましたが、その年の冬十二月わたしたちは結婚しました。

夫の実家は川上にありましたが、わたしの家は川下のサイハントーライの紅星ガツアアでした。わたしたちは結婚して、自分たちのゲルを建て、両方の実家から財産として家畜を分けてもらって独立しました。夫の実家は二百頭あまりのヒツジとヤギ、十頭あまりのウシ、一つの小さな群れのウマ、二十数頭のラクダをくれました。わたしの実家からは三十頭のヒツジとヤギ、五頭のラクダ、五頭のウシ、一頭のウマをもらいました。

一九五八年に合作社が結成されたとき、わたしの家のヒツジとヤギは五百頭あまりになっており、ラクダが三十頭あまり、ウシが三十頭あまり、ウマが三十頭あまりになっていました。大型家畜も小型家畜も四年間に増えたわけです。それで、階級を決めたときは家畜が多いので「牧主」に決められてしまいました。

わたしたちの結婚式は一九五四年十二月十三日におこなわれました。夫の家から新しいゲ

ルを用意し、それをわたしの実家の近くに建てて三日間準備をして結婚式を挙げました。古いしきたりに則った、すばらしい結婚式でした。結婚式が終わってから二、三日のうちに遠くからの客も近くからの客もみな帰って、夫側のきょうだい親戚たちも帰って行きました。

わたしたち二人は新しいゲルを使って両親の隣に住んでいましたが、二度目の正月を過ぎ、その冬に旗の中心地に引っ越して、ゲルを夫の職場（公安局）の敷地内に建てました。その後、また放牧地に引っ越して、寺の近くのモリンホノドグと言う夏営地にゲルを建てておき、そこから夫の実家に行つて一ヶ月過ぎしてから、分けてもらった家畜を自分のゲルまで追つて来てそこで夏を過ごしました。そこで乳しぼりをして乳製品を作つて、家庭生活を営んでいました。

その当時は基本的に乳製品と肉で生活します。家畜にとつて牧草も良かったです。飲食用の水は川から汲みます。移動先が川から遠い場合は井戸水を使います。シャンド（タートル）と言う浅い井戸を手際よく掘つて使います。タートルと言うのは、川の水が涸れたところに穴を掘つて水を出すものを言います。当時は水が足りないということはありませんでした。川が涸れて切れてもタートルが掘れました。今とは違います。

わたしは家畜に恵まれていました。私有の家畜であろうと共有の家畜であろうとわたしのもとで家畜はよく育ちました。わたしたち二人の実家から分けてもらった家畜だけで三、四年のあいだに群れになるほど増えました。そのために「牧主」のレットルを張られました。

わたしの舅はラブジェーと言う名前です。一九五八年に亡くなりました。夫のナンジドは小さいころ僧侶だったということで、父の家のあとを継ぐことができなかつたので、ナンジドの妹に婿をもらつて、あとを継がせました。妹婿の名前はダワーと言います。ダワー家が夫の実家のあとを継いだのです。

わたしたちは一九五四年に結婚して、翌五年に最初の子どもマンガフツエグが生まれました。あなたがたはお知り合いですか？今は旗の中心地にいます。一九五六年にもう一人の娘が生まれました。一九五七年をとぼして一九五八年にもう一人の子どもが生まれましたが、約九ヶ月で亡くなりました。その後、一九六一年に一人の息子が生まれました。名前はバガナです。一九六二年にもう一人の息子が生まれました。名前はバートルです。そのあと、一九六四年に三つ子が生まれました。わたしから合計八人の子どもが生まれました。

一番上の子のマンガフツエグは旗の中心地にゲルを建てていたときに自分の家で生まれました。二人の息子は放牧地の家で生まれましたが、助産婦を呼んで来て助けてもらいました。そのほかの子どもたちはみな病院で生まれました。

最後の三つ子がお腹にいたとき、病院で検査してもらつたところ、

「双子なので出産のときは入院しなさい」

と言われました。それで早めに入院して出産しましたが、実際には三つ子でした。三つ子の一人が亡くなって、一人を妹のダリマーに養子に出して、もう一人は自分で育てました。

——文化大革命の時代をどのように過ごしましたか？

それはたいへん苦しみましたよ。一九五七年から夫が批判されはじめました。一九五八年六月に夫は右派として糾弾されて、悪人のレットルを貼られました。そして給料が半減されて、いろいろな肉体労働をさせられました。それに、以前レンガ作りをしていた漢人たちを管理していたことで恨まれたため、その後、一九五九年には完全に仕事を解雇されました。解雇された夫は家に戻つて来てから生産隊で肉体労働をしました。主な仕事は農作業でした。また、個人の家で草刈の仕事もしました。

たびたび呼び出されて批判されました。半年に一度、自分の考えを報告し、進歩や変化の

状況などを話さなければなりませんでした。その当時、批判するときには殴ることもありましたが、罵りました。しかし、それほどひどく殴りませんでした。わたしも右派の家族として批判されましたが、糾弾されて批判されるまでにはいたりませんでした。そうして三、四年経ったあと、一九六二年四月にわたしたちは別の一家の家畜を世話することになって、放牧地に行かされました。半年に一度報告することには変わりありませんでした。口頭で報告します。書いて上層部に提出することもありました。しかし、批判はそれほど激しくなくなってゆきました。

そして、一九六四年に新しい政治運動がはじまったのです。社会主義教育と言う運動が開始され、それから批判や糾弾が激しくなってきました。昼間は放牧して、夜は毎日のように会議が開かれて、糾弾し、批判します。または政治学習をさせては討論させます。そのうちにそれが定着して、一晚学習し、一晚討論し、一晚批判や糾弾をするようになりました。また殴るのです。糾弾はますます激しくなって、一九六七年にわたしたちはゲルと家畜と人間とともに生産隊に移されました。

人間を痛めつけるのはまだしも、ことばの通じない家畜まで痛めつけたのは何ともひどいことでした。

「牧主が世話した家畜も汚い」

として、家畜を殺しはじめました。子畜を残して母畜を殺しました。殺した家畜の肉を解放軍に供しました。旗の中心地に運びました。

当時はオランフー（烏蘭夫）の「千条万条のなかで家畜を増やすことが第一条である」と言うスローガンが批判されていたために、家畜が殺されていた次第です。

一九六七年はたいへんつらい年でした。その年に階級を定めました。わたしたちの家は「牧主」と決められて、財産と家畜のすべてを没収されました。ゲルも没収されました。やむを得ず、生産隊でダンボールや木の葉を使って小屋を作って、数人の子どもたちとそこに泊りました。冬の寒さで子どもたちが凍傷になったり凍死したりしないように、わたしたち二人は夜通し交代で火をたきました。掛けるものや着るものも薄かったので、その冬はまさに寒さに震えてあわや凍死寸前でした。

一九六七年に「牧主」に決められ、家畜を没収されて、上層部に報告されましたが、三年後の一九七〇年に上層部から回答が届いて、ふたたび階級を決めることになりました。その結果、母は「上中牧」（上層部中等牧民）に決められ、わたしの家は普通の「中牧」に決められました。それで、没収されたゲルを返してくれたので、わたしの罪名も少し軽くなりました。しかし、夫の罪名は重いままでした。「右派」、「民族分裂分子」と言う罪名はあいかわらず付けられたままでした。

なぜ、「民族分裂分子」にされたのかといえば、あるときしやれを言って「幹部らが吸う大前門、われらが吸うただの煙」（「大前門」は当時的高级タバコの名称）と言ったことで、幹部たちを暗に攻撃した、民族分裂をうながしたと言う罪を突きつけられて、レットテルを貼られたのでした。それで、一九七〇年三月に夫は捕まり、蘭州の手前にある「改造所」（天祝労働改造隊）に連れて行かれて「思想改造」させられました。そこでは「思想改造」のために五年間、肉体労働をさせられて苦勞をし尽くしました。もっぱら石を割らせます。土を掘らせます。何の権利もありませんでした。

わたしは返してもらったゲルを生産隊の中心地に建て、ゲルに住んで生産隊の仕事を手伝って子どもたちを養いました。そして、少しばかりの金を節約してはその五元や十元を手紙のなかに同封して夫に送金していました。一番多くもらったときでもせいぜい三十元を送る程度でした。

当時は、いくらしつかり働いてもあまり報酬をもらってはいけませんでした。わたしの「牧

主」と言うレットテルは剥ぎ落とされたとしても、右派の家族であることに変わりはなく、あいかわらず人の監視下で働き、監視のもとで生活していました。人と対等に空をまっすぐ仰ぐことはできませんでした。

一九七五年に夫は「改造所」から出て家に戻って来ました。しかし、右派のレットテルは貼られたままでした。一年後の一九七六年六月にわたしは生産隊の家畜を追って放牧地に移住しました。夫はあいかわらず罪人にされたまま生産隊で働いていました。半年に一度報告することに変わりはありませんでした。

一九五七年から一九七八年になるまでの二十年あまりのあいだ、半年に一度報告することはほとんど絶えなかつたと思います。一九七八年八月に夫は罪名が消されたので、わたしを追って放牧地にやって来ました。夫は八月に罪名を消されると、その年の十月に仕事に復帰し、最初は旗の農業機械工場に勤めましたが、のちに、転勤して労働人事局に勤めるようになりました。

わたしが一九七六年から世話しはじめた百頭の家畜は、毎年の成長率がノルマを超えていました。出産の時期には助産のノルマを超えました。死亡率が少ないことのほかに、羊毛などの畜産原料のノルマも超えました。それで毎年ノルマを超えた分の報酬をもらっていましたが、賞はもらえませんでした。模範的労働者の称号も与えてくれません。その基準に達してもそうなりません。夫にはまだ罪名があるままなので右派の家族に賞や称号を与えてはいけなかつたのです。

しかし、一九七八年に夫の罪が消されてからは二年連続、模範的な牧民として賞をもらいました。一九八〇年にわたしは家畜を返して、夫の後を追って旗の中心地に来て生活しました。最初、百頭の家畜を世話しはじめたのですが、一九八〇年に返すときは五百頭あまりまでに増えていました。

約二十年間糾弾された夫の減給された分は返してもらえませんでした。文化大革命で糾弾された幹部たちの減給分はのちに返してもらえたのですが、右派の減給はそのままでした。仕事に復帰して旗の中心地に勤めるようになってからは八百元の月給をもらうようになりましたが、のちに、九百元の給料をもらうようになってから夫は亡くなりました。仕事に復帰してから十年ちよつとくらいだったと思います。

一九八九年に夫は重病にかかって退職しました。半身不随になっていくら治療をしてもだめでした。ますます重くなって、一九九一年にはベッドから起き上がれなくなり、介護を必要としました。わたしは夫を三年間世話し、便器を運びました。子どもたちには世話をさせませんでした。わたしは自分で世話をして、夫は一九九四年に亡くなりました。

夫が亡くなったあと、わたしは再度、家畜を分けてもらい、バヤンボグド・ソムのツァアインノール・ガツァーに放牧地を分配されて放牧しました。家畜も増えて多くなりました。五年間放牧して一九九九年五月に家畜を別の人に頼んで、その年の六月にフフホト市に来て住むようになりました。

こうしてまさしく父の故郷トゥメドに初めてやって来たわけです。わたしの数少ない家畜は増えて百頭になりました。わたしが分けてもらった牧草地もたいへん良いところですよ。草も水も良い牧草地です。それに専用の牧草の囲いもあります。このすべてをわたしは人に任せてフフホト市に来ました。

——家畜を預かってもらう際の、報酬や代金の計算はどうなっていますか？

わたしの百頭の家畜を世話してくれた報酬として、毎年子畜を八頭増やしてくれば、あとは増えた分が彼らのものになります。家畜の税金などは彼らが払います。羊毛やその他の毛

などの畜産原料は彼らももらいます。彼らは乳しぼりもして自分のために乳製品を作ります。わたしが受け取るのは毎年八頭の子畜です。何頭生まれても八頭以外は彼らのものです。今わたしはこの百頭の家畜と国からもらっている二百元の生活費を頼りに生活しています。今は心配することはありません。

わたしは小さいころ一人娘で、十人の子どものなかでただ一人生き残った、生きた宝とされてわがままに、贅沢に育った人間です。金持ちのヌデンデルゲルの大事な一人姪としてたいへんわがままに育ちました。しかし、その後は少なからず苦しみを味わいました。それを話しても仕方ありませんが、ただ最も悔しいのは子どもたちに勉強させてやることができず、大学に送れなかったことです。一人も大学に行きませんでした。

一九六八年に階級を分けたために、長女のマンダフツエツエグは、悪者「牧主」の子どもということで学校から除名されました。その後、子どもたちはみな「右派」と「牧主」と言う罪名のある者たちの子どもとしてほかの子どもたちからいじめられて、よその子どもたちのように進学して勉強することができませんでした。

その後、名誉回復されたあと一九八四年に、右派として批判された公務員の家族に対してそれぞれ一人の就職割り当てが与えられました。わたしに就職を勧められていましたが、わたしは息子のバートルを就職させました。息子は就職して旗の物資局に割り当てられました。その後、その機関がなくなつて、今息子は失業中です。子どもたちがろくに進学できなかったため、今は仕事の状況もありよくありません。

一人の娘が日本にいます。名前はナランツエツエグと言います。婿の名前はサインチョグトです。二人とも日本にいます。婿のサインチョグトはシリングル盟チャハルの鑲黄旗出身の人です。下の子どもも日本に行つて来ました。まだ安定した仕事がありません。

わたしたち二人は二十年間苦しめられて耐えて来たのですが、良い時を迎えることができず。ただ、子どもたちには申し訳ありません。学ぶべき時期にわたしたちのせいで勉強できませんでしたから。

——ご両親は最後にどうされましたか？

父は一九六九年に「牧主」として捕まり、糾弾されていましたが、一晩で殴り殺されたそうです。父はザーンツアガン生産隊に連れ出されて、一晩じゅう糾問され、起き上がれなくなつたときに、糾弾されていた人たちを閉じこめていた部屋に引つ張り込まれたそうです。それでその晩に血を吐いて死んだと言います。父はちょうど六十二歳でした。

翌朝、同じ部屋にいた二人の「罪人」が父の死体を担いでサイハントーライで焼いたそうです。担いで行つた一人のお名前をゲンデンと言います。のちに、わたしたちが聞いたのです。彼が言うには、慌てて焼いたのでよく焼けずに中途半端に焼けたそうです。わたしたちは焼けた跡を教えてもらい、そこから中途半端に焼かれた骨を拾おうとしましたが、何も見つかりませんでした。人びとが言うにはウシやラクダがかけたのではないかということなのです。

わたしたちはみな悪人のレッテルを張られていましたので、会いにも行きませんでした。顔を見ることもできず父は亡くなりました。今はその骨のかけらさえこの世から見つけ出せなくなりました。悔しくても当たる人がいません。時代がそうだったので。

母はわたしのそばにいました。しかし、わたしは監視下にありましたので、母の世話をすることができませんでした。母は一九六八年から糾弾されはじめ、殴られて足を折られ、右足の踝より下の部分が後ろ向きになっていました。それに、片腕が捻られたために曲がつた状態でまっすぐ伸ばせなくなつていました。人間の命というのは忍耐強いものですね。母は立てられなくなつて寝たきりになったにもかかわらず、這わせて仕事をさせられていました。片足、

片腕が動けないのに這わせて掘った穴の土をとりのぞく仕事をさせられていました。立てないので這って行かせて穴の横に座らせて働かせました。仕事が終わったあとはまた這って帰ります。

そんなことになっているにもかかわらず、わたしは助けに行くことも許されませんでした。怖くて見ることも助けることもできませんでした。最後に、寝たきり状態となって半年後、一九七〇年夏、七月に亡くなりました。わたしはある老人にお願いして二人で牛車に母の遺体を乗せ、サイハントーライで火葬しました。

母方の叔父のヌデンデルグは旗が設立された当初、ルハワンジャブさんとともに旗長になりました。のちに、彼は政治協商委員会主席にもなりました。叔父は「牧主」であり、また「実権派」としても批判されました。彼もひどく糾弾されたと思います。その後、盟の中心地で亡くなりました。夫人のホル叔母さんみたいへん苦しめられました。

二〇〇四年一月十一日、フフホト市内のツェベグジャブ（ドルマンツォーの娘）さん宅にて聞き取りをおこなった。

マリヤさんは戌年生まれ、一九三四年にボル山のボグディーンシリのツアガンタンゴと言うところで生まれました。

——さあ、あなたの幼いころのことを話してくださいますか？

幼いころのふるさととは、牧地がすばらしかったですよ。わたしの父母はハルハから来た人たちだったそうです。バヤンホンゴル・アイマグのジョノンワン旗の人だったそうですよ。ハルハの革命から逃げて来た人びとでした。何の意味があつたでしょうねえ、ここへ来てもまた「文化大革命」に見舞われて、ひどい目にあつたのですから。

わたしの父は「モンゴル国に寝返ろうとしている」だの、「黒幫と関係がある」だのと、いろいろな罪名を与えられ、捕まえられて連れて行かれました。そして父は亡くなりました。わたしはおよそ十歳だったでしょう、父が捕らえられたときは、父の名前はゴチョイスレンで、母の名前はホムボンです。わたしたちは四人きょうだいです。二人の娘が亡くなり、今はわたしがいます。弟のナムジルも健在です。

わたしは子どものころ、ドゥンドゥブ・バヤンの家で雇われていました。幼いとき、子ヤギや子ヒツジを放牧していました。子ウシも放牧していました。少し大きくなってからは、ヒツジを放牧して遠いところへ行くようにもなりました。朝出て、晩戻ります。当時、ドゥンドゥブ・バヤン家は概してボル山からこちら側の、ガビンソハイやフルジグドの北などの場所を移動していました。たいていフルジグドの湖畔で夏営します。とてもすばらしいところでしたよ。冬になると、北側の、胡楊林に入って冬営します。とても暖かいところです。胡楊林は密集しているので、風を通さないのでした。

夏になると搾乳し、春と冬は子畜の誕生を迎えるという具合に、一年じゅう忙しく過ごしました。幼いころ、いろいろな作業をして苦労し、いろいろな仕事を手伝ってきたので、つらかったけれども、働くことを学びました。

ドゥンドゥブには三人の子どもがいました。息子一人と娘二人でした。裕福でしたから、三つのゲルをもっていました。大きなゲルに自分たちが住んでいました。外側も美しく、広い部屋でした。もう一つは来客用で、同じく美しく広いゲルでした。労働をしている人たちのゲルとして、もう一つ空っぽのゲルがありました。わたしたちはそこで食事をし、住んでいました。

二十歳まではこのように人の家で仕事をしていました。今考えると、当時は人の家で放牧していたものの、すてきでした。ふるさとが美しかったのです。草も水も豊富でした。そもそも早魃になるなどということは子どもころには経験しませんでした。風が強くても、今のようには黄砂はありませんでしたよ。ただ木々が音を立てるだけの、青い風でした。

わたしは二十歳のときに結婚して、自分の家をもちました。夫の名前はマンジュと言います。わたしはトルゴード人と結婚したのですよ。一九五五年に結婚証をもらって結婚式をしました。わたしはマンジュの家に嫁に行ったのです。当時、マンジュの家には、五、六頭のラクダ、十頭ほどのロバがいました。二百頭あまりのヒツジ、ヤギがいて、中級の家庭でした。舅の名前はジャムバで、姑の名前はバラマでした。夫のマンジュはこの家の一人息子でしたが、そもそも養子でした。マンジュにはウルジンと言う名前の妹がいました。もともと舅は旗の書記官だったそうです。中華人民共和国が成立する前に、エルデニゲレルやルハワンジャブなどの貴族のもとで働き、書記をしていたと言うので、文化大革命のときにひどい目にあいました。

舅姑の老いた二人を殴って、レットテルを貼って犯罪者にしました。富裕な牧主であるとか、黒幫などと糾弾されました。夫のマンジュもまた牧主の子であるとか、黒幫であるとか、糾弾されました。文革大革命のときにひどく殴られたために舅と姑は文革大革命の終わるころに相次

いで亡くなりました。夫マンジユも殴られたために病気になる、六年前に突然、脳溢血で亡くなりました。今わたしは、持病のある息子と一緒に生活しています。文化大革命のときはつかったけれども、今は幸せな生活を送っています。

——この村（移民村）にいつ来たのですか？

去年の十月に引越して来ました。ずっと田舎で暮らしてきた人間にとつては慣れなくてたいへんでした。今は大丈夫です。むかし、わたしたちはバルジョール・オポー、バヤンボグドにいました。冬夏四季つねに囲いをもっていました。どの家庭もみなそれぞれ囲いのある宿营地で冬をすごしました。

井戸を掘って、水を利用していました。当時は井戸を掘るのも簡単でした。それほど深く掘らなくても水が出ていました。井戸に木製の梯子を置くこともありましたが、各家庭でそれぞれ自分の井戸を掘っていました。近所で一つの井戸を使っていたこともありましたが、四季の囲いはすべて世帯ごとに別々でした。

ドゴイランを組織することになったとき、わたしたちはボル山にいました。それからバグに組織され、一九五八年にバヤンボグドからソブノールにやって来ました。その際には、軍隊が囲いを作ってくれました。冬と夏の囲いは別々で、しかも夏用の囲いとして二つセットの囲いを作ってくれました。さらにフブグ（子ヒツジを入れる囲い）を作ってくれました。フブグは、地面を掘って地下に作る方法と、屋根を覆って作る方法と二種類ありました。一九五八年に人民会社組織され、人民会社に二百頭余りのヒツジ、ヤギを供出しました。そのために、文化大革命のときに牧主として殴られたのですよ。

バヤンボグドにいたとき、夏はすばらしかったですねえ。夏になると、白い場所（オーブンスペースの意）に出て宿営します。河川水を飲んでいました。バヤンボグドの北側に一つの河川がありました。名前はバルジョール・オポーの川と言います。

河畔の茂みのなかに家畜が入ると見えなくなりました。すばらしく草も密集していたのです。バヤンボグドにいたときは、バルジョール・オポーを毎年祭っていました。オポー祭りは女人禁制でした。女たちは遠いところから乳をふりまいて、願いをつぶやいて祈るのです。そうすれば、子畜がよく生まれ、乳が豊富になります。ラクダの乳に恵まれるのです。春になって、ヒツジやヤギの子に、ラクダの乳を与えていました。

ソブノールに来てから、ブリガード（人民公社の生産隊）ごとに大いに耕作しました。作物の種類も増えました。小麦、ウリ、ハクサイ、ダイコン、ジャガイモ、ナス、トマトなどいろいろありました。漢族の人たちもやって来て耕しました。軍隊も来て耕しました。人民会社のおかげで「自給自足」と言う話があったそうです。当時は生活用品すべてを自分たちでまかなうようになっていたでしょう。それ以前は、ロバに乗った漢族商人が来ていました。この人たちに家畜一頭を与えて、米、茶、小麦粉などと交換していました。それから、皮や毛などの畜産物で、少々の野菜、ネギ、ダイコンなどを交換していました。家によっては、ときに漢族商人と知り合いになり、ヒツジを与えて布や絹をはじめとして必需品を買って来てもらっていました。また、ある家々では金塔などへ数ヶ月交易に行きました。わたしたちの毛や皮をまとめ持って行って、白い小麦粉、白米、茶、砂糖などと交換して戻って来るのです。わたしの舅の家はそうしていたと聞いています。わたしは嫁として嫁いだ人間ですから、そうしたことに詳しくはありません。家事だけをしていました。皮を加工したり、縫い物をしていました。入り口近くで食事を作り、家事をしていました。それに搾乳をしたり、舅たちを敬います。かなりおとなしくしなければなりません。けれども、わたしの義父母たち年寄りはとても良い

人たちでした。義父は教育を受けた人でした。中華人民共和国が成立する以前はハルハから来た人たちを少々軽蔑していたのですよ。「ツァーガーチン（漂泊者の意）」と見下していました。けれども、今では共産党のおかげで、人びとがみな平等で、幸せです。

——あなたが子どものころの食事について話していただけますか？

肉と脂肪ばかりでした。小さいころには、発酵乳や乳を飲むだけで育っていました。一般に、朝はお茶、昼はオンド、夜は肉と穀類と言っていました。他人の家で放牧していたころ、朝はお茶にホロート（チーズ類）、ウルム（クリーム類）、シャルトス（バターオイル）などを入れて飲むだけで、放牧に出かけました。昼食はありませんでした。冬になれば日が短いのでお腹がすかず、一日じゅう放牧して、夜遅く帰って来てご飯を食べます。小麦粉で料理を作っておきます。肉を煮た汁に穀類や麺、パンタンを入れて食べます。肉はほとんど食べません。ドゥンドゥブ・バヤンの家で働いていたときには、わたしたち使用人にときどき肉を煮てくれました。内臓も冬に食べていました。普通の食事としては、小麦粉を揚げたものや、裸麦のザンバーなどを食べていました。野生のフムール（ネギの一種）やターナ（ニラの一種）を摘んで食べます。ジグドの実を採って食べます。ゴヨウを掘って食べます。ゴヨウと言うのは赤い鎖陽です。甘草もありました。

幼いころ、シヤラブと言う人がある夜やって来てちよつと立派なフムールを持って来たことがありました。そのフムールをきれいに洗って、伸ばして平らにして糸でつるして乾かしておき、冬になってポーズ（肉饅頭）やバンシ（水餃子）の調味料として使っていました。このシヤラブと言う人は大いにならぬ話をした。馬鬃郷から来たそうです。シヤラブの家には、ロシア人がしょっちゅうラクダに乗ってやって来て、一緒に狩猟をしていたそうです。野外で突然出会った人をびっくりさせるほどの高い鼻で、緑の目で、毛むくじやらの顔の人だ、と話していたことが今でも忘れられません。当時は、毛むくじやらの緑の目の人と言ったらどんなものなのだろうかと驚かすにはいらなかったものです。今から思えば、外国人というわけです。フムールもまた乾燥させて粉末にして調味料の代わりに使えるのだそうです。

二〇〇三年九月三日午後三時、マリヤさんの移民村にあるお宅で聞き取りをおこなった。  
二〇〇五年に再訪したときにはすでに亡くなっていた。二〇〇四年十一月三十日永眠。合掌。

ジブザンさんは、辰年生まれで、二〇〇六年現在七十八歳である。一九二八年に生まれた。エジネー旗で生まれた。生まれ落ちた場所は、現在のムンクトから向こう（南側）にあるソリトと言るところの、ホイトムレン（モンゴル語で北河の意）川の岸沿いであったとのことである。母から生まれた十二人きょうだいのうちジブザンさんは十一番目であると言う。（ジブザンさんはジョー・ジョー・ボルさんの実の妹である。ジョー・ジョー・ボルさんの話によれば、ジブザンさんはきょうだいの九番目である。幼いころに死んだ子どもを含めるか否かによってずれが生じていると思われる。）

——さて、あなたが小さいころのふるさとの様子や、両親きょうだい親戚の状況について話してくださいませか？

ええ！幼いころ、ふるさとはすばらしかったですよ。わたしは小さいときにはソリトにいました。いろいろな草が生えて、美しい草原でした。夏には草の上をわたしたちは裸足で歩きます。河畔には、ジグドやソハイが、足を置くところもないほど密集して生えていました。わたしたちはシンジを持って、ジグドの木の下で調べて、ジグドを採って煮て食べます。煮たジグドを木製の椀に入れて食べていたものです。

——シンジとは何ですか？

木で作った四角形の一種の容器です。主に作物を計るときに使っていました。一シンジの作物を一頭のヒツジと交換していたそうです。

当時、ムレン川の水と言うのはラクダの尾が水につかるほど深いものでした。そのとき、川には魚もたくさんいました。人は魚をほぼ食べませんでした。鳥も食べませんでした。雀などの鳥がとでもたくさんいました。秋になると、鳥が一群れ一群れで帰って行き、ふたたび翌春になると戻って来ていました。ラマ鳥と言って、頭に白い印のついた、黄色っぽいまだら模様の鳥がいました。これはアンギル（黄鴨）とも言います。この鳥を殺してはいけません、と言います。黄鴨は故郷の鳥であるとも言えます。「どれほど黒くても、カラスはふるさとの鳥。どれほど白くても、白鳥は他所の鳥」と言われていますが、黄鴨もまた故郷の鳥だと言います。黄鴨は群れで戻って来ません。地元の年寄りたちの話によれば、黄鴨は木で冬を過ごすことができるそうです。ともかく春が始まると黄鴨が最初に出て来ます。本当にふるさとの森で冬眠をしているから、春に最初に出て来るのでしょうかしら。

亀は殺しません。怒らせてはいけません。亀が怒って咬むと、咬んだままずっと離しません。金のハサミで切るよりほかに離す方法がないのだそうです。雨が降ると亀はあちらこちらそこらじゅうにいるものです。現在では、雨がほとんど降らず、毎年旱魃になるので、亀も見られなくなっています。環境が変わり、水や草が悪くなったので、動物もいなくなっているのですよ。

わたしたちが子どもころには狼もいました。家畜が狼に食べられないように気をつけて、群れから離れずに放牧していました。けれど、今は狼がいなくなつて、かわりに狐が出て来て、狼のようになつて家畜を捕まえて食べるようになりましたよ。ゼール（モウコガゼル）もとてもたくさんいました。今はまったく見あたらなくなりました。ゾルハナもたくさんいました。今でもゾルハナはいます。ゾルハナは穴を掘って生活します。ゾルハナの足跡は幼児の足跡とまったく同じです。ゾルハナはまた独特な動物ですよ。ゾルハナの血で肺の病気を治すそうです。けれども、ゾルハナは大いに復讐する動物だそうです。もし罾で捕まえたなら、必ず殺さなければなりません。もし殺さなければ、「何世代たつても、何世代かかつても復讐する」と誓つて、弓矢を準備して、穴の前で待っていると言う話があります。もしゾルハナが罾をつけた

まま穴に入ったら、穴を壊して罾を取り除かなければならないそうです。そうしないと罾を仕掛けた人にゾルハナの罰が当たるとのこと、気をつけます。

わたしは幼いころに養子に出された娘です。実父の名前はバザルで、成年の人でした。実父の先祖はハルハの人です。祖父の時代にハルハから来て、父はエジネーで生まれたそうです。祖父は双子の一方で、小さな双子、大きな双子と呼ばれていたそうです。祖父は大きな双子（双子の兄）と呼ばれていたそうです。

わたしの母はトルゴード人で、ラムチェリンと言う名前です。亥年生まれの人でした。わたしが十歳ぐらいのときに、わたしの家はソリトからナムグと言う場所に引越して来ました。そこでわたしの家族は大きな不幸に遭遇しました。わたしの父母きょうだい全部で七人が亡くなったのです。それで、わたしをハブタガイツアガンと言う人に養子に出しました。わたしは十五歳でこの家に養女に来ました。この家の生活は順調で、かなり裕福でした。おおよそ二十〜三十頭のラクダ、三百頭近くのヒツジ、ヤギ、十頭ぐらいのウシを持っていました。

わたしはこの家の子どもとして行つたのですけれども、ほとんどすべての仕事をしていました。夜中の四時ごろ、呼ばれて起きます。四時に起きて火をおこし、お茶を作っていました。それから柴を背負つて来ます。夏なら、ウシを搾乳し、ヒツジを搾乳します。ヒツジやウシを放牧しに行きます。かなり遠いところまで放牧していました。冬なら、太陽が落ちるまで家の方へ家畜を戻してはなりません。ずうっと野外で放牧します。夏は、朝早く出て、昼に一度戻つて来て搾乳していました。午後再び放牧して、夜遅く戻つて来ます。家畜について出るときは、朝ごはんを食べて出て、一日中何も食べずにいて、夜に戻つて来て夜の食事をとっていました。昼食というのはまったくありませんでしたよ。ラクダもまた搾乳します。

普通はラクダに人がついて放牧することなく、ラクダの子を結わえておきます。子どもがいればラクダは必ず戻つて来るものです。たまに、子ラクダが親ラクダについて行くようなことがあれば、子ラクダが狼に食べられないように一日中探します。どうしても見つからなければ、あちらこちらに火をつけます。その煙を狼は怖がって、子ラクダを食べないそうです。

わたしの養母の名前はタンジェーと言いました。母から生まれるときに、まったく野外で生まれて幼い乳児を母親は懐に入れて来たのだそうです。そして草原で生まれたことを記念するために、タンジェー（平原を意味するらしい）と言う名前を与えたそうです。この養母は、文化大革命のときに「牧民」とか「富牧」とかレットテルを貼られて糾弾されました。近年、名誉回復する際に、養母を「富牧」としたかどうかはつきりわかりません。階級を決めるとき、わたしも「富牧」と名付けられて殴られました。子どもを連れて行つて一年半ほど耕作をしました。

わたしをチョクソムとハイダブの二人が殴りました。日中は労働して、夜は批判されました。チョクソムとハイダブがわたしを殴っていると、名字が趙と言う漢族の若者が一人入つて来ました。けれども、その人は殴りませんでした。「富牧」のほかに「国民党の黨員だった」とか言つて殴りました。わたしはちょうど妊娠していました。殴られて流産しましたよ。わたしが殴られていると、劉京と言う医者が入つて来て、殴られている様子を見て、ちよつとかわいそうに思ったのでしょうか。そんなに殴つてはいけないと禁じて、ハイダブに少し説教して行きました。

翌日、労働に出るとお腹が痛くなり、気持ちが悪くなり、下半身から血が流れていました。それで、子どもを流産したのです。帰つて来る途中に、チョクソムとハイダブの二人に会いました。それ以降、子どもを産めなくなりました。一人の息子しかいないから、しかたなく、他の家から一人の娘をもらいました。わたしの夫の弟ジャミヤンからもらいました。この養女は二十歳で結婚して、家を出ました。

わたしは文化大革命のときに殴られて障害者になりました。軽度の身体障害者の証明書を  
持っています。これまでは毎年、国から百六十二元もらっていました。最近少し増えています。  
半年で九百元もらっており、一年で千八百元もらうようになっていきます。文化大革命当時はほ  
んとうにたいへんでした。

わたしの姉ダリの夫はサンジと言う人でした。サンジとわたしはかなり殴られました。「内  
蒙古人民革命党」とされて殴られました。大きな火をして、わたしたちを火のそばに立た  
せて、批判していました。ナラントヤアの老いた両親も殴られ、二人は（耐えられずに）湖に  
飛び込んで死にました。湖畔に遺体を運び焼きました。あの辛い時期、半月か一ヶ月に一人、  
死んでいました。耐えられずに自殺したり、首つりしたりして死んでいました。当時、恐怖心  
から自殺した人もいました。

近年、文化大革命が終わって名誉回復する際に、当初、ハイダブはまったく罪を認めませ  
んでした。わたしは殴つてないと話していました。それでわたしは殴つているところを見た人  
を証拠にして話しました。チョクソムは賢い人で「ジブザン姉の言うのは正しい。本当にそう  
でした。そのように殴つていました。ジブザン姉の言うことは全部事実ですから、今わたしは  
どんな処罰でも受ける」と言いました。それで、政府も事実を了解して、わたしに身体障害者  
の証明書をくれました。現在、ハイダブはもういなくなり、チョクソムはまだ生きています。  
チョクソムはのちに書記になりました。今でも共産党の幹部です。

——ジブザンさんはいつ結婚なさったのですか？

ええ、わたしが二十歳のとき、養母が婿を取ってくれました。当時、わたしはその人が嫌  
いでしたので、親戚の家に逃げて行ってしまいました。けれど、逃げるなんてことはできませ  
ん。わたしたちのゲルを婿のゲルの隣に建てて、わたしを横にある一つのマイハン（テント）  
の中に連れて来て座らせました。その夜は一人で寝て泊まり、翌日、結婚式をしました。古い  
やり方で結婚式をとりおこないました。脛骨を握って、太陽に祈りました。結婚式の三日後に  
仕切りをとりはずすという慣習でした。

その人と同居しても、およそ気が合いませんでした。それで、とうとうどうしようもなく  
て別れました。文化大革命のとき、その人は殴られ、結局、首をつつて自殺したそうです。わ  
たしは別人と知り合つて、一緒に暮らしました。そして一人の息子を持ちました。三十七歳の  
ときに息子を産みました。放牧地で妊娠しましたけれども、子どもは病院に入院して産みまし  
た。現在、息子は家と家畜とを持ち、牧畜地区にいます。ムンクトと言うガツアーにいます。  
もとのムンクトとザーンツアガーンの二つのガツアーを併せて一つのガツアーになりました。

息子の二人の子どもたちの面倒をみて学校に通わせるために、わたしはエジネー旗中心地  
にこうして住んでいます。息子は牧民でした。現在、放牧禁止になったため、これからどう  
しようかとても困っています。もともと移民村に家をもりませんでしたが、ザーンツアガーン、  
ツェヘ、バヤンボラグなどのガツアーのまさに中心地に移民村を作つて家を建ててくれていま  
した。移民村に家をもらわなかった人は必ずアパートをもらえと強制されるそうです。アパー  
トの部屋をもらうなら、全部で十二万円要るそうです。国から六万円を出してくれて、個人も  
六万円を出すのだそうです。それはまあいいとしても、アパート暮らしをすれば牧畜はできな  
くなります。少しの家畜さえなくなつたらどうやって生活しようかと困っています。これから  
どうなるかわかりません。

アラシャール右旗で、とある人が家畜を売らないでいると、ある日突然、政府の人が商人と  
一緒にやって来て家畜を全部買つて行ったそうです。今、息子はそんなことになるかもしれな  
いと心配しています。突然ある日家畜を全部追つて行ったらどうしようかと心配なので、今は

少しずつ売却して家畜を少なくしています。今は二百余頭のヒツジ、ヤギがいます。今年は六、七百元の価格の種オスヤギを購入しました。息子の名前はガンバートルと言います。

当初、土の上に家畜の足跡があつてはだめだと言われていました。つまり、囲いを作つて飼えと言うわけです。これからどうなるか、わかりません。今年から家畜を全部売却させられて、高齢者を幸せにするということです。年寄りには年間八千元の給与があるそうです。それにはランクがあるそうです。三十五から四十五歳は一つのランクで、四十五から五十五歳は別のランクで、五十五から六十五歳はまた別のランクで、六十五から七十五歳はまた別のランクだそうです。六十五歳以上の高齢者の年給が一番高く、一年に八千円だそうです。理由は、そんな人たちは仕事をする能力がないからそうしてあげるのだそうです。若者には現金をあげません。若者には、頑張つて仕事をして自力で自分を養うことを要求しているのだそうです。

これは政府の「家畜を囲つて草地を回復する」という政策を忠実に実行しているわけです。政府からは、草地を回復し、胡楊林を保護せよと言う指示が出されているとのことです。確かに、むかし、エジネー旗には胡楊の木が密集していました。ウシやウマがまったく入れないほど一杯でした。それに、ザグ（サクサウル）がありました、ジグド（トネリコ）がありました、ソハイ（タマリスク）がありました。ザグは今なくなっています。

ザグは概して石炭のように火が長持ちします。ザグの火種はほとんど消えませんが、それに熱量が良く、質が良く、灰が少ない、良い燃料なのです。今ではなくなりつつあるので植えています。ザグとジグドの成長は速いです。ジグドは種で植えます。種を撒いて植えてよいのです。一方、胡楊は根で生えます。胡楊のナイルザグ（若木のことを指す）は五年で高い胡楊になつて成熟します。しかし、胡楊はまだ若木のとき、家畜が樹皮を食べると、すぐに乾燥してしまい、再び成長することはありません。家畜は胡楊の若木の皮だけを食えます。ですから、本当に家畜を困いさえしたら、すぐに胡楊の若木は保全されるでしょう。かつて家畜は少なかつたので、胡楊が密集していたのですよ。わたしは十五歳で養女になつたとき、養父母の家は湖畔にありました。木々が密集していました。おおよそ、わたしが三十代、四十代の頃から始めて、草地が悪くなつてきたのです。もっぱら雨量が少なくなり、旱魃になり、草が生えなくなつてきたのです。雨が降らなくなつた原因が何かと言えば、湖の水が枯れてしまったからだと古老たちが話していましたよ。湖水は蒸発して雨になるものらしい、と言うのですよ。

——最近、ジブザンさんの生活はいかがでしようか？

ええ！良いですよ。今はとても良いです。わたしたちはきょうだい三人残っています。兄は今年、九十二歳で、姉ジョー・ジョー・ポールも健康です。チャラマとダトウサンジャは一番上の姉から生まれた子どもです。親戚一同みんな元気です。文化大革命のときにたいへんだっただけで、文化大革命が終わつてから、数年間、耕作に従事しました。その後、牧畜の上手な家は牧民になれと言われて、再び家畜を放牧し、百頭の母畜から百頭の子畜を得る模範牧民になりました。ゴロナイは概して草が良く、暖かい場所です。ガツァー中心地からゴロナイまで計画的に移動していました。

一般に、貧乏な世帯を季節移動させていました。わが家は貧乏ではないので毎年ゴロナイへ移動する必要はありませんでした。しかし、移動しないしていると、どうして移動しないのかと意見されるので、わが家もまたゴロナイへ移動しました。移動して、もちろんしつかりと放牧するので、百頭の母畜から百頭の子畜を迎えていました。わが家は牧畜上手でした。しばしば模範牧民になっていました。家畜を狼に食べられたことがあります。むかしは狼が多かつたのですけれども、狼狩りに行くことはなく、狼が来たら、できるだけ殺していました。地域で狼の被害が多い場合は、組織的にみんなで狼狩りをしていましたよ。今や故郷は旱魃で、

家畜は少なくなり、狼もいなくなりました。人びとはそれぞれ生き抜こうとしており、ある人は木を植えています。ある人はザグを植えています。ザグは成長が速いのです。黒城にも今はザグを植えています。ある人は移民村で、配分された家の余っている部屋を人に貸して現金収入を得ています。ある人は商店を経営しています。ある人は食堂を経営しています。いろいろな方法で生活するようになっていきます。

——家畜が子畜を嫌うときにはどうしていたか話してくださいませるか？

ええ、家畜にトイゴすると言います。ヒツジにはトイゴルナと呼び、ヤギにはチョイゴルナと呼びます。親のない子をハイドールな家畜に引き取らせるのです。ハイダゴルとは、子ヤギや子ヒツジが死んだけれども乳の出る母畜のことです。なぜ母畜が子畜を嫌うのかと言うと、多くの子ヤギ、子ヒツジが狭い場所に押し込まれて糞尿の臭いがしみこんでしまつて母親が嫌うのでしょうか。そもそもモンゴル人は子ヤギ、子ヒツジをホグノと呼ばれる子畜専用の綱につなぎます。しかし、近年、フブグと呼ばれる専用の柵を作つて、子ヤギと子ヒツジをまとめてそのフブグに入れるようになりました。ホグノに結わえたほうが清潔ですよ。

——嫌われた子畜を母畜に引き取らせるときの歌を歌っていましたか？  
歌っていました・・・。

ジブザン母は歌が上手である。歌うのがとても上手な人であった。わたしたちに嫌われた子畜を母畜に引き取らせるときに歌う「トイゴの歌」や「チョイゴの歌」などを歌つてくれ、また民謡「ツアガン・シャルガル」も歌つてくれた。

白いウマがみごとに肥えているならば、

白い正月の新月の日にぞ、母にまみえん。

黒いウマがすばらしく肥えているならば、

敬愛する父に春の月にぞ、まみえん。

二〇〇六年九月十八日午前十時、エジネー旗中心地ドライブブ鎮にあるジブザンさん宅で聞き取りをおこなった。

チャルマーさん。一九四一年の巳年生まれ、二〇〇五年現在、六十五歳。もともとは青海省海西州の徳令哈市の人である。一九四五年にカザフ族に攻撃されて、故郷を離れてエジネーにやって来た。

——チャルマーさんの幼いころのことや、個人的な経歴から聞かせていただけませんか？

わたしは五歳のとき、生まれ故郷の青海省西州を出てきたので、幼いころのこのことはあまりわかりません。わたしの父はメーレンでした。「ヒーデブ・メーレン」と言えば故郷で知らない人はまずなかったそうです。チベット語、中国語など五種類の言語に通じて、裁判官の役割を果たしていました。けれども、カザフ族に故郷を攻撃されて生活ができなくなりました。そこで、旗に住んでいたみな各各地へ逃げてゆきました。わたしの家も仕方なくエジネーに来ました。母の名前はツェベグジャブで、辰年生まれでした。故郷を出るとき、父、母、姉、兄、姉婿、それにわたしの六人がいたそうです。エジネーに来るとき、一年もかかったそうです。

初めてエジネーに到着したころは、西寺（現在、新西寺と呼ばれているところ）に至り、そこに落ち着いていたそうです。姉は妊娠しており、移動のせいで難産で亡くなりました。そうやって生まれた娘はダリジャブと言ひ、健在です。

兄はエジネーに来てから結婚しました。イフトクトフの養女であるツェレンツォーと暮らしました。ツェレンツォーも健在です。兄は軍隊に参加していました。最後には、ルハワンジャブ・ノヨンの専属歌手をしていました。もともと兄の名前はツァガンフーでしたが、警備になってから、ルハワンジャブ・ノヨンからバヤルと言う名前をもらいました。兄はその後、警察官になっていました。軍隊にいたときには、ゴンチョクロドイやミジドなどと一緒にいました。文化大革命のとき、兄はひどい目にあいました。ルハワンジャブ・ノヨンの歌手をしていたのが一つの罪、イフトクトフの婿で裕福な牧民であったことが二つめの罪、国民党の軍隊に参加していたのが三つめの罪とレットテルを貼られて糾弾されました。当時、チョイダンドルの母ツァガンも同じく糾弾されていました。

わたしはかろうじて糾弾されませんでした。「家畜を失った牧主、財産を失った金持ち」と呼ばれたものの、なんとか糾弾されずにすみました。

父は一九四九年にムトルに殺されました。ここエジネーでは徳王の軍隊をムトルたちと言うのです。また、ムトルの強盗とか、ムトルの盗賊とも言います。父はどうやって殺されたのかと言うと、ニムバルの父ゴンブスレンの家の近くで殺されたそうです。ニムバルの父はゴンブスレンで、母はツェツェグです。わたしは自分の目で見ていませんが、人の話によれば、兄バヤルはバラジャルと二人で一緒に軍隊に参加していたそうです。バラジャルもイフトクトフのもう一人の婿でした。つまり、兄とバラジャルは同じ家の婿でした。兄のいた軍隊がムトルと戦って、かなり遠いところまで追い出して、みなが疲れたからゴンブスレンの家に入って、お茶でも飲んで少し休憩しようということになりました。一人を見張り番に立たせて、ほかの人たちは家に入って一杯のお茶でも飲むようにしていました。見張りに立った人は長時間歩いてきたから疲れたのでしよう、居眠りをしてしまいました。すると、胡楊林に隠れていたムトルたちは、見張り番が眠った隙に出てきて、軍隊との戦闘が始まりました。父はバヤルとバラジャルのラクダを連れて行こうとしたとき、ムトルが密かに背後から、奪った銃で撃って殺してしまいました。当時、胡楊というのは、人の家の周辺に密集していました。ラクダに乗った人を隠してしまうほどでした。こうして父は亡くなりました。兄は軍隊に行ってしまいました。母とわたしは自分たちで生きる術を探さなければならなくなりました。

母とわたしの二人は、人の家で働いたり、ジャスの家畜（寺院の財産）を放牧したりして

いました。またユールト・バヤン（バヤンは裕福の意）の家に行つて使用されてきました。父が亡くなったとき、わたしはたったの九歳だったのですよ。ああ、どうしようもないことです、エジネーの人たちはとても親切な人たちでした。

母とわたしはバグ（行政単位）から支援を受けていました。バグ長はヌデン・メーリンと言う人でした。ほんとうにすばらしい人でした。わたしたちにお茶やお米を与えてくれました。裕福なユールトの家で仕事をしていたときにも、いろいろ助けてくれました。ユールトは、わたしたちに五十頭のヤギを与えて搾乳させ、乳のある暮らしにしてくれました。（搾乳前の）春なら、昼食にオンドを作つて与えてくれました。生活はかなり良くなりました。ユールトの家に来る前には困窮していましたが、なぜかと言うと、イフトクトフは兄の義父で、舅と姑がいたわけですよ。わたしたちがソブノールのチョンドゴールと言う宿营地にいたとき、置き去りにして彼らは移動してしまいました。移動するとき、わたしたちに十二頭のヤギを分けて残して行きました。母とわたしが二人だけでとても困っていると、ようやく兄がレンチンダワと一緒に来てくれて、わたしたちをタバン・ソムのタグシャーと言う場所に引越させてくれました。

しばらくそこで生活していると、ハンハル家がわたしたちのところに移動してきました。母とわたしはハンハルの家に労働力を提供しました。ハンハル家はわたしたちにつらい仕事をさせるばかりで、何も与えてくれませんでした。なんともケチな人たちでした。それに、ハンハルの妻はとても厳しい人でした。バラジル、オランツエツエグ、ザンドウなどわたしたち子どもたちが遊ぼうとしても、罵ったり、殴ろうとしたりして遊ばせませんでした。非常にきつい性格の人でした。母とわたしに食事を与えませんでした。けれども死んだウマの肉はくれました。母とわたしはお腹がすいてたまらなかつたので（死んだウマの肉を）食べていました。ハンハル家で使われて三年くらい経つたでしょう。

それからようやく、ユールトの家で仕事をするようになりました。ユールトはわたしたちに親切でした。余つたものは惜しみなく与えました。暑さ寒さに配慮してくれました。わたしのことを、放牧が上手で、まじめに放牧して家畜を増やしているとほめて、三歳のメスクダを褒美としてわたしにくれました。

その後、エルデニトクトフの家でも仕事をしていました。わたしはこの家のヒツジの放牧をしていました。母は衣服などを縫ったり、搾乳したり、すべての家事労働をして、その代わりに、少しの油、小麦粉、古着や、ラクダの肉など、わずかな食料を得てなんとか暮らしていました。エルデニトクトフの家で働いているとき、そこからオランゲレルに行き、そのメンバーになりました。

——あなたは学校に行きましたか？いつ文字を学びましたか？

ええ、わたしは一九五五年、入学しました。当時、オランゲレルにまだ引越していませんでした。わたしたちはゴンチヨクロドイの家と一緒に宿営していました。エルデニゲレル・ノヨンの母トソツアガンがわたしを呼びにきて学校に通わせました。この恩をわたしはいつでも忘れません、心の中でずっと感謝しています。この人たちはわたしたちに本当に親切でした。わたしたちを貧乏だと軽蔑はしませんでした。わたしの家によく来ていました。わたしもルハワンジャブ・ノヨンの家にしょっちゅう行って行っていました。血統の良い人の子孫であると言つて、わたしにはとても親切でした。

その年、わたしはリグドマー、ニヤムバル、ジャルガル、ゲンデジャムツォー、オランツエツエグ、チメドなどと一緒に学校に通いました。西北民族学校（蘭州にある、現在の西北民族大学）に行きました。オランツエツエグは一学期だけ通つて辞めてしまいました。わたしの

クラスにはわたしたち四人が女で、ほかはすべて男でした。盟長の妻のソミヤさんはエジネー出身の最初の女子学生です。その次が、リグドマー、ニヤムバルとわたしの三人です。当時、学校に通うのはとてもすばらしいことでした。

それで、一九六一年にわが校の学生を選抜して少数化するとき、わたしは学校を辞めてオラーンゲレルで会計になりました。

一九七五年に再度、国営牧場に行きました。牧場に行ったのは、わたしの夫の戸籍をオラーンゲレルに入れられなかったので、プフトウムルが尽力して牧場に夫の戸籍を入れてくれたのです。それで、わたしは夫に従ってそっちへ行ったのでした。そもそもオラーンゲレルの書記がチョイダンドルだったとき、夫の戸籍をオラーンゲレルに入れてくれると承諾してくれていました。ところが、チョイダンドルが学校に通うことになってから、代わりの人が書記になり、夫の戸籍を入れてくれなくなりました。

牧場に行って放牧もしました。生産隊で会計もしました。そこから九泉の蛍石鉱山に行って一年半ほど採掘の仕事をしました。それから、また牧民になって放牧をしました。十年あまり牧民として放牧していました。当時、ほぼ毎年、良い牧民、優れた牧民と表彰されています。恩ある国民、共産党は光輝く。褒美に褒賞、たくさんいただきました。牧場にいたときもさまざまな仕事をしていました。人民代表になっていましたし、衛生委員になりましたし、婦人委員会にも関係していました。当時、婦人委員会はバラマさんが幹部でした。わたしは基礎的な仕事をこなしていて、精力的に仕事をするとわたしを褒賞してくれたものです。わたしは共産党と政府の恩をいつでも忘れません。

幼いころは本当に苦しかったものです。文化大革命のときもかなり苦しみました。けれども、人柄の良い人たちに出会って助けてもらいました。文化大革命のとき、わたしの兄はひどく殴られました。そして一九八三年に亡くなりました。母は一九六四年に病気で亡くなりました。当時、六十を過ぎていたでしょう。母は父がなくなってから髪をそり、尼僧になっていました。

義理の兄の娘はダリジャブ（姉はこの子を産んで死んだ）と言い、チムバイと一緒に暮らしていました。ある日、チムバイが突然いなくなりました。それで、ダリジャブは裁判所で働いていたオドンおじさんと暮らすことになり、その後、二人で内モンゴル東部に行きました。オドンおじさんが亡くなつてから、ダリジャブはこちらに戻つて来て、現在、盟中心地で暮らしています。オドンおじさんとのあいだに二人の子どもがいます。ダリジャブはこの二人にオドンは盟中心地での仕事を見つけてあげて、その二人の子どもを頼って盟中心地で暮らしているとのことです。ダリジャブは、下の子を連れて来て、わたしに挨拶に来たことがありました。姉の子どもたちはそういう状態です。

兄の家族には後添えがいます。最初に兄と結婚したイフトクトフの娘ツェレンツォーはともおとなしい人でした。ツェレンツォーの両親は、兄が軍隊に参加することを嫌っていたにちがいません。母とわたし二人を見捨てて、別のところに引っ越してしまいました。その後、ツェレンツォーは兄と一緒に暮らさなくなりました。ツェレンツォーはその後、プントウンさんと暮らした人と生活していました。その人はツェレンツォーと暮らしたあと、ツェレンツォーさんと離婚しないまま、プントウンさんと一緒に生活することになったのですよ。ツェレンツォーをただ打ち捨てて行ってしまいました。

兄は結局、ベルドルマーと暮らすことになりました。さつき言った、後添えです。この嫁とのあいだに二人の子どもができました。けれども、二人とも亡くなりました。一人は流産でした。ラクダに乗っているとき、ラクダから落ちて、流産しました。それで子どもができませんでした。

現在、わたしたち年寄り三人を誰が世話するかと言うことについて家族会議を開いて、わたしの次男と長女の二人が、老いた兄嫁（ベルドルマー）を養う責任を負い、わたしたち二人をほかの子どもたちが世話することになりました。家族会議で年寄り三人の世話について解決しました。

——子どもは何人いらつしやいますか？

全部で七人の子どもですよ。長男バートルと次男エルデニダライはバヤンボグドで牧民になつています。弟のエルヘムビリグ（三男）は日本に行つて来て、現在、盟中心地でコンピュータ関係の仕事をしています。長女のオラントヤーはバヤンボグドの牧民です。弟のガンバトは軍隊に参加し、戻つて来て、今は姉オラントヤーのそばにいます。軍隊には四年間、行きました。ガンバトは一番下の息子です。そのほかにスチンとタナーと言う二人の娘がいます。こうして七人です。娘のスチンは西北民族大学を卒業しましたが、まだ就職できず、モンゴル病院で非常勤をしています。スチンは辰年で今年二十八歳です。彼女もコンピュータの専門を学びました。娘のタナーはシリシモンゴル畜牧専門学校を卒業して、現在、ソムで統計の仕事をしています。仕事を三年になりました。若いころ、つらい生活をしていましたが、今は子どもたちも大人になりました。共産党のおかげで、幸せに暮らしています。若いころはたいへんでしたよ。

わたしは初め、一九六三年に結婚しました。家に婿をとつたのでした。彼の名前はニマドルジと言いました。彼は武装部に勤めていました。結婚して一年あまりたつても子どもができなかつたので別れました。その後、運転手をしていた楊万青と言う人と再婚しました。しかし、この人はわたしに他人と話しをさせません。もし男性と話しをしたらすぐに殴つたり、罵つたりします。本当に一緒に暮らすことはできません。それで、また別れました。

一九七五年に現在の夫であるジグミドと結婚しました。彼の中国語名は徐国峰と言います。内モンゴル東部の興安盟の人です。もともと漢族出自です。わたしたちはフーダダゴル姉さんの紹介で知り合いました。フーダダゴル姉は彼の親戚にあたります。

ジグミドの生まれ育つた場所は興安盟のホルチン右翼中旗（旧トシエート旗）です。徐の名字と言うのは、かなり以前のこと、彼の曾祖父が九歳のころ、山東省を出てトシエート旗に移つて来て、寺の属民となり、雇われて糊口をしのいでいたそうです。そうして成人してモンゴル人の嫁をもらい、かなり裕福な生活をするようになりました。当時、日本人が中国の東北地帯を占領し、そこにいた漢族を故地に戻しました。ジグミドの曾祖父は寺でよく働いたので、とある優しいモンゴル人が彼にウードレフ（上昇するという意）と言うモンゴル名を与えたそうです。モンゴル族になつたおかげで山東省に戻されずにトシエート旗に残りました。モンゴル人の嫁から生まれた子がジグミドの祖父です。徐バトと言う名前です。徐バトには四人の息子がいました。ハラバル、アルスラン、センゲニムブ、ドルジと言う四人の息子で、すべて徐の名字です。ジグミドの父はハラバルと言います。おじさんたちの中で徐アルスランは文化大革命のときに、捕まり、牢獄の中で亡くなりました。ほかの二人のおじさんはホルチンにいます。吉林省にいます。旧ザサグ旗は現在、吉林省に所属しますから。

ジグミドは一九七五年五月、エジネーに来て、当年九月二十二日に結婚して、二十九日に牧場に入りました。鉢山に行つて一年半働いて、戻つて来て、ツアガンモドニビトウ（白い木の茂みという意味の地名）と言うところに居をかまえて、家畜を放牧しました。夏の宿営地はナイリントーライ（宴会の胡楊という意味の地名）と言うすばらしい場所でした。一九九三年に旗中心地にやつて来て、息子エルヘムビリグの家に住んでいます。現在もここで幸せに暮らしています。

共産党と政府に感謝しています。わたしを学校に通わせてくれたエルデニゲレルの母親であるトソツアガンさんにも感謝しています。良き夫を紹介してくれたフーダダゴル姉さんにも感謝しています。わたしの長男が書記をしているのはエジネー旗の人民にも感謝しています。去年、バヤンボグド・ソムからわたしに三百元が支給されました。これにも感謝しています。今では、病気になった場合、治療費が支給されます。入院したとき、政府からお見舞いにも来てくれました。六十歳以上の老人には生活保障が用意されていると聞いています。これとても良い話です。わたしは文字が大好きで、学校のことをいつも忘れません。ですから、最近、モンゴル語モンゴル文字をきちんと使用することを政府が指導しているのを知っていて、うれしく思います。

——乳製品について、話していただけますでしょうか？

ヤギの乳、ウシの乳が主な乳です。乳を火にかけて泡立たせます。泡立たてられた乳の表面にはウルムができます。ウルムは上手に四角形に乾かします。ウルムを取ってから、温かい乳にスターターを入れてヨーグルトにします。ヨーグルトに乳をまぜて、分離させ、脂肪分を取ります。脂肪分を取ったあとの乳を煮て、ピシラグ（チーズ類）を作ります。シユールメグ（チーズ類）を作ります。アーロール（チーズ類）を作ります。

わたしの故郷の青海省でどのように作っていたかはよく知りません。青海省にはいまやきようだい親戚はたくさんいないでしょう。わたしの父親は「山の五つ峰」と言われたそうです。多分、きようだい五人いたからではないかと思っています。そのことについて両親から聞いたことがありません。母親はきようだい三人だったそうです。一人の姉と一人の弟がいたそうです。背の高い弟は当時、カザフ族に殺されたそうです。とても乱暴に殺されたそうです。手足を切り取られ、生きたまま、そうして殺されたそうです。姉は数年前まで元気でしたが、最近、消息がなくなりました。ふるさとに一度行ってみたいと思っています。

二〇〇五年五月、ダライフブ鎮のチャルマーさん宅で聞き取りをおこなった。翌日の午前十時に再度、聞き取りをした。

ドルガルツオーさん、白い辰の年、一九二八年生まれ。二〇〇四年聞き取りの時点で七十六歳。エジネー旗のジャルガラント・ソムのナランボラグ・ガツアー中心に生まれた人。

——幼いころの生活について話してくださいませんか？

幼いころと言うのは非常に厳しい時代でしたよ。わたしの母親はハルハ人でした。バルダンザサグ旗の人だったそうです。ザサリ活仏もまたバルダンザサグ旗の人だったそうです。父母からの子どもは兄とわたしの二人です。兄の名前はゴンボといいます。兄はソブノールやサイハントーライあたりで暮らしていましたが、六十歳で亡くなりました。わたしは幼いころに養女として出されました。養父の名前はダンザンで、もう一人の養女の姉がいて、三人で一緒に生活していました。養父には二百頭余りのヒツジ、ヤギと、二十頭ほどのラクダがありました。

夏になると、数人の奥さんたちがヤギを搾乳します。搾乳量は豊富でした。一夏にシュールメグ（チーズ類）を何袋も集めることができました。酒の道具（鉄製容器）に脂肪分を保存していました。冬も夏と同様に乳製品を食べていました。また、ツアガントス（発酵バター類）を集めて、屠殺したヒツジのグゼー（反芻胃）に入れて保存します。ヤギの皮製のトロム（袋）にも乳脂肪を注いで保存します。秋に、ヤギ、去勢ヤギを屠るとき、皮を裂かないで皮袋トロムを作ります。破らないで作った皮袋トロムをなめしてきれいにしておき、夏になるとツアガントスを注ぎ入れます。トロムにいった脂肪分は時間が経っても質が変わりません。それで、次の夏に再び新しい乳製品を食べるまで、冬、春にトロムに入れた脂肪分を食べます。グゼー（反芻胃）やトロム（皮袋）に入れた乳脂肪は普通、保存しておき、お正月のときに二つに分けます。半分は正月のときに来客にご馳走します。半分を再び保存して、春の厳しい時期に食べます。当時は一日中、食事はすべて乳製品でしたよ。朝は火にかけて泡立てさせた乳のウルムやシュールメグを混ぜて食べてから放牧に行きます。冬には、シュールメグを懐に持って出て野外で食べます。昼間、家には戻りません。一日、シュールメグやビシラグを口に含んで溶かしていれば、空腹を感じないものですよ。

一般に、昼には穀類入りのオンドを飲みます。乳を飲みます。アイラグ（発酵乳）を飲みます。夜になると、ヤギを搾乳し、乳をあたたためて泡立ててからエーデム（ヨーグルト類）を飲みます。冬の夜には肉汁の食事を食べることもあります。貧乏な家ではほとんど肉を食べることはありません。夏は、フェルトを作るとき、一頭の家畜を屠ってみなで肉汁を飲みます（肉を食べます）。それをフェルトの宴会と言います。冬になれば、正月や読経、ジャス（寺院の家畜群）を作るといった際に、家畜を屠って肉汁を飲みます。それ以外はたいい乳製品です。冬の正月から厳しい春にかけての時期に食べる肉は、秋から冬への変わり目、氷が解けたり、凍ったりするころ、屠ってグゼーに入れて物置台の上に置いて凍らせたものです。その際、犬や鳥に食べられないように置きます。人によってはグゼーを地面に埋めます。家の影になるころや、物置台の下に穴を掘って埋めます。

乳製品はいろいろな方法で食べることができます。乳やチャガー（発酵乳の一種）はいろいろな方法で飲むことができます。エーデムを飲むと言うのは、温かい乳にアイラグ（発酵乳）をいれて飲むことです。ホールモグを飲むと言うのは、冷たい乳にアイラグ（発酵乳）を混ぜて飲むことです。ツイーデムを飲むと言うのは、アイラグ（発酵乳）に水を入れて薄めて飲むことです。また、ホリマグと言うのはタラグ（ヨーグルト）と乳を混ぜて飲むものです。一般に、年寄りの話では「食で良いのはホリマグ、衣服で良いのは絹」といいます。またエーズギー（乳製品の一種、醍醐といわれている）を煮て食べると言うのは、とてもおいしい料理です。エーズギーを煮るときには技能が必要です。乳を加熱しながら泡立てるときに、上からアイラ

グ（発酵乳）を少しずつ入れて、出てくるシャルオス（乳しよう）をどんどん掬い取って、それから除去したシャルオスを再び入れて煮ると、すばらしいエーズギーになります。エーズギーは空腹をよく抑えます。エーズギーを食べて出かけるとお腹がすきません。たっぷり栄養があります。

また、乳製品としてアルヒ（蒸留酒）も蒸留します。酒を蒸留するのもまた手間がかかります。ドゥージンと言う容器があります。冷却用の鍋に水を入れて何度も水を交換しなければなりません。酒の味が薄まらないように何度も味見をします。蒸留酒が薄いと水のように何の味もせず、おいしくありません。

さあ、食の一つとして、またチュルゲルを採って食べます。これには二種類の食べ方があります。一つは鍋に入れて煎って穀類として食べる方法です。もう一つは粉にしてザンバーのように食べる方法です。粉にするときは、あらかじめ採集したチュルゲルを水に浸して煮て、再び乾かして煎り、それを粉にします。油っぽい、茶色の粉ができます。チュルゲルは砂地に生えます。もともとゴロナイにチュルゲルがたくさん生えていました。また、シャル・フーレグの粉も作って食べていました。シャル・フーレグをヘレスとも言います。アラシヤ右旗ではシャル・フーレグの粉でザンバーを捏ねて食べることが多かったそうです。シャル・フーレグの粉にツァアガントスを入れて、酸乳を混ぜて食べるとおいしかったのです。けれども、裸麦で作るザンバーには及びませんよ。ほかにまた、ホシ・ハムホグの種も洗って煮て食べます。これも洗って乾かして煎って粉にしてザンバーにして食べます。ジグドも集めて食べます。概して、野生の植物に頼っても生きていけるほどでした。

——家畜が食べる草について話してくださいませんか？

エジネーにはラクダの食べる草がたくさんありましたよ。有名なトーライ（胡楊）、ソハイ（タマリスク）、ザグ（サクサウル）をはじめとして、モリン・シヤラルジ（ヨモギの一種）、ホニン・シヤラルジ（ヨモギの一種）、シヤグシグ、ホルス（葦）などがありました。胡楊やトネリコの密林には人の歩ける道がありませんでした。また、ウルグスト・ハムホグとオスン・ハムホグ（ともにアカザ類）と言うラクダの大好きな草がありました。それから、キヤグ（ハヒヤグ）、ヘレス、ローリという葉の大きい草、ポトゴン・タバグ、ホシ・ハムホグなどの草はとでもたくさんありました。今は水が不足し、草は根こそぎなくなりつつあります。当時、ボルガス（ヤナギ類）もたくさんあったのです。ボルガスの木でゲルの部品を満たします。壁を作り、屋根棒を作ります。川の上流におもむいて、ボルガスの木を切って、川に流すと流れてきて、下流に流れて来たら受け取って、ゲルの木造部品を使っていた、と老人たちは話していました。

わたしは十七歳でブツァアガン（ブフは相撲取りの意）と言う人と結婚しました。トルゴード人でした。彼は名前どおり力士でした。ボルガスの木を根ごと引き抜く、と言われていました。エジネー旗の名前を三十年間とどろかせていた力士でした。彼はバイルトブシンの養子でしたよ。ドゥンドゥブ・タイジはボラグ・ハトン（ハトンは妃の意）の養子でした。ボラグ・ハトンはバイルトブシンの娘ですから、彼はボラグ・ハトンの弟になります。わたしはブツァアガンと寅年に離婚しました。わたしと離婚したあと、彼はツェレンバルマーと再婚して、つい最近、亡くなったそうです。ブツァアガンの遺産を継ぐのはツァアガンバートルです。現在、甘肅省の肅北県に勤めているそうです。とても教養のある人になったとか。

——あなたは骨接ぎをされるとお聞きしましたが、いつ、誰から習ったのですか？

ええ、骨接ぎと言うか、怪我をした人たちが遠近各地から来るので、さすって拭いて良く

してあげています。これをどこから習ったとどう言えばいいでしょうか。もっぱら家畜の骨や関節を見ているうちに、その位置や特徴、つながりなどがわかるようになりました。大事なものは注意して観察することでしょう。

子ヤギや子ヒツジが足を折る、脱臼した家畜が逆子になる、人の妊娠の不正常、肩こり、手足の骨折、捻挫、脱臼、アキレス腱切断、肉離れなどいろいろな怪我を十指で感じて触っているのと治す方法がわかってきます。最初のころは、触って異常であることはわかっても、治す方法はわからずに困っていました。今では、見ればわかるようになりました。十指の力と感覚がとても大事です。さすったり、引つ張ったり、もむように押ししたり、ひっぱったり、軽くはいたり、軽くたたいたり、あるいはもんだりするなどの手で治療する方法のほかに、治療の背後にある保養もとにかく大事です。保養が悪いと再発します。

保養には、薬を飲むことと包帯を交換することの二つが相互に関連します。エジネーには、いろいろな薬用植物があったのですよ。むかしは現在と違って、薬も病院もなく、医者がいませんでしたからね。わたしたちは自分自身の経験によって、植物の効能を知り、摘み取り、調合し、薬として利用していました。留意すればいろいろあるものですよ。ゼールゲネ（麻黄）、チャツアルガナ（沙棘）、シヤル・モドン・ドルス、ソハイなどすべて利用していました。たとえば、ソハイの葉で皮膚病を治していました。皮膚が痒くなる病気には煮て飲みます。また汁を塗ります。また、ソハイを用いて、体内に水がたまる、肩が凝る、肩甲骨に沿って痛くなる、筋肉痛などの際にお灸をします。また、マルガイン・ザラー・ウブスと言う植物がありました。この植物をわたしは自分でたくさん刈って集めていました。洗って干して集めます。この草の薬には、止血や傷口の治療を早める効果があります。たとえば、落馬して怪我をする、犬に咬まれる、転んで怪我をするなど怪我をしたとき、乾燥させたこの植物を粉末にして傷口にかけ、包んでおくと、止血して皮膚がもとどおりになります。ザラー・オロンと言う植物もあります。花が咲いているときに採って干しておきます。転んで怪我をしたり、骨が折れたりしたのを治します。皮膚と骨に役立つ薬です。

わたしはもともと薬などをあまり使いません。今や、薬用植物がなくなっているのですが、もっぱら両手の感覚と力で治しています。年をとって力も弱くなっていますよ！

ええ、こんなことを話して、あなたたちに役に立つのか立たないのかわかりません。年寄りの身というのは不用品になっています。けれども、近隣の人たちが骨や関節などがどうしたこうしたと、わたしのところに来るので、さすったり、もんだりしてあげると彼らは「治った」と言っただけで帰って行きます。気持ちの問題なのかもしれませんが、本当に治っているようです。モンゴルの諺に「気から来た病は信心で治る」と言いますでしょう。

二〇〇三年九月二日にドライブブ鎮のドルガルツォーさんのお宅で聞き取りをおこない、翌日に再度聞き取りした。残念なことに、二〇〇五年、エジネーを再訪したとき、ドルガルツォーさんはすでに亡くなっていた。二〇〇四年七月十八日永眠。合掌。

ドルマジヤブさんは卯年生まれで、二〇〇五年現在七十九歳。一九二七年に生まれた。エジネー旗のソブノールのバヤンボラグの人。そもそもハルハ出身とのこと。

——あなたの幼いころ、母父、故郷の状況をお話しいただけますか？

わたしの両親はハルハ人だそうです。ハルハのバルダンザサグ旗のトーソン山の麓に生まれたそうです。わたしは幼いころに養子に出されたので、実の父母のことはまったくわかりません。わたしの養父の名前はゴンチョクジャブと言い、養母の名前はスレンと言いました。わたしはアラシャー右旗で七、八歳ごろから各家を転々として、十三歳のときにエジネーに来ました。わたしがアラシャーにいたとき、養父が亡くなり、養母はわたしを置いてエジネーに行きました。わたしは結局、あとからあたりをつけて追いかけてエジネーに来たのですよ。

養母がわたしを放って行ってしまってから、わたしはザガーライ・シャラブと言う人に雇われて、その家のヤギ、ヒツジとラクダを放牧していました。あるとき、ザガーライ・シャラブがゴンボ寺へ出かけ、戻って来るときにわたしは二頭のラクダをなくしていました。わたしが家に近づくと、わたしのことを罵る声が聞こえました。わたしをきつと死ぬほど殴るだろうと思って、怖いので黙って逃げようと思いました。そして、一頭のメスラクダに敷物を乗せて、ソブノールにやって来たのです。そして人びとが、シャラブの嫁に「あんな小さい子が寒くて死んだらどうする。どこへ行ったのだろう」とわたしのことをかわいそうに思っ話してみると、彼女の返事は「あの子が死ぬなら死ぬがいい。わたしは自分のラクダさえ見つけ出せばよい」と答えたそうです。

それで、わたしはソブノールのナランボラグのジーチェーと言う盲目の老人の家で使用人として雇われ、一年以上ほとんど二年になったでしょう。その家には二百頭あまりのヤギ、ヒツジと一頭のロバがいました。ラクダやウシはいませんでした。その家にはダンバとトルジンと言う二人の娘がいました。長女のダンバは性格が悪く、悪い人でした。盲目の父は空腹で、しらみだらけになって死にました。たとえば、ダンバが父親に乳を少しあげるとき、父親が「もうちよつと欲しい！」と請うと、ダンバは「そんな乳がどこにある！あなたの乳ではない」と罵って与えませんでした。そんなわけで飢えて死んだのです。次女のトルジンは性格の良い人でした。

さらに、ソブノールのフフテへと言うところのブドゥーン・ゴンゴルと言う人の家で二年間雇われて、ヒツジやラクダを放牧していました。その家には四百頭あまりのヤギ、ヒツジ、三十頭あまりのラクダ、四十頭あまりのウシがいました。わたしは主にラクダとヤギ、ヒツジを放牧していました。

それから、さらにソブノールのオラインブレグでチョルモンおじさんと言う家に雇われました。およそ一年あまり住み込み、使用人となりました。チョルモンおじさんの養子はアルタンツエツエグの義理の兄ガビヤトですよ。チョルモンおじさんの家には二百頭あまりのヤギ、ヒツジがいて、ラクダはいませんでした。

そこから、ソブノールのブドゥーントーライに行き、トブシンバヤル（ポンチョクドルジ）・ノヨン（ノヨンは貴族の意）のボラグ・ハトンに二年近く雇われました。彼らのところには、ジグジ、バヤルトブシンの子ロブサンドルジとわたしの三人が雇われていました。わたしたちは交代で、ヒツジやラクダの放牧をしました。井戸でヒツジに水をやりました。ボラグハトンは三百頭あまりヤギ、ヒツジ、二十〜三十頭のウシ、二十〜三十頭のラクダ、二十頭くらいのウマをもっていました。ブドゥーントーライのそばに井戸がありました。その井戸から水を汲み、家畜に水をやるのです。あるとき、ジグジいさんが井戸に落ちて、わたしたちはなんとか助け出しました。そのとき、ボラグ・ハトンが足の指に怪我をして、ほとんど歩けなく

なっていました。

ボラグ・ハトンには子どもがいませんでした。ドゥンドウブ・タイジ（エルデニゲレルの実弟）を養子にもらっていました。また蘭州から一人のチベット人を養女にしていました。その子はボラグ・ハトンのゲルに住んでいました。わたしたち三人の使用人には空っぽのぼろいゲルが建ててありました。黒くなったゲルでした。冬の寒い夜に、わたしたち三人は寒くてたまらないので、夜通し交代して火を焚いていました。そうでなければ寒くて死ぬでしょう。当時は衣服も満足にありませんでした。人からもらった古着を着ていました。それは少しも温かくはありませんでした。夜のかけ布団は厚くはありませんでした。下に敷く布団も薄いものでした。夜に燃料がなくなると、三人で柴を集めてきます。ゲルが薄くて悪いうえに、わたしたちの服もぼろぼろで暖かくないものですから、夜は寒くてたまりませんでした。ボラグ・ハトンのゲルは立派なものでした。チベット人の娘はそのゲルで寝起きします。もともと、最初の妻はアジャ・ハトンと言いました。彼女も子どもがなかったそうです。それで結局ボラグ・ハトンをもらいましたが、また子どもができませんでした。それで他人から養子をもらっていたのでした。

それから、わたしはガワーと言う人に雇われることになりました。ガワーの家には名目は養女として行きました。ガワーの妻の名はダリマーと言います。何人かの子どもが生まれたけれども、みな死んでしまい、子どもがとどまらないので、わたしを養子と言う名目にしたのです。わたしがガワーの家に行ってから、五人の子どもができたのです。一人息子が生まれましたが死ぬのを恐れて、生まれてすぐに養子に出しました。バートルと言う名前でした。のちにゴルジン・バートルと言うあだ名になりました。長男でした。わたしが養子になって行ったとき、ガワーにはまだ子どもはいませんでした。バートルの前には何度も子どもが生まれては死んでしまったのだそうです。そして、バートルは大人になってから、文化大革命のときに怖くて首を吊りました。

わたしが養子に行くから、オヨンビリグ（娘で、現在サイハントーライにいる）、ビヤムバ（現在アラシャー盟中心にいる）、ソミヤ（もうアラシャー盟中心にいないだろう、はっきりわからない）、アディヤ（養子に出した）など四人の子どもがいました。ツアガンとザンダンミダグの二人には子どもがなかったのです。アディヤを生後二ヶ月のころに養子としてもらって行きました。ダブシルトは末っ子です。

ガワー家は、川の上流のサイハントーライのモンクトにいました。二百頭あまりのヤギ、ヒツジと二十頭あまりのラクダと、七、八頭のウシと、三頭のウマと、一頭のロバがいました。

わたしはガワーの家におよそ十年雇われていました。この間、ガワー兄とわたしのあいだに一人の息子が生まれて死にました。のちに、わがアムガランが生まれました。アムガランの父はガワー兄ですよ。そして、わたしに一つのゲルを建ててくれました。家畜も分け与えてくれました。二十五頭のヤギ、ヒツジと、雌ラクダと去勢雄ラクダの二頭をくれました。ただし、一頭の去勢雄ラクダは青海省ツアイダムで売ってお金をくれたのです。モホルツアガンと言う人が雇われて、ラクダを追って西のツアイダムに行つて、いなくなつたそうです。当時、ラクダを西へしよっちゅう追つて行きました。今考えてみると、軍隊で使つていたのでしょうか。当時、自動車が使つていたので、ラクダの役割は大きかったです。交通にもよく使つていましたし、軍隊でも使つていたのではないのでしょうか。

もらった雌ラクダからのちに三、四頭まで繁殖しました。ガワー兄の長女オヨンビリグとわがアムガランと一緒に育ちました。二人をわたしは背負つたり、抱えたり、泣かしたり、あやしたりして育てました。彼ら二人は同じ父親の子どもですよ。わがアムガランの今の姿は父親にそっくりですよ！

そしてわたしはガワ一の建ててくれたゲルで暮らしていました。その後、トウントウグルがやって来て一緒に暮らしました。彼には家も家畜も何もありませんでした。わたしとトウントウグルは結婚式もしませんでした。ただただ一緒に暮らして家族になりました。トウントウグルの父親はジルターヨンドンと言い、母親はサムボーと言いました。二人ともハルハ人でした。父親はハルハに残って、母親が数人の子どもを連れてエジネーに来たそうです。トウントウグルは酉年で、一九二一年に生まれました。七十三歳で亡くなりました。トウントウグルが六十一歳のときに生まれた子どもが、わがゲレルで、現在、四十九歳です（二〇〇五年現在）。トウントウグルにはきょうだいは何人かいました。兄はバトオチルでした。その次がトウントウグルで、下がダシニヤムでした。その次はデレグと言う妹がいました。デレグの息子はブルフバートルで、現在、家系を継いでいます。ほかにオヨンゲレルと言う娘がいます。健在です。トウントウグルとわたしのあいだに五人子どもが生まれました。わたしは孤児で子どものころに他人の家を回って苦労しました。夫のトウントウグルと一緒にいる前にも、父のない子を何人か産み、死なせてしまいました。当時、自分が生きていくので精一杯で、他人の家に雇われている身で、子どもをどうやって育てると言うのでしょうか。

健在なのは最初に産んだアムガランで、彼は子年生まれで、現在ハラホトにいます。次男は永紅で、卯年生まれで、わたしがちょうど二十五歳のときに生まれて、現在、ソブノールで牧民になっています。妻は亡くなりました。その次がゲレルで、酉年で、父が六十一歳のときに生まれて、現在、バヤンボラグにいます。次がアルタンバガナ（三男）で彼も子年、兄アムガランが十三歳のときに生まれ、現在ジグドツアガン・ソムでラクダを放牧しています。その次はホスチメグ（次女）です。この末っ子は申年生まれで、現在三十八歳です。エジネー旗に勤めています。

一九五八年に人民公社が成立するとき、ガワ一兄のくれた二十五頭のヤギ、ヒツジが百頭あまりになり、一頭のラクダから三、四頭になっていましたが、それらをすべて人民公社に提供しました。その後、家畜を各家庭に再配分するとき、人の数によって分けられました。わたしたちには百八十頭のヤギ、ヒツジと十頭のラクダをくれましたが、ヤギ、ヒツジはすでに二百頭になっています。トウントウグルは一九九四年に七十三歳で亡くなりました。子どもたちも成人し、自分たちの家族を作って出てゆき、ソブノールにわたしだけが残りました。二〇〇〇年に、わたしは七十三歳でエジネー旗中心地に来ました。ヤギ、ヒツジから、息子アルタンバガナに六十一頭を与えて、残りをすべて長女ゲレルに与えて、こちらへ来ました。ゲレルの夫はバヤンボラグ生産隊の隊長で、名前はジャルガルと言います。彼らは今、ソブノールのわたしの住んでいたところで放牧しています。

鉄軸の家畜（生産請負制に移行し家畜を配分されたときに所有権が移転した家畜）の代金を返さないと、わたしが死んだあと、子どもたちがこのことで誰が払うかと仲が悪くなる恐れがあるので、わたしは数頭のラクダに換えて全部返しました。いま、わたしには借金などありません。いまはつらいことなどありません。幸せに暮らしています。幼いころはつらかったけれども、いまは幸せです。

——幼いころ、水はどの程度豊富でしたか？

ええ、水は豊富でしたよ！川には水が満杯でした。みな自分の家の前に井戸を掘って、水を利用していました。土の下には水が流れていました。疲れるほど掘りはしませんでした。今はもう掘ってばかりいます。水が出ません。とても乾燥してしまっただけです。胡楊の木が密生していると言うのは、たとえばラクダに乗った人が宿营地から少し向こうへ入っただけで

もう見えないほどでした。わたしたちがブドゥーントローライ（太い胡楊と言う地名）にいたとき、その太い胡楊の木をまつっていました。その木は三人が手をつないでも抱くことができないうほど太い木でした。その木の下にお墓があり、その中に仏像がありました。わたしたちは、ろうそくをもってまつりました。トブシンバイル（ボンチヨクドルジ）・ノヨンのときにまつていました。文化大革命によって、こうした宗教習慣はなくなつたのですよ。文化大革命と言うのはたいへんでしたよ。ガワー兄もひどく殴られました。わたしの夫トウントウグルも殴られました。わたしはそれほど糾弾されませんでした。わたしたちは殴られ、耕地に来て、数年間、耕作をしました。サイハントローライで大いに耕作しましたよ。わたしたちは、「タグ（圃場）を耕す」と表現します。わたしたちは耕地に、生産隊に住み、毎日、耕作に従事します。当時、知識分子と呼ばれる六十一人の漢族の若者が来ていました。気に食わないことがあると、彼らはわたしたちを殴ります。わたしたちは、黒幫と関連があると言う理由で殴られるだろうと、とても怖がっていました。それで、なるべく彼らに近づかないようにしました。

当時、水も雨も豊富でしたから、耕地の収穫は上々でした。わたしたちは高粱、緑豆、裸麦などを植えていました。隊で耕作に従事すると、公社の時代ですから、隊から肉を各家庭に分けてくれます。わたしたちは黒幫と関連があるので、良い肉はもらえませんでした。いつもハンチャル（胴体部分の薄い肉）や硬い櫛、骨など、肉つきの悪い、骨の大きい部分が配分されます。小麦粉にも、白粉、黒粉の二種類がありました。白いほうはまったく配分されず、黒幫だからと黒いほうを配分されました。わたしたちは意見を言うこともできず、何も言わずに配分されたものをもらって食べます。文化大革命はたいへんでした。わたしたちは当時、ウスン・ウブスを摘み、熱湯で洗い、味をつけて食べていました。

わたしは最初、バヤンボグドにいましたが、解放後、ソブノールに来ました。バヤンボグドは水も草も不足なく、とてもすばらしいところでした。今では水も雨もなく、旱魃でたいへんですよ。息子アルタンバガナに対して移民村に家を与えろと言う話でしたが、今までもらっていません。家畜をどのように放牧するかかわからず、みな困っています。嫁（アルタンバガナの妻）はムングン（モンゴル語で銀という意味）と言います。わたしの家には二つのアルタンバガナ（モンゴル語で金の柱という意味）があるので、ホスチメグの夫の名前も、アルタンバガナです。この婿は働いています。道路の仕事です。息子のアルタンバガナは牧民です。

二〇〇五年五月五日に初めて聞き取りをおこない、翌日、再度確認した。

エー・ボル母は午年、一九三〇年にエジネー旗ダライフブ鎮の西側、モホル湖岸に生まれたと言  
う。エー・ボル母はエジネー旗ではよく知られ、尊敬され、信頼される人だった。一九四八年、  
当時のエジネー旗のノヨン・ルハワンジャブの長男エルデニゲレルと結婚し、エジネー旗の貴族  
の嫁になった。その日からエジネー旗の人びとのあいだで知られるようになり、徐々に信頼され  
るようになった。そして、エジネー旗の第七、第八期の政協常務委員、アラシャー盟の第一、第  
二、第三回の政協常務委員になった。

——幼いころの環境や生活について話していただけですか？

ええ、わたしの両親はホボクサイルのトルゴードから来たそうです。父の名前はドブチン  
で、母の名前はトスナーと言います。母からわたしたち十二人のきょうだいが生まれたそうで  
す。そのうち四人を他家に養子に出し、また四人が亡くなり、わたしたち四人が両親のもとで  
育ちました。父が寅年生まれで、シャグダル姉も寅年の生まれで、父の二十五歳のときに姉が  
生まれたそうです。母は午年で、わたしは母がちょうど二十五歳のときに生まれたのです。父  
方の祖父の名前はハルタルドンドグと言う人でした。わたしは詳しく知りません。父方の祖母  
はモントゴルと言う人でした。わたしたちが物心ついてから、亡くなりました。

祖母の母は長生きでした。わたしが物心ついたときにホルホイと言う、盲目のおばあさん  
がいました。わたしの姉が手伝って出たり入ったりしていました。両親は父方の祖父母のそば  
にいました。思えば、母が嫁として父の家に来たのでしょう。一つのゲルと一緒に生活してい  
たものです。

母方の祖父はゴドブと言う人で、母方の祖母はトーライと言う人でした。父は腕のよい大  
工でした。近隣で有名でした。小ささまざまな容器類を作っていました。人の注文によって作  
ります。注文がなくても作ります。容器を作ってあげる代わりに、子ヤギや子ヒツジをもらっ  
ていました。新婚家庭にたくさんのお金を贈るときはヤギやヒツジをもらうこともありまし  
た。またゲルの木製品（屋根、壁、天窓）も少々作っていました。父は仕事をよくこなす人です  
た。母はもっぱら放牧します。搾乳をし、子どもの世話をし、縫い物をします。わたしの母は  
搾乳が上手でした。わたしが小さいころ、わが家には五、六十頭のヤギ、ヒツジ、三、四頭の  
ラクダ、三、四頭のウマ、二頭のロバがいて、生活はまあまあ家庭でした。

母からわたしたちは十二人のきょうだいが生れましたけれども、八人が生きていました。  
一番上の姉はシャグダルと言い、健在です。二番目はザンダンと言う名前です、辰年生まれで、  
わたしの兄でした。もう亡くなりました。三番目はわたしです。四番目はバヤスガランと言  
います。わたしのすぐ下の妹で、健在です。五番目は、アラブジルと言う名前の弟で、亡くなり  
ました。六番目はソノムと言い、わたしの妹で、子年うまれです。健在です。七番目はモホル  
ボルと言う名前です、妹で、彼女も健在です。八番目は、わたしの一番下の妹でダリマーと言  
います。健在です。アラブジル、ソノム、モホルボル、ダリマーはそれぞれ別の家の養子になり  
ました。それぞれ別々に育ちました。シャグダル姉と、ザンダン兄と、わたしとバヤスガラン  
の四人が自分の家で育ちました。けれども、今は健在なきようだったの間で互いに行き来し  
ています。

シャグダル姉とわたしの二人は二度一緒にいました。小さいころから一緒に育ち、両親の  
もとに長くとどまり、二十五歳まで家にいたので、わたしたちの関係はとても親密だったので  
はないでしょうか。よく思い出しました。わたしが十八歳で結婚するとき、シャグダル姉はま  
だ家にいました。幼くして嫁いだからでしょうか、しばしば思い出しては泣いたものです。

わたしはいつも姉につきしたがって乳しぼりや縫い物を習っていました。裁縫や皮なめし  
など家事は小さいころから習いました。小さい頃は草原がすばらしかったので家畜を放牧する

のに今のようによく苦労しませんでした。水は豊富で、冬季は、川には一面の水が張って、それを割って持って帰り、暖めて溶かして飲み水にしていました。故郷には胡楊、ソハイ、ヒヤグ、ホロン・ボヤー、ウムヒー・ウブスなどいろいろな草木が生えていました。家畜はホロン・ボヤーを夏は食べないで、冬に食べます。ウムヒー・ウブスは乾燥したところに生えます。それを家畜は食べません。けれどもいまは食べています。草が劣化したせいでろうと思いません。

わたしの幼いころは、湖の水も豊富でした。ナリーンプル川の上流に、ダウスト湖、ガシヨーン湖、バガ湖と言う大きな湖がありました。およそ、ソブノールやガシヨーンノールの水が干上がるなんてことは歴史上ありませんでした。現在は、これまでなかったような旱魃になっています。湖には白鳥が少なくても時おり見かけました。黄鴨はたくさんいました。黄鴨は遅くまでいて、ほとんど秋の終わりか冬の始まりまでいて、翌春、最初に来る鳥でした。湖には貝類がたくさんいました。魚もいました。モンゴル人は魚肉を食べません。魚の命を助けるのが善行だと言います。魚は長寿の動物なので魚を助ければ長生きすると言います。逆に、魚を食べると命が短くなると禁じていました。湖にはホルス(葦)やジェゲス(菖蒲)がたくさんありました。湖や川の水が多いと、雨もたくさん降りました。現在では、湖が干上がってなくなり、雨も降らなくなったのですよ。現状はわたしの小さいころとはまったく違っていました。

——あなたはいつ結婚なさいましたか？ご自身のご家族について少し話していただけませんか？

わたしは中華人民共和国が成立する一年前、一九四八年に結婚しました。旗のノヨンの嫁になるなんて考えてもみませんでした。人の運命は点からもと定まったものなのですね。生きていくのがやつとの民の子であるわたしが、旗長の家族の一員になるなんて、本当に上昇でしたよ。わたしの夫をみなさんはごぞんじでしょう。エジネー旗のノヨンの息子エルデニゲレルです。自分や自分の家族のことより旗の人びとのことをいつも考える人でした。エジネー旗の歴史書に書かれているので、わたしが話す必要はないでしょう。「ウマに乗っている人のおかげで歩く」と言いますけれども、本当に良い人のおかげで幸せでした。中国文化大革命のときの苦勞を除けば、良い人のおかげで幸せです、今も。

わたしには四人の子どもがいます。三人の息子と一人の娘です。わたしが嫁いで来たとき、夫はエジネー旗で最初のモンゴル小学校の校長でした。舅は旗長でした。わたしが結婚した翌年から、戦争が起こり、舅は旗の平和を守るために、共産党の指導を受けて、エジネー旗を平和的に解放しました。一九四九年に中華人民共和国が成立してからも、すごく良い状況でした。共産党は偉大な党です。すべての人びとに平等な権利を与えて、幸せに生活する道を開いてくれました。党のおかげで、わたしはエジネー旗の第七、第八期の政協常務委員、アラシャー盟の第一、第二、第三回の政協常務委員に選ばれて、たびたび会議に参加し、勉強し、向上しました。わたしの姑も同様に教養の高い人でした。

ところが、一九六六年になると中国に文化大革命が始まり、わたしたちはみな黒幫になりました。わたしたちは現在の甘粛省の肅北県に追放されました。夫は職場を追われ、ジャルガラント・ソムのナランボラグ・ガツァーに行かされ、労働改造されました。その後、「売国奴」「烏蘭夫の手先」「内人党(内蒙古人民革命党)」などいろいろな名前をつけられて、肅北に追放されました。そこで約十年暮らしてから、一九七五年にエジネーに戻ってきました。この十年間の生活の味をこぼで表すのはとても難しいことです。これもエジネー旗の歴史と関係があります。歴史書に書いてあるでしょうから、わたしが話してどうなりますか。肅北ではジョン(壁のないゲル)で暮らし、家畜を放牧していました。

一九七九年にわたしたちの名譽が回復されました。それから、再び、革命の仕事に参加してきたのですよ。一九八〇年から始まり、盟、旗の政協常務委員を務めてきました。現在はお年老いしました。わたしの資料は歴史書にあるでしょう。党と人民がわたしを信頼して、いろいろな仕事の機会を与えてくれました。モンゴルの諺で「山を雪が、人を齡が」と言いますが、それは本当です。現在では仕事をするとどころか、かえって人に迷惑をかけるようになっていきます。いまは七十を過ぎて、もう八十に近づいていますよ！

——モンゴルの結婚式について教えてくださいませんか？

え、トルゴードの結婚は複雑ですよ。むかしはほとんど両親が約束していました。突然、嫁にもらいたいと言って、酒とハダグ（儀礼用絹布）を持って人が来ます。これを「アム・タートル」と言う、といった具合です。このとき、双方の年長者たちの意見が合って、息子と娘を結婚させることに同意すれば、宴会をして大いに酔います。それは最初の一步です。そのあと、「ズブチ・アブナ」と言って花婿の側から信頼できる年長者が来て、結婚式について話し合います。ゲルを建てる、家畜を分ける、衣服や布の数を決める、相性をみる、占いをしてもらって日取りを決めるなど話し合って決めます。それから、結婚する二人を連れて僧侶あるいは古い師のところへゆき、二人の生年を告げて、縁や将来についてみてもらいます。先祖についても考慮します。こうして相性がよければ、よき日を選んで決めます。

結婚当日には、花婿が朝早く、花嫁を迎えに来ます。奇数の人数で来て、偶数の人数で戻ります。花嫁のほうの結婚式の年長者から「狩人かと言えば銃がない、旅行者かと言えば荷物がない、誰の部下でどこへ行くつもりですか？」と来た人たちに質問します。すると、「探しても見つからない玉の宝、求めても手に入らない真珠の宝がそちらにあると聞いてわざわざやって来ました」と、花婿のほうに答えます。それに対して応答する暇もなくすぐに下馬して、少々酒を飲みます。

花嫁の生まれと相性の合う生まれ（吉祥年の人）で、家族がそろい、温和で、有名で、全福の人が同行します。このとき、「結婚式の三つの克服」と言うゲームがあります。一番目は羊頭を投げること。二番目は銃で撃つこと。と言うのは、花嫁を鬼が追いかけると言う話があるからです。それで、銃を撃って鬼を追い払うと言います。三番目は火打石をうつこと。花嫁と花婿の両方から一人ずつ出てきて、火打石をうつ競争をします。先に火をつけたほうが賞品をもらいます。羊頭を投げることと火打石を競うという二種類のゲームには吉事の意味があります。花嫁側と花婿側の親戚たちのどちらが先に羊頭を受け取ったり、火をつけたらすれば、そちらが主導権を握ると言います。そもそも楽しいゲームです。

花嫁を連れてゆき、新しいゲルの前に真っ白のフェルトを敷いて、脛骨を握って、黄色い太陽に膝をついて礼拝します。

かぎタバコを交換する儀式をおこなうとき、花嫁と義父が直接交換することは許されません。必ず、吉祥年の兄嫁か、あるいは他の人が仲介します。

花嫁にお玉を持たせる儀式と言うのがあります。花嫁がお玉を持って、鍋いっぱいのお乳あるいは飯からよそって、五徳を回って、捧げものを振りまき、火や五徳を祝福します。結婚式の三日目は「フシグ・タイラハ（仕切りをとりはずす）」と名付けられています。これは結婚式の禁忌が解かれるという意味です。

——もし結婚して三年経っても、子どもが生まれなかったらお嫁さんを家から追い出すといった習慣はありますか？

おお、そんな習慣はありません。子どもが生まれなければ、養子をもらいます。モンゴル

人は「産んだより育てたほう」と言つて。養子であれ、嫁から生まれた子であれ、同じように愛します。ときに、養子のほうが愛おしいことだつてありますよ！わたしの長男は養子です。エジネー旗では自分の子を養子に出したり、ほかの人から養子をもたらつたりする場合がたくさんあります。子どもなら、産んだ子どもももらった子ども同様に扱います。子どもを育てると言うことは、自分が産んでも、もらつても同じですよ。

わたしは出産に苦しみませんでした。産んでから三日たてば、起きて立ち働いていました。子どもを産んだときには、ヒツジの腱や膝を煮た肉汁をもらいます。必ず、新しく屠つたヒツジの肉汁に穀類を煮て飲みます。子どもが生まれてから七日経つと、「へその緒が落ちたら洗う」と言う小さな宴を催します。赤ん坊が生まれると、汗や泥で汚れている人や遠来の客は家に入れないと言う禁忌があります。立ち入り禁止です。子どもを育てるために注意するのです。子どもが月足らずで生まれたら、自力で乳を吸うことができず、疲れます。そういうときは、乳を搾つて綿に沁み込ませ、栄養を与えて、人にしてゆきます。

——故郷、水草について話していただけますか？

もともと故郷には水が豊富でした。雨も良く降り、三つの川には水が満杯に流れていました。年によつてはたまに、少々早魃であれば、オボを祭ればすぐに雨が降っていました。普通は五月にオボを祭ります。エジネー旗では五月二十日にダシ・オボを祭つて、五月二十二日にバヤンボグドのオボを祭っていました。祭りが終わると雨も降りはじめました。

井戸を掘るときも、簡単に水が出ました。一メートルぐらい掘ります。深く掘ると言つても、二メートルぐらいで水が出ます。エジネー川の水はそもそもとても透明できれいな水でした。

川の両側に胡楊とジグドが密集していました。秋になると、胡楊の葉が落ちて、地面を覆っていました。家畜はそれを食べて越冬しました。ジグドも採つて家畜を養いました。ジグドの実と葉を家畜は好みます。この木は硬質でしっかりと立っているのです、さまざまな容器を作れば丈夫ですし、また美しく見ると言います。父は大工でしたから、木の性質についてはよく知っていたのです。

ザグと言う、燃やすと暖かく長持ちする木もありました。ラクダの好物です。そして、ザグのある砂地にはツアガン・ゴヨウ（肉蓯蓉）もよく生えていました。ザグとツアガン・ゴヨウは命がつながっていると年寄りが話したものです。ツアガン・ゴヨウは薬用植物です。ツアガン（白）を薬にするのですよ。胃腸に効くと言います。シヘル・ウブス（甘草）と言うのも薬用植物でした。咳を止め、肺に効きます。咳のひどいとき、シヘル・ウブスを一日中咬んでいれば治るそうです。こんなそんないろいろなすばらしい植物も今日、ますます少なくなっています。それもまた、湖が干上がっていることと関連しているとわたしは思います。

ソブノールの水はどのぐらいあつたと想像できますか？ソブノールの北側にサイルチョンジの寺と言つてのがあります。サイルチョンジはとても高いところですよ。サイルチョンジ寺から眺めると、ソブノールは果てしなく大きな湖に見えたものです。その美しい水をたたえた湖に、いろいろな魚が始まり、さまざまな鳥が渡つて来ていました。湖の主として金の子馬がいると言う話もありました。ガシオンノールも物語の多い湖ですよ。

小さい湖もたくさんありました。ジンスト湖、エレインツオンジ湖、ヤブライ湖、オンツ湖、フルジグド湖などたくさん湖がありました。ゴロナイ川、ゴイザ川など川もまたたくさんありました。エジネー川は祁連山から来る、けがれない永遠の聖水だと言つて、けがれたものを洗わず、透明で美しい川でしたよ。現在は川も湖が枯れて、水が少なくなり、自然がすっかり変わっています。

二〇〇二年の夏に初めて聞き取りをおこない、二〇〇三年九月四日にエジネー旗ダライフ  
ブ鎮にあるエー・ボルさん宅で二回目の聞き取りをおこなった。エー・ボルさんは二〇〇四年  
一月二十八日に亡くなったので、再度聞き取りをすることはできなかつた。合掌。

アビルミドさんは寅年生まれ。一九三八年の春、エジネー旗のサイハントーライ・ソムのザーンツァガンと言うところで、トルゴードのゴンゴルジャブさんの唯一の娘として生まれた。

——さあ、幼いころの草地、水や草について話してくださいませか？

わたしの幼いころ、わたしの家はダンウイン湖岸で暮らしていました。四十年代の初めに、カザフ族から逃れて、サイハントーライの東南のフフジグドと言うところにやって来て暮らしていました。一九五八年に人民公社が成立して、ボル山の人たちを下流へ移動させ、サイハントーライに送り、サイハントーライの人たちをサイハンノールへ移動させるときに、わが家はほかの人びとと一緒にサイハンノールにやって来て、そこで人民公社に組織され、サイハンノール生産隊の牧民になりました。

わたしの父はホボクサイルのトルゴード人で、名前はゴンゴルジャブで、母の名前はチャルマーと言います。わたしは幼いころ、百余頭のヤギ、ヒツジ、二十頭くらいのラクダ、十頭くらいのウシ、三〜五頭のウマ、少ないけれども五種類の家畜のそろった、自給自足のできる家だったのです。

わたしは幼いころ、入学して勉強したいと強く希望していましたけれども、そんな機会はなく、独学しました。草原の中の水たまりの乾いたところにアルファベットを書いて、人に教えてもらって記憶しているうちに、モンゴル文字の読み書きができるようになりました。そして、手に入った本を読んできました。この一生でいろいろな本や物語を読みました。わたし自身は正式の学校に入って教育を受けることができませんでした。それは一生の後悔となりました。同じ後悔を子どもたちにもたせないために、努めて子どもたちすべてを学校に通わせました。

わたしには六人の子どもがいます。一人を幼いころに親戚に養子として出して、一人が石炭からのガス中毒で死にました。残りの四人が教育を受けて、自分の家族をもち、仕事に頑張っています。長女と次女は双子で、名前はナラントヤーとナランチメグです。朝、日がぼるときに生まれたので、二人には太陽と関係のある名前（ナランはモンゴル語で太陽の意）をつけました。幼いころ二人はよく似ていたのですが、他人は区別がつかないと言っていました。二人は同級生で、大学を卒業して帰って来ました。

彼女らの妹にアルタンツエツエグがいます。幼いころ、親戚に養子に出しました。アルタンツエツエグも二人の姉と一緒に通学し、大学を卒業して旗の仕事をして、さきごろ副旗長になりました。アルタンツエツエグの下にバトボヤン、バトムンケ、バトチェンケルと三人の子どもがいました。バトムンケは石炭のガス中毒で亡くなりました。子ども六人のうち三人が大学を卒業して、一人が専門学校を卒業して、もう二人が中学校と高校を卒業しました。アルタンツエツエグは幼いころ養子に出したので、養父母が彼女に教育を受けさせました。わたしのおかげとは言えません。

わたしの夫はトウブドウンと言います。巳年で、一九二九年に生まれました。生産隊でわたしたちには子どもが多かったので、貧しい生活をしていましたけれども、どうしても子どもたちを学校に通わせるために頑張ってきました。文化大革命のときには、本当に辛い生活をしていました。一九六八年に文化大革命が厳しくなるとき、わたしの両親は「富牧」とされて、夫はトルゴード党とされて批判され、ゲル、家畜などをすべて奪われて、「黒幫の家族」とされて、どんな権利、自由もなくなりました。生産隊の決定に従って、痩せていた家畜を選んで、何年間放牧しました。わたしたちは「黒幫の家族」ですから、隊から痩せていた家畜を放牧しろと言われても、文句を言わずに放牧していました。それで、数年間、痩せた家畜を放牧して、素っ裸の子どもたちと一緒に厳しい生活を経験しました。夫は文化大革命のとき、殴られて、労苦を味わい、病気にかかってしまいました。そのせいで一九九三年に突然、脳の神経が切れ

て、六十五歳でそれほど年老いていないのに亡くなりました。

一九八二年の生産請負制のときに、ソブノール・ソムのバヤンボラグ・ガツアーに移動してきて、隊から十頭のラクダ、八十頭のヤギ、ヒツジを配分され放牧しました。二〇〇〇年から、エジネー旗中心地に来て、孫のザンダンの世話をし、学校に通わせています。

——あなたは助産婦だとうかがいました。いつどのように学んだのですか？

一九五五年から一九五六年まで一年間、エジネー旗の病院で助産について勉強しました。わたしは何にせよ勉強するのが好きです。モンゴル語も独学で勉強しました。識字者でしたので、みながわたしを信じて、この技術をわたしに勉強させたのでしょうか。その技術を勉強してから今まで五十〜六十人の子どもを取り上げました。事故などありませんでした。それで、優秀な助産婦にもなりました。若いころ希望をもって努力していました。人びともわたしを信じて、旗やバグの代表に選ばれました。エジネー旗の青年団の大会に三回参加し、バグ（隊に相当する行政単位）を代表としてソブノール人民代表大会に出席していました。

両親の教え、党と人びとのおかげで、近隣と仲良く、老人を尊敬し、子どもを愛し、誰にでも正直で、真心でつきあうという習慣でした。仕事に真面目で、勤勉で、温和であることを重んじ、子どもたちにもそのように教育してきました。それで、人びとから信頼されるのです。故郷ではわたしを「穏やかな母」と敬して呼んでいました。それはわたしの穏和な性格と関係すると思います。

助産婦というのは母と赤ん坊の命と健康に関わる重大な仕事でしょう。それに、出産時には苦しむ人を安んじて、できるだけすばやく安産させるのは、身も心も疲れ、経験も技術も求められる重い仕事です。出産するとき、悩んでいる人をみたら、すぐ苦しんでいるだろうと思ひ、早く休ませてあげようと汗だくですすって取り上げました。ある人は子どもを産んだ後に、胎盤が出ない（後産のこと）のか、あるいは疲れ過ぎのせいなのか、失神することもあります。そんなときは、手で治すほかに、薬や汁などの一般的知識も必要です。

いろんなことをわたしは病院で助産について勉強していたときに身に付けました。助産する仕事の中に学んだことがらもあります。赤ん坊のへその緒を切ると言うのも重要なことですよ。赤ん坊のへその緒を切るとき、長短が適切でなければいけません。長いと治りにくくなり、凸になって出臍になります。短かく切りすぎると縛りにくくなります。すると、子どものおしっこが多くなります。大きくなっても、おねしょをする子どもになります。母体の子宮のことも気をつけなければなりません。子どもを産むときと月経のときにかかった病気は治りにくいものです。ですから非常に気をつけなければなりません。助産が多いと目が悪くなると年寄りがよく言いますが、本当かもしれない。現在、わたしの視力は少々悪くなっています。それが、助産者になったことと関係があるかなと思っています。

——あなたは歌がお上手だとお聞きしました。オルティンドー（ゆったりした民謡）を歌うのですか？誰から教わったのですか？

ええ、わたしは幼いころ母から学びました。わたしの母も数多くの民謡を歌うことができた人でした。それに、結婚式などの宴会で人びとについて歌っているうちに学んだものもたくさんあります。オルティンドーを歌うと、わたしの声がよく出ます。それで、知り合いの人びとがわたしを誘って、結婚式などで歌わせていました。「あなたは歌がうまい」と褒めてくれ、わたしは喜んで歌っていました。それで、二〇〇五年五月にアラシャー盟民謡協会が歌を収集していたとき、わたしは百首近くのトルゴード民謡と三十首以上のハルハ民謡を歌い、録音されました。この録音はアラシャー盟中心にあるでしょう。

モンゴル民謡を歌うのがわたしは大好きです。少しばかり才能があるかなと思っ  
ています。歌を歌えば歌うほど、声はよくなる感じがすし、気持ちも広がります。結婚式などでモンゴル  
民謡を歌っていると、お酒をいくら飲んでも酔っぱらいません。気持ちがよくなるからでしょ  
う。歌を歌うことよって、アルコールが発散すると老人は本当に話しますよ。わたしの好き  
な歌は「ウレメイ・ボヤン」「フレン・ヘール・モリ」「ハサク・ザンダン・ハル」「オナガン・  
ハル」「アーリン・ハルガイ・モド」などいろいろな歌があります。普通に話していても、歌の  
名前ははっきり思い出しません。歌えば多くの歌がつきつきと出てきます。ときには、忘れて  
いた歌も思い出されます。

二〇〇二年に初めてソブノールで聞き取りをおこない、二〇〇五年にエジネー旗ドライブ  
ブ鎮にあるアビルミドさん宅で二回目の聞き取りをおこなった。アビルミドさんは二〇〇五年  
五月九日に病気で亡くなった。二〇〇六年の九月十八日から二〇日までエジネー旗で現地調査  
をおこなうときに再訪しようと予定していたけれども、間に合わなかった。合掌。

あとがき

内モンゴルアラシヤ聯盟のエジネー旗において長い時間をかけて実施された現地調査はまだ完全に終わったわけではないが、ここに、これまでの研究結果の一部として《エジネーに生きる母たちの生涯》と題するライフヒストリーを発行することとなった。

ライフヒストリーをめぐる聞き取り調査に関して、少し説明を加えておきたい。今回ここに記録することのできた十七人の母たちに対して、私たちはほぼ二・三回訪問し、あるいは人によっては四回訪問している。

まず、エー・ボル母（エジネー旗にはボルと言う名前の女性が多いので、地元の人たちはエー・ボルと名付けて呼ぶ習慣がある）については遺憾を残しているので、ぜひとも言及しておきたい。エー・ボル母は二〇〇二年夏、当地の母たちを訪問しようとした時に最初に訪問した人である。そのときエー・ボル母は私たちに対して優しく、情熱的に、個人の経験を語り、また中国の文化大革命に見舞われたときのことや、さらにエジネー旗における伝統的な風俗や婚俗など、いろいろなことについて語ってくれた。しかし、私たちは経験不足であったため、そのときに録音もせず、またメモをとることも十分ではなかった。その時点で、私たちはこんな形で母たちのライフヒストリーをまとめることになろうとはまだ思っていなかった。項目ごとに断片的にメモをとるだけで、相互に関連しあっている全体を記録することがなかったのである。その後、このような本を発行する予定ができたために、二〇〇三年九月四日、二度目に彼女を訪問した。ところが、あいにく彼女は風邪を引き、具合が悪かったため、詳しく聞き取りすることは控えた。少しだけ語ってもらったところで彼女は別のところに行ってしまった。そこで、二〇〇四年五月三日、再度訪問したのだが、残念なことに、エー・ボル母はもう亡くなっていた。私たちにとっては、遺憾を永遠に残すこととなった次第である。エー・ボル母については年代等についてライフヒストリーに詳しく書き入れることはもはやできなくなってしまったのである。

私たちが本格的に訪問した二十三人の母たちの中で、バラマ、ソノム、シャグダル、ドラム、バイダイ、ツェンドーら六人の母たちのライフヒストリーについて、この書に書き入れることができなかった。バラマさんは、現地調査の初期の段階で訪問した一人である。この母は、学校に通って教育を受けたことがあるため、一九五七年から共産党の幹部となり、三〇年間働いて、一九八七年に退職した。長い間、女性に関わる仕事と若者に関わる仕事に従事してきた。私たちが初めて訪問したとき、彼女はすでに七〇歳に近い老人であったにもかかわらず、若者に人気の携帯電話（地元で使う電話、中国語で小灵通）を持っていて、聞き取り中にも電話に出では、私たちを大いに楽しませてくれた。その後、二度訪問したけれども、お忙しい様子で、あいにく留守であり、聞き取りは進まなかった。後日また機会を得て、詳しく話を聞きたいと願っており、本書には入れていない。

ソノムさんも優しく、豊かな生活経験を持っていた母であり、素直で良心的な人である。シャグダルさんは温和で無口だったけれども、私たちの質問にできるだけ満足な回答をするために気を配ってくださっていた。バイダイ、ドラム、ツェンドーさんらも暖かく優しい母たちであり、私たちの訪問に対して非常に真面目で、自分がわからない場合には、周りの人から聞いてきてくれていた。そうした配慮に心から感謝している。これら六人の母たちについては二度目の訪問がかなっていない。詳しく聞けていないところをまた聞かせていただく機会があるだろうと思う、ひとまず本書には掲載しないままにしておく。いつの日かまた訪問してから、別の形で発表することとしたい。

最後に、心温かく迎え入れてさまざまなことをご教示くださったすべての母たちに心から深い感謝の意を表す。また今回の現地調査から本書の刊行に至るまで、あらゆる協力を惜しみなく与えてくださった、日本の総合地球環境学研究所の中尾正義先生に心から深謝する次第である。

中国・中央民族大学

サランゲレル

日本・国立民族学博物館（日本学術振興会特別研究員）児玉香菜子

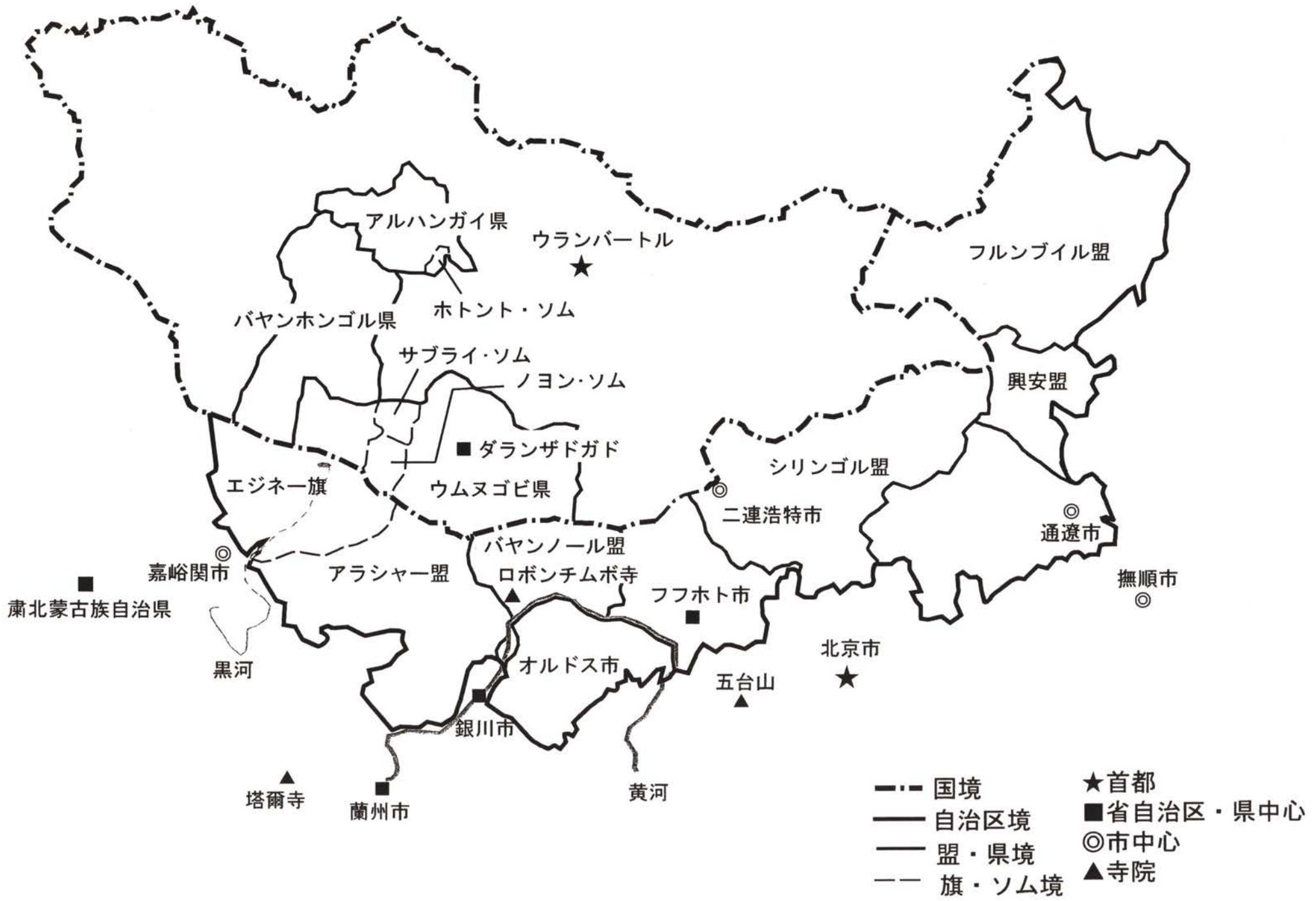
二〇〇六年十二月

#### 日本語版に係る追記

邦訳にあたっては、フフバートル（昭和女子大学講師）さんならびに永花（中央民族大学大学院生）さんに多大なるご尽力を賜った。記して感謝する。ただし、本書における訳語の選択、表記の統一、注記等については一切、編者が責任を負うものである。注については、初出の際および必要に応じて随時○を付して簡略に記しておいた。なお、読みやすさを確保するために、モンゴル語テキスト文よりも頻繁に改行していることをご了承いただきたい。試訳にとどまっている部分も多々残しており、大方のご叱正をお願いする次第である。

日本・国立民族学博物館 小長谷有紀

二〇〇七年一月



アルハンガイ県  
 ウランバートル ★  
 フルンブイル盟  
 バヤンホンゴル県  
 ホトント・ソム  
 サブライ・ソム  
 ノヨン・ソム  
 ■ ダランザドガド  
 エジネー旗  
 ウムヌゴビ県  
 シリングオル盟  
 二連浩特市 ◎  
 興安盟  
 通遼市 ◎  
 嘉峪関市 ◎  
 アラシャー盟  
 バヤンノール盟  
 ロボンチムボ寺 ▲  
 フフホト市 ■  
 撫順市 ◎  
 肅北蒙古族自治県 ■  
 黒河  
 北京市 ★  
 五台山 ▲  
 オルドス市 ■  
 銀川市 ■  
 黄河  
 塔爾寺 ▲  
 蘭州市 ■

表 植物名一覧表—1

モンゴル名	科	漢語名	学名	特徴
アスマグ				
ウエト・オラーン				
ウスト・ナプチ	アカザ科	猪毛菜	<i>Salsola collina</i> Pall.	1年生草本
ウスン・ウブス	ツユクサ科	水草	<i>Floscopa scandens</i> Lour.	多年生草本
ウムヒー・ウブス	キク科	臭蒿	<i>Artemisia hedinii</i> Ostenf. et Pauls.	1年生草本
ウルグスト・ハムホグ	アカザ科	単翅猪毛菜、刺蓬	<i>Salsola monoptera</i> Bunge.	1年生草本
オスン・ハムホグ	アカザ科	猪毛菜	<i>Salsola collina</i> Pall.	1年生草本
オロス	クワ科	大麻	<i>Cannabis sativa</i> L.	1年生草本
ゴヨウ	鎖陽科	鎖陽	<i>Cynomorium songaricum</i> Rupr.	多年生肉質寄生草本
ザグ	アカザ科	梭梭	<i>Haloxylon ammodendron</i> (C.A.Mey.) Bunge	半灌木
ジェゲス	カヤツリグサ科	蘆草	<i>Scirpus triqueter</i> L.	多年生草本
ジグド	グミ科	沙棗	<i>Elaeagnus angustifolia</i> L.	灌木、小高木
シヘル・ウブス	マメ科	甘草	<i>Glycyrrhiza uralensis</i> Fisch.	多年生草本
シヘル・ボヤー	マメ科	甘草	<i>Glycyrrhiza uralensis</i> Fisch.	多年生草本
シャグシグ	イネ科	水茅	<i>Scolochloa festuacea</i> (Willd.) Link	多年生草本
ザラー・オロン				
シャラルジ	キク科	蒿	<i>Artemisia</i> L.	草本、半灌木、小灌木
シャル・ツェツェグ	ユリ科	黄花菜	<i>Hemerocallis citrina</i> Baroni.	多年生草本
シャル・フーレグ	アカザ科	鹽角草	<i>Salicornia europaea</i> L.	1年生草本
シャル・ボダルガナ	アカザ科	細枝鹽爪爪	<i>Kalidium fragile</i> Fenzl.	半灌木
シャル・モドン・ドルス	アカザ科	小檉	<i>chenopodium serotinum</i> L.	1年生草本

表 植物名一覧表—2

モンゴル名	科	漢語名	学名	特徴
ゼールゲネ	マオウ科	麻黄、草麻黄	<i>Ephedra sinica</i> Stapf.	草本状灌木
ゼルリグ・オロス	クワ科	野大麻	<i>Cannabis sativa</i> L. f. <i>ruderalis</i> (Janisch.) Chu	1年生草本
ソハイ	ギョリュウ科	紅柳	<i>Tamarix ramosissima</i> Ledeb.	灌木、小高木
ソリ	イネ科	沙鞭、沙竹	<i>Psammochloa villosa</i> (Trin.) Bor.	多年生草本
ターナ	ユリ科	碱韭	<i>Allium polyrrhizum</i> Turcz. ex Regel	多年生草本
チャツアルガナ	グミ科	沙棘	<i>Hippophae rhamnoides</i> L. subsp. <i>Sinensis</i> Rousi	灌木、高木
チョルフル／チュルゲル	アカザ科	沙蓬、沙米	<i>Agriophyllum pungens</i> (Vaul) Link ex A. Dietr.	1年生草本
ツァガン・ゴヨウ	ハマウツボ科	肉苁蓉	<i>Cistanche deserticola</i> Ma.	多年生草本
ツァガン・ヘレス	アカザ科	碱蓬属	<i>Suaeda</i> Forsk.	1年生草本、半灌木、灌木
ツェゲレグ	ハマビシ科	駱駝蓬	<i>Peganum harmala</i> L.	多年生草本
トウンゲ	イネ科	穎草	<i>Leymus secalinus</i> (Georgi) Tzvel.	多年生
トーライ	ヤナギ科	胡楊	<i>Populus euphratica</i> Oliv.	高木
ハムホグ	アカザ科	猪毛菜	<i>Salsola collina</i> Pall.	1年生草本
ハラルタ	ツツジ科	黄花杜鹃	<i>Rhododendron lutescens</i> Franch.	灌木
バル・シャバグ	キク科	鉄杵蒿	<i>Tripolium vulgare</i> Ness.	1年生草本
ハル・ヘレス	アカザ科	鹽地碱蓬	<i>Suaeda salsa</i> (L.) Pall.	1年生草本
ハルマグ	ハマビシ科	小果白刺	<i>Nitraria sibirica</i> Pall.	灌木
ヒヤグ／キヤグ	イネ科	羊草	<i>Leymus chinensis</i> (Trin.) Tzvel.	多年生
ブゲレゲルジゲネ				
フジ・ウブス	ミカン科	北芸香	<i>Haplophyllum dauricum</i> (L.) Juss.	多年生草本

表 植物名一覧表—3

モンゴル名	科	漢語名	学名	特徴
フムール	ユリ科	蒙古韭、蒙古葱	<i>Allium mongolicum</i> Regel.	多年生草本
ヘレス	アカザ科	鹽角草	<i>Salicornia europaea</i> L.	1年生草本
ホシ・ハムホグ	アカザ科	毛果繩虫実	<i>Corispermum declinatum</i> Steph. ex Stev. var. <i>tylocarpum</i> (Hance) Tsien et C.G.Ma.	1年生沙生植物
ボトゴン・タバグ	ハマビシ科	石生霸王	<i>Zygophyllum rosovii</i> Bunge.	多年生草本
ボド・ボダルガナ	アカザ科	珍珠猪毛菜	<i>Salsola passerina</i> Bunge.	半灌木
ホニン・シャラルジ	キク科	碱蒿	<i>Artemisia anethifolia</i> Web. ex Stechm.	1年生草本 2年生草本
ホビスハン	キク科	叉枝鴉葱	<i>Scorzonera muriculata</i> Chang.	半灌木状草本
ボルガス	ヤナギ	烏柳、沙柳	<i>Salix cheilophila</i> Schneid.	灌木、小高木
ホルス	イネ科	芦葦	<i>Phragmites australis</i> (Cav) Trin. ex Steud.	多年生草本
ホロン・ボヤー	マメ科	苦豆子	<i>Sophora alopecuroides</i> L.	多年生草本
ホンホ・ウブス	マメ科	苦馬豆	<i>Sphaerophysa salsula</i> (Pall.) DC.	半灌木 多年生草本
マルガイン・ザラー・ウブス				
モリン・シャラルジ	キク科	黄沙蒿	<i>Artemisia songarica</i> Schrenk.	半灌木
ローリ	アカザ科	藜	<i>Chenopodium album</i> L.	一年生草本

## 注

- ・ 科名、漢語名、学名の空欄は不明。
- ・ 植物のモンゴル名からの科名、漢語名、学名の同定は、参考文献およびサランゲレルによる。
- ・ 表の作成は児玉香菜子による。

植物名に関する参考文献

- 巴達拉虎主編(一九八八)『内蒙古額濟納旗地名誌』額濟納旗地名委員會編輯出版  
劉英心主編、徳岡正三訳(二〇〇二)『中国砂漠・沙地植物図鑑』東方書店
- 内蒙古植物誌編輯委員會編(一九九八)『内蒙古植物誌』第二版第一卷、内蒙古人民出版社
- 内蒙古植物誌編輯委員會編(一九九二)『内蒙古植物誌』第二版第二卷、内蒙古人民出版社
- 内蒙古植物誌編輯委員會編(一九九〇)『内蒙古植物誌』第二版第三卷、内蒙古人民出版社
- 内蒙古植物誌編輯委員會編(一九九二)『内蒙古植物誌』第二版第四卷、内蒙古人民出版社
- 内蒙古植物誌編輯委員會編(一九九四)『内蒙古植物誌』第二版第五卷、内蒙古人民出版社
- 温都蘇編(一九九二)『蒙俄拉漢植物名稱』内蒙古人民出版社
- 中国科学院中国植物誌編輯委員會編(一九九七)『中国植物誌』第十三卷第三分冊、科学出版社
- 中国科学院中国植物誌編輯委員會編(一九九三)『中国植物誌』第四二卷第一分冊、科学出版社
- 中国科学院中国植物誌編輯委員會編(一九九九)『中国植物誌』第五七卷第一分冊、科学出版社
- 中国科学院中国植物誌編輯委員會編(二〇〇六)『中国植物誌中名和拉丁名総索引』科学出版社



ユムさん



ボルさん



カンダさん



ジョージョー・ボルさん



ツェレンナドメドさん



ナランさん



マーモーハイさん



デムジドさん



ドルマンツォーさん



ドルガルジャブさん



マリヤさん



ジブザンさん



チャルマーさん



ドルガルツォーさん



ドルマジャブさん



エー・ボルさん



アビルミドさん



バラマさん



ソノムさん



シャグダルさん



ドラムさん



バイダイさん



ツェンドーさん